
終わりの続きに

桃Kan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりの続きに

【Nコード】

N8836Q

【作者名】

桃Kan

【あらすじ】

これは一人の、答えを得た一人の英霊の物語。

プロローグ（前書き）

これは答えを得た、英霊エミヤの物語。

プロローグ

広がるのは目を覆いたくなるほどの輝き。
光がすべてを包み込む黄金の海原のようだ。

そこにぽつんと佇む一つの影がある。

そう、それはわが親愛なる主、そして最高の友人だった人だ。

「大丈夫だよ」

強がりだった。

そう一言告げて、いつかのように去っていきればいい。

そう思っていた。

「答えは得た。大丈夫だよ、遠坂」

もう一度気丈に、ハッキリ思いを言葉にする。

さよならを明確にしていこう。

それが悲しかった。本当に最後になってしまう。

それならば、そうだからこそ、俺は笑顔でいたかったのだ。

「これから俺も、頑張っていくから」

それが本当に最後の言葉となった。

消え行く刹那に垣間見た、彼女の宝石のような笑顔を俺はこれから
先、何があっても忘れることはないだろう。

聖杯が消える。

最初からなかったようにその場から掻き消える。

そして俺はまた待ち続けるんだ。

再び、このセカイに帰ってくることを夢見て。

— i n t e r l u d e —

漂い流れるように“ナニカ”がそこにいる。

ここが何処なのか、それは分からない。
知りえない事実。知っていたはずの事象。

そう、ここはセカイの外側だ。

総てから隔絶された、総てのものを与えられた場所。

何が起こったのだろうか？

“ナニカ”が思いを描いた。
何かをしたいはずだったと。

それが使命であると、心に信じて疑わなかった思いを持っていたと。

そう、殺したかったのだ。

理想を抱いた自分を。綺麗だから、カッコいいからと借り物の理想
を抱き続けた自分を。

『しかし見ろ、今の私を……俺を見ろ！！かつての自分に敗北し、

その思いすら間違いであると気付かされた!』
言葉がカタチを成す。

不器用なまでに真っ直ぐなその言葉に呼応するように、空間が徐々に変質を始める。

『俺は……守りたかったんだ!』

握り締めた拳が、腕がカタチを成す。
血が滲むほどに力強く、しかし脆くも消え去りそうな其れは何かを
掴もうと必死に足掻くよう。

『だから、強くなりたかったんだよ!』
地を踏みしめた脚がカタチを成す。

シッカリと立ち上がり、何かに向けて必死に、ただ必死に道なき道を
歩き出そうとしていた。

『分かったんだ! 見つけたんだよ……』

そう、その姿はまるで昔に戻ったように幼い。しかしその瞳に宿
す光は、信じたものを決して疑おうとはしない。疑う心を捨て。た
だ真っ直ぐに前を見つめた。

『だから……戻して、戻してくれ……』

だが理解していたんだ。此処にいるから、自分は世界の『外』に
いるから、もうあの場所には戻れない。戻れるはずもないって。
ふと頬を過ぎる雫を感じた。そう、俺は涙を流していたんだ。
弱さ、不甲斐なさ、頼りなさ、その総てが俺に涙を流させていた。

ただ、一番大きかったこと。それは……。

『あいつに、もう一度あいつに会いたいんだ』

ポタリと涙が地に落ちる。

それがまるで波紋のように、水面を揺らすようにゆっくりとこのセカイに響き渡る。

それは何かのきっかけだったように、目を覆いたくなるような、でも優しい光を放ちながら、総てを包み込んだんだ。

— i n t e r l u d e o u t —

プロローグ（後書き）

はじめまして。読んでいただいた方ありがとうございました。
桃かんと言います。

かなり拙い文章になると思いますが、誠心誠意頑張りたいと思います。
す。よろしくお願いします。

目覚めの朝、決意のとき

「んっっ……」

窓から差し込む日差しが俺の顔を照らし、朝の訪れを伝える。

背に感じるひんやりとした硬い石の感触。

総てがあまりに懐かしい。もうはるか遠く、記憶の片隅に追いやっていたはずのものが俺を包み込んでいた。

―ああ、何でこんな夢を……こんなにも、こんなにも私は此処に戻って来たかったのだろうか？―

そう、夢でなくては困るんだ。私は前に進むと決めた。今与えられた時間の中で、ゆっくりとチャンスが来るのを待っていようと決めたのだから。

「コラ、士郎！またこんなところで寝ていたのかい？まったく……しょうがない子だねえ君は」

ふと懐かしい声が響く。そう、これも幻聴だ、幻だ。そう思いながら、声のするほうに目を向ける。

そこには記憶の中にハッキリと残る、優しい笑顔をした俺の憧れの人が佇んでいた。

「じ、じいさん（き、切嗣）……？」

それは俺を救ってくれた正義の味方の姿。此処にいるはずのない人。

「さあ、大河ちゃんも待っているんだ。早く居間においで？」

優しい笑顔が私を外に誘う。私は言われるがままに立ち上がり、そのまま出口へと足を進めた。

「嘘、だろ……？」

愕然とした。私は完全に目を疑い、その場にボォツと立ち尽くした。

目の前に広がったのは、私がかつて住んでいた庭の風景。流れるように広がる綺麗な風景だ。

「ほら、どうしたんだい、早く行こう？」

私の手を引き、ゆっくりと家に近付いて行く切嗣。私はそうしている内も、ずっと考えていた。

私は…英霊エミヤは聖杯によって世界に具現化されていた存在……。

「え？ ああ……うん、わかったよ」

そう、これではまるで過去に戻ってきたようではないか。

それから二週間が経とうとしていた。

そこで分かったことが二つあった。

どうやら私は、本当に過去……切嗣に助けられたすぐ後の時間に、こういうわけか戻ってきてしまったということ。

もう一つは私がこれまで経てきた時間の記憶、つまり英霊になってこれまで戦ってきた中で培われてきた知識がはっきりと残っているという事。

「一体、どうなってんだか」

一人縁側で空を見上げながら悪態を吐く。息の白色がまるで言葉に

カタチを持たせたみたいに、ずっと現れ消えていく。
なんだか不思議な気分だ。

此処でこうやって、空をこんなにも平穏な気持ちで眺めているなんて。

「私、なんで此処にいるんだ？」

そんなこと、分からなかった。ただこの二週間、ずっと怖かったんだ。

次に目を覚ましたとき、またあの何もない……自分のカタチも分からない場所に戻っているんじゃないかと。

「それだけは……それだけは嫌だ！」

グッと握り拳を作り眺めていた空にかざす。

すごく、すごく小さい拳だ。強くなりたくて、助けてくれたあの人に縋って、追いかけて、何とかあの人みたいになりたくって足掻いていたあの頃の拳だ。

でも、きっと違う、今は違う！

「私は、見つけたんだ。やりたいこと、すべきことを！」
何に語りかけるでもない。自分の決意をそっと口にする。

そう、私は……いや、俺は誓う。

この答えを見つけた自分の心に！

不器用なまでに信じる道を貫いたかつての自分に！
不器用な俺を支えていた、最高の友人たちに！

だから、強くなろう。やり直すために。

いつか来る、あの冬に向かって……俺は強くなる！

「パッツ！でたあゝ」

「あの、何さ、それ？」

翌日、俺は決意を固め、切嗣にこう切り出した。

「ねえ親父、頼むよ！俺に魔術を教えてくれ！」

「ヨシッ！いいよお。よく見てるんだあ」

ぽんと叩かれた両の手から飛び出したのは、数羽のハト。なんでこんなマジシャン紛いなことになっているか……。まあそんな具合で、切嗣の手から飛び出したハトは縦横無尽に居間を飛び回っていた。

というか、その決め言葉……。な、なんでさ。

「え？魔術を教えるって士郎が言うから……」

ニコッと意地悪な笑顔を浮かべながら、切嗣は俺をからかう。何だかひどく不快な気分だ。

「違う！そんな誰でも出来るようなやつじゃない！」

俺はお膳をドンと叩きつけ、切嗣の顔をジッと見つめた。

そう、この人には生半可なことを言っても通用しないことは分かっていた。だから此処は頑固に、絶対に譲らない気持ちを持って、切嗣に対することが必要だったんだ。

「俺が教わりたいのはそんな手品じゃない！ちゃんとした、魔術師が使う魔術だ！！」

「士郎……前にも言ったけど、僕は正義の味方じゃない。いや、正義の味方の成りそこないさ。だからそんな僕が教えたって……君はみんなを救えるヒーローにはなれないんだよ？」

すごく冷たい、でもどこか悲しさを孕んだ響きがゆっくりと俺に届いてくる。

何故だろう、それが俺にはとても優しい響きに聞こえたんだ。

だから俺は言わないといけない、そうじゃないんだって。

「違う！みんなを救いたいって……そうしか思っていないわけじゃない！」

上手く言える自信はなかった。ただこれを言わなきゃ俺は此処から先に進めない、そう思ったんだ。

「そりゃみんなを救えるヒーローになりたいよ。でも、そうじゃなくてさ……大事な人を守る、そんな正義の味方になりたいんだ！だから力が欲しいんだよ！」

そう、知っていたんだ、力がなければ出来ないことがある。俺が欲しかったのは大事な誰かを守る力だ。そのためならどんな痛みも厭わない。

覚悟は出来ていた。

俺が必死に言葉を綴っている間、切嗣は真剣な表情で俺の目を見つめていた。まるでその言葉に偽りがないかどうかを試すように。

「だから、だからっっ！痛くても、辛くても最初から諦めたくなんかないよ」

「うん、いいよ」

さらりと風がなびく様にその一言は返ってきた。

「――えっ？」

「うん、いいよ。教えてあげよう、僕の知る世界の神秘を」

満面の笑みを浮かべ、切嗣は俺の手をとる。

その笑顔はどこか、かつて俺を救ってくれたときのあの笑顔に似ていて。

俺は知らず、涙を流していたのだ。

目的に一步近付いて安堵したのだろうか？それとも握った親父の手が暖かかったからなのか？なぜかは分からない。

ただ、その笑顔を見ただけで、俺は幸せだった。

別れ

「月が、綺麗だね。士郎」

切嗣と二人、縁側で空を見上げている。

空には満月がクッキリと、その存在を露にしている。

「そう、だね。じいさん」

このときの俺は、もうそれ以上の言葉を口にすることは出来なくなっていた。

俺は理解していた。もうすぐ、別れのときが訪れるって。

それはかつて経験したことがある別れ。もう二度と経験したくはないと思っていた別れだ。

次第に家の外に出ることがなくなっていた切嗣。

表情も徐々に暗くなり、以前のような笑顔を見ることがも稀になっていた。

古い記憶の中、かつて一度体験した嫌な思い出を、俺は再び経験しようとしている。

変えられるものなら変えたかったんだ！でもこれは決して変わらない、変えることの出来ないことだと理解していた。

だからこそ、大事にしたかった。切嗣と共にいる時間を。

でも、それももうすぐ終わってしまうから……。

「ねえ、士郎。君は正義の味方になりたいかい？」

唐突に、静かに月を眺めていたはずの切嗣が俺に尋ねる。

俺はその問いに啞然としてしまった。その問いはあまりに穏やかだったから。

「正義の味方……うん、俺正義の味方になりたいよ」

そう、俺は正義の味方になるっていう『理想』を捨てることは出来ない。

でも、新しい生き方を見つけたんだ。

「正義の味方になりたい。でも、みんなを救えるなんて思っていない。俺は弱いから。でもさ、弱い弱いって言ってちゃ本当に守りたい人が出来たとき、守ることが出来ないなんて嫌だ。俺は……大事な人を守る、そんな正義の味方になりたいんだ！」

きっとこれはこんな言葉じゃ伝えきれないんだ。

でも切嗣は笑顔を見せてくれた。

いつもの……幸せそうな笑顔で。

「そう、だね。きっとみんなを救うより、大事な人をずっと守り続けていくことの方が辛いかもしれない。そんなときは今の決意を思い出すんだ。いいね？ 君は強い子だ……」

「お、……ありがとう、親父」

「ありがとう……しろろ。ぼく、は……きみの」

それが、切嗣と交わした最後の言葉になった。もう動くことのない、話すこともない。

今を真っ直ぐ見つめる。

冷たくなった親父を見ると、とても悲しくて涙が零れ落ちた。

ゆっくりと目を閉じる。

あの笑顔を思い出すと、嬉しくて、幸せで涙が零れた。

月明かりが照らす清涼な空気の中、俺は再び切嗣と別れた。きっとこれが最後の別れなんだ。

俺の、かつての理想への今生の別れ。

世界の始まり

親父が死んだ。

かつて、エミヤシロウの生き方の雛形だった人。理想だった人。

葬儀の手配や色々難しいことは、藤村のとその雷河じいさんが済ませてくれたおかげで、つつがなく終えることが出来た。

沢山の人が涙を流していた。藤ねえも、雷河じいさんも。

俺は泣けなかった、いや、もう泣く事が出来なかったんだ。だって、俺は覚悟を決めたから。切嗣が最後にそうであったように。

みんなの正義の味方じゃなく、誰かの……俺の正義の味方になってくれたように。

そうこうしている内に49日が過ぎ、ようやく俺の周りが静かになり始めていた。

「——つつつ、くっ！」

ゆっくりと、異質な“なにか”が身体を駆け巡っていく。

俺は理解している、それが魔力。今、行使しようとしているものが魔術。

切嗣はやっぱり『強化』以上の魔術を教えしてくれることはなかった。

ただそれ以上に、世界の神秘、世界の成り立ちについて教えてくれた。それを学んでいく中でも収穫はあったんだ。

相変わらず魔術回路もないこの身体だけど、『強化』を基礎からシツカリと身に着けていくなかで、確実に以前の自分より何かが変わっている自信があった。

しかし、上手くいくことの方が少なかった事も事実だった。

「ぐつつ、うあああ！」

木刀一本に、『強化』をかけるだけでも声を上げ、脱水症状を起こしてしまうほどの体たらくだ。結局、今の俺じゃ何にも進んじやいない。

「ハアハアア、はあ、————っ！ふう〜」

身体を蝕んでいた熱い鉄の塊が、そのカタチを消していく。それと同時に整えられていく呼吸、動悸。魔術というものがこんなにも身体を酷使するものだったなんて、久しく忘れていた。

「まったく、何してんだよ」

誰に言うでもなく投げ出された言葉。身体から立ち上る湯気と共に白い色を持ったそれが土蔵に響いて消えていく。

何もかもが新鮮で、でも憤りを隠せない。こうしていると思い出す、かつてこんな気持ちで日々を送っていたんだと。

「進歩なしの毎日……か」

俺は手元にあったタオルで汗を拭い、土蔵を後にすることにした。気が付けば月はすでに空の頂にあり、何かを告げるように俺を眺めている。

月に表情があるなら、もしかしたら俺のことを嘲笑っているのだろうか？

「それも風流ってな。さて、親父に挨拶して今日は寝るかな」

俺は独り言を呟きつつ、切嗣がかつて寝所に使っていた部屋へと歩を進めた。

気が付けば、寝る前にまず彼の部屋に行き、写真に語りかけることが日課になっていた。あまり人には知られたくない日課であったが、そうすることで切嗣との約束を忘れないでいられる。勝手にそう思っていたのだ。

切嗣の部屋に入り、ただじっと写真を見つめる。

一人になってからそれを毎日のように続けていると、切嗣に対する別の感情が俺の中で溢れてきていた。それは……切嗣に対する贖罪だった。

俺はこれから起こりえることを知っている。魔術師が殺し合うことも、これからこの地で多くの人が死に直面することも。それを知っているにもなお、俺はそれを止めようとせずにただ『時が来ていない』という言い訳をし続けていた。

そして、切嗣が最期まで思い続けたであろう『あの少女』と会わせてやれなかったこと……そのことが俺をどうしようもない絶望に駆り立てていた。

「ああ、こんなのはもう……」

そう、こんなことではもう、自分を正義の味方などと呼ぶことは出来ない。

それを少なくとも実行しようとしていたかつての自分にも、この理想を与えてくれた切嗣にも顔向けは出来ない。

結局俺は再び生を与えられて、自分が最も成し遂げたい思いを実

行に移すために行動してしまった。切嗣だって…もっと幸福な最期を迎えることが出来たかもしれないのに。

だからこれは、俺の贖罪なのだ。

「親父：俺、裏切ってばかりだ」

口の中に感じる鉄の味、こんなにも苦しいものだとは思わなかった。

ただ今はかつての理想の前で、これから自分がどうするべきなのか、それを考えなくてはいけない。

これが間違いであったとしても、もうそれを巻き戻すことは俺には出来ないのだから。

世界の始まり（後書き）

こんばんわ、これまで更新していた分を一部……というより大部分カットして更新を再開していきます。

これまで賛同いただいた方、本当にごめんなさい。ちょっとした面白いと思ってもらえる作品をかけるように頑張ります。

必要なもの

一人になってしまったこの衛宮の屋敷で、俺は思考を巡らせていた。

このままではいけない。ハッキリとそれだけは分かる。

俺は知識だけを有してこの繰返しの時間を過ごしている。

それがあれば、大抵のことは苦も無くこなすことが出来るだろう。魔術の運用もそれを動かす自らの肉体自体もどうにでも鍛練することが可能だ。

しかし、それではどうしても埋められないものは存在した。

「己の未熟さ……だな」

縁側に座りながら一人呟いた言葉に、どうすればいいのか分からないという考えしか正直浮かばなかった。

少なくとも戦いが起こるまでの間にかつての自分より強くなくてはならない。そうでなくては、俺の目的は達成されない。

つまるところ、自分自身の身体的能力を底上げしないとならない。そのための経験値が、この身体には少なすぎる。

「だったら、そうなるために行動を起こすしかない」

かつてしなかったこと、それをすればいい。

これから戦場に赴いてもいい、人外の者との戦いに身を投じてもいい。しかしそれにも問題はあある。

それは何の経験もないこの幼さでは、誰も自分を魔術の使える者として信じてはくれない、相手にしてはくれないということだ。

「そうするためのきっかけ……これが結局必要になるか」

穏やかに流れる時間の中、あまりに醜悪なことを考えているとい

う実感はあった。しかしすぐにでも動き出さなければいけない。一番手っ取り早い方法はどこかの魔術師と関わり合いになることだろう。

「遠坂、間桐……はダメだ」

一番初めに思い浮かんだこの二つの名門を、俺はあっさりと思考から外す。

そもそも俺の目的のためにあの戦いを再現しないといけないのに、みすみす自分の正体を明かすことなど、出来るはずもない。

ならばこの冬木から離れてしまってもいい。生半可なものではない、関わるならば最も鬼門、廃人にされてしまう……そんな魔術師のところに赴いてしまおう。

「確か……アオザキ、だったか」

不意にこの名前が口から零れた。記憶の中では魔法に至った家系、とある霊地の管理者ということくらいしか情報がない。しかし、日本に残る名家とってすぐに出るのは、もうこの名前しか俺にはない。

なんにせよ、そんな家系の者のところに行けば様々な経験を得ることが出来るだろう。関わる前に殺されるような下手をうたなければいい。俺はそう考えた。

ただこの名前を出した時、そして利用しようと思ったときに俺は何故思いとどまらなかったのだろうか、後になって後悔することになる。

そして俺は、『アオザキ』と接触するために行動を開始することにした。

これがエミヤシロウの変化の最初のきっかけとなった。

回り始めた齒車

「何の手がかりもなく、見つかるかつて！」

自分の考えのなさを嘆きながら、俺は一人見知らぬ街を彷徨っていた。

理由は簡単だ。関わろうと決めた魔術師がいる場所の手がかりがどこにもないということだった。

ただ『アオザキトウコ』という名前を思い出し、これを手がかりにどうにかこの街、観布子という土地にやってきていた。俺の記憶にあるその名の人物が、最後に世間：魔術師の間で“居るのでは”と囁かれた場所だったからである。

ここに来るまでも色々と難関があった。

一番の難関は藤ねえの説得。幼い俺を一人で遠いところに行かせるわけにはいかないといい出したのだ。そこところは雷河じいさんが説得してくれてどうにかなったが、その雷河じいさんにも納得してもらうのにもかなりの時間を要した。

まあ色々とあってどうにか俺は一人で観布子市まで来ることが出来たのだが、これから先、名前以外の手がかりがない状態で人を、しかも魔術師を探すことはあまりにも困難だった。

自分にとっては、故郷と離れたあまりに遠い場所。知り合いもいなければ土地勘ない。俺は早速自分の思いつきを後悔することになった。

「でも、ここがアオザキの手がかりがある気がするんだ……」

一人途方にくれながらもその確信はあった。もちろんアオザキが管理しているという霊地にいることも考えはしたが、それでもこの

観布子という街に手がかりがある様な気がして仕方がなかったのだ。

しかし俺のそんな思いもよそに、時間は刻一刻と過ぎていった。次第にあたりは黒の濃度を増し、駅前でさえドンドン人が疎らになり始める時間に差し掛かっていた。

一人ポツンとこの時間帯にはふさわしくない年齢の少年、俺がその場にベンチに座り込んでいることがあまりに異質であっただろう。そしてそんな時間帯だ、言わずもがなおかしな考えを持った人種は多くいる。

「あれえ！？どうしたのくぼくう？ママとはぐれたのかなあ？」

「お兄さんたちが探してあげようかあ？」

大げさな抑揚のついた声が俺に降りかかる。俺に声をかけてきたのは大柄な二人組。明らかに親切心から声をかけているのではない。表情から読み取れるのはハッキリとした悪意だ。

「いえ、もう帰りますから」

俺は荷物をまとめていたバッグを担いでその場から立ち去ろうとするが、俺の行く道を阻まんと二人は道を塞ぐ。あまりの伸長差に俺はどうすることも出来ない。

それにもいらついたが、何よりこんな街中で不良に子供が絡まれているにも関わらず、見て見ぬふりをする歩行者たちに俺は憤りを覚えていた。

「さあさあ、行こうぜえ！？」

男の一人が俺の担いでいるバックを掴んで、路地裏に引っ張りこもうとする。

無論、こんな街中では魔術は使えない……子供の俺では敵いっこな

い。とにかくどうにかして逃げようと思った時だった。その声が聞こえてきたのは。

「ええ、そうです。駅前のベンチで。小さな男の子が絡まれている……すぐ来てくれます？……あ、ありがとうございます」

人ごみから聞こえてきたのは男性の声、会話の内容から通報しているのだろうと思ったのだろう。男たちは顔を青くして、早々に俺の傍から離れていった。

一瞬静寂に包まれた駅前的一角、しかし数秒後には何事もなかったかのように人々が再び喧騒を取り戻していた。

俺もあまりにあっけない幕切れだっただけに少し放心していたが、その喧騒の中から男性が声をかけてきたことによってようやく正気を取り戻していた。

「君、大丈夫だったかい？」

「あ、ありがとうございます……」

その男性は、子供のような笑顔を見せながら続けてこう呟いた。

「今時あんな小芝居に引かかる人もいるんだね、ちょっと面白かったよ」

あの時助けてくれた声の主……この男性はそう言いながら俺に差し出したのは自身の掌。それから伝わってくるのはあまりにありふれた、『誰しもが持っている親愛』の心だ。

「なんか困ってるみたいだったからほっとけなかったんだ。さあ、ここも危ないしお店にでも入ろうか？」

その男性は俺の手を引いて歩き始めた。
これが俺のもう一つの変化の始まりだったとは、この時考えもしていなかった。

出会

「衛宮：士郎くんか、冬木ってすごく遠くから来たんだね？」

俺は男性に導かれるままに、彼の行きつけだというお店にやってきていた。落ち着いた雰囲気を感じる店内からは、大勢の人が楽しく会話をしている音が聞こえてくる。

思えば、切嗣が亡くなってからはこんな雰囲気とは少し離れたところにいたような気がする。だからだろうか、男性の優しさが凄く嬉しく感じたのは。

「はい、ちょっと会いたい人がいて……」

男性の言葉に答えながら、店員から出されたコーヒーを口にする。その仕草に男性は微笑みながら、君って子どもっぽくないよねなどと呟いてくる。

「んゝ出来れば手伝ってあげたいんだけどなあ……さすがに会ったばかりの人間を信用することは出来ないよね？」

ずばりと核心をついた一言が俺に投げかけられる。当たり前だ、ただでさえ探している人物は魔術師。それを一般人に頼ってどうにかなるわけがない。それにこの人にも迷惑がかかるのは目に見えている。

「あ……いえ、そうゆうわけではなくて」

「——つと、そういえば名乗ってなかったよね」

そう呟きながら男性は懷から名刺を取り出して、俺に差し出してきた。

「えっと、クロ……キリさん？」

「ううん。コクトウ、コクトウミキやって読んだ。まあ『仕事』で使ってる名前……なのかな。まあ幹也って呼んでくれればいいから」

幹也さんは恥ずかしそうに笑う。俺にはその理由が分からなくてとりあえず相槌を打ちことしか出来なかったが、何故かこの人は信用できる人なんだということはハッキリと思った。

それから少しの間、幹也さんとの会話を俺は心の底から楽しんでいた。最初に思った懐かしい感覚も、今なら何とか説明することが出来る気がする。

幹也さんの纏っていた空気感が『普通』で安心する……どこか羨ましさすら感じられた。

「……だからさ、君みたいに危なっかしい子はほっとけなくてさ。

僕の……まあ奥さんもそんな感じの人なんだけど」

苦笑いをしながらそう呟く彼の顔から感じたのは、その“奥さん”に対する慈愛だった。その表情を見た時やはりこの人は最初に思っただ通りの、信用に足る人物なんだろうとハッキリ意識することが出来た。

この人ならば頼ってもいいのではないか、そんな気持ちで頭を過る。しかしその考えにNOを突き付けながらも、幹也さんの言葉に甘えてしまおうと考えている自分がいた。

「だからって訳ではないけど、僕にも協力させてくれないかな？　こう見えてもモノ探しは得意なんだよ」

「いや、本当に会ったばかりの人に頼るわけには……」

俺がどうにも断り切れず言葉を濁していると、店の入り口のチャ

イムが短く鳴り響き、新たな来店を告げていた。

その音の方に目をやった時、ハッキリ幹也さんの顔が引き攣っているのが分かった。会ってはいけない人物に会った時のようなそんな雰囲気醸し出している。

俺の座る位置からは確認できないが、その足音は迷うことなく俺たちの座るテーブルへとまっすぐ歩を進めていた。そして悠然たる響きが投げかけられる。

「何してんだ、幹也。今日は早く帰るっ…お前、一体“何”だ？」

俺が会おうはずがなかった、ある美しき死に神との出会いだった。

きっかけ

必死に、必死に俺の理性が、いや俺の総てが訴えをやめない。

「もう一度聞く。お前は一体“何”だ？」

女性は黒絹の髪ゆつくりとかき上げながら、凜とした響きを再び投げかける。それからハッキリとした俺に対する警戒心を感じ取ることが出来る。いや寧ろこれは警戒心などではなく殺意だ。

「お、俺は……」

幹也さんの名を呼んだその女性の瞳に射抜かれ身動きが取れない。頭では冷静に状況を判断している。なのにこの殺気に身体が慣れていないからだろうか、言うことを聞かない。

「俺は衛宮……衛宮士郎です」

その眼光から、その立ち居振る舞いからハッキリと分かる。この女性には幹也さんの知り合いのようだが、この人は幹也さんのような『普通』の人ではない。寧ろ俺の側、非日常に身を置く人間。それがこの女性なのだろう。

「ごめんね式。ちょっと色々あってさ」

幹也さんは素直に謝罪を口にしながら、式と呼んだその女性を自身の隣に手招きする。彼女もその誘いに素直に応じながら流れるような動きで俺の目の前に腰かけた。言わずもがな、未だに俺への警戒を解いたわけではない。その瞳は変わらず俺を見据えたまま、冷えた視線を俺に向け続けている。

「じゃあ紹介するね、この人は両儀式。僕の奥さん……でいいよね？」

「なんでオレに聞くんのだ？お前がそう思ってるならそれでいいだろ」

「え？……すいません、もう一回いいですか？」

「うん、この人は式。僕の奥さんなんだよ」

正直に言おう、信じられない。このあまりに特異な人が、目の前のこんなにも『普通』な人の伴侶だとは。誰に言ってもそう簡単には分かる人はいないだろう。

それだけこの人たちが夫婦だということが信じられないのだ。しかしどうだろう。先ほどまで俺に殺気を向けていたはずの瞳はすっかり優しい色を滲ませて幹也さんを見つめている。それは幹也さんからも同じで、二人には強い結びつきがあると容易に感じ取ることが出来た。

と、思っていたのだが……。

「——でね、士郎くんに協力してあげようって——」

「——またお前はお節介を……そんなだから！——」

式さんがテーブルに着いてからというものの、幹也さんと二人で会話を始めてしまっただけ俺は完全に置いてけぼりをくらう破目になっていた。

というよりも完全にいないものとして扱われているような、全く眼中に入っていないような……とにかく二人の会話を俺は黙って聴き続けることにした。

「——おい、衛宮！」

「は、はい！」

不意に式さんから声をかけられる。その声はどこか荒々しく、表情からは無理やり説得されて少し不愉快だと言わんばかりのオーラが満ち満ちている。俺の方はというと、目の前のコーヒーを何度口に運んだかも分からないほどに待たされて正直疲れ切っていた。

「お前にまず一つ、言っておかないといけないことがある」

「――な、なんでしょう？」

その響きから理解出来るのは否定を許さない確固たる意志。寧ろ俺の意見など端から聞く気もないのだろう。そしてギロリと俺に視線を向け、ゆっくりとしっかり刻みこむようにこう呟いた。

「いいか？ 幹也はオレのだ。お前がどんなに頼ったってコイツはオレのだ」

うん、理解した。完璧になんかずれてる……なんていうか俺、この人凄い苦手だ。

「――で、最初の質問に戻るけどな。お前一体“何”だよ？」
「式、幾らなんでも酷過ぎやしないかい？ こんな小さな子をつかまえてさ」

結局、よく分からないままに俺は二人のペースに巻き込まれていた。一しきり話し終えた後落ち着ける場所に行こうと三人で店を出た俺たちは、幹也さんが独身時代からずっと使い続けているというアパートにやってきた。今幹也さんはコーヒーを入れるために台所に立っていて、俺と式さんが向かい合う形で座っている。しかし先ほどの店での惚気ムードはどこに行ったのやら、式さんの表情は俺と初めて顔を合わせた時の殺気を滲ませている。

これ以上はぐらかし続けても無駄。その表情を見れば一目瞭然、自分たちに害を為す者ならば遠慮なく排除する。式さんの表情はそう告げていた。

突き刺さる視線に俺は姿勢を正し、言わないでおこうと思っていたはずの言葉を口にする。

「人を……ある人を探しています」

「ふうん。それはお前と“同種”って考えていいのか衛宮？」

『同種』

そう。もう式さんは俺が何者かを直感で理解している。俺が魔術に関わりを持つ人間だということを、非日常の側に身を置く者だということ。

「そうです、その人と関わりを持ちたくて俺はここに来ました」
肝心な部分、『利用するため』ということを俺は告げずに話を進める。思うに式さんは俺がアオザキと会おうとしている事情なんてどうでもいいはずだ。

ジワリと額に汗していることを肌が感じる。それだけこの両儀式という人との会話にすごく緊張しているのだと改めて理解させられてしまう。

かつてならばこんな局面は簡単に打破出来たのに……それがどうしようもなく悔しくて仕方がない。

「鮮花たちと同種ってことかよ。……まったく！本当に似たような変な奴ばかりに好かれやがって」

呆れ顔になりながらベッドに身を投げ出す式さん。お約束の展開だよと悪態を吐きながら、ジツとコーヒーを入れている幹也さんを眺めている。

俺はというと質問が終わったのか終わっていないのか未だに分からず、困惑したまま二人を見ていた。

「あ、あのすいません。式さん？」

式さんの言葉が何を指し示しているのか、よく分からないままとりあえず彼女を呼んでみる俺。だが帰ってきたのは、無言の視線だけ。完全にイライラしていらっしやる……もうこれ以上何かしたら、どうなるか分かったもんじゃない。

「式はコーヒー……：：：いらないよね。つまり鮮花に似てるってことは、もしかして魔術に関わりを持つ人ってことかな？」

準備したコーヒーを俺に渡しながら、幹也さんが尋ねる。式さんは面倒そうにコクリと一度だけ首を縦に振るだけだった。それにしても『魔術』というワードを全く違和感を持たずに使う幹也さん。この人に式さんが関わっているという時点で何かしらそれに関わりを持っているだろうという想像に容易かった。

「やっぱり。お二人って魔術師と何か関係あるんですね？」

「まあね、前に勤めていた会社の社長が……そうゆう関係の人だったからね」

しみじみと懐かしむように呟く幹也さん。一方式さんの方は嫌なことを思い出したように不機嫌な顔をしている。

それにしても式さんはともかく、幹也さんが魔術師と実際に関わりを持っているということはあまりに信じられなかった。なぜなら幹也さんのどこをとっても『特別』な所は見受けられない。

いや、この考え自体が間違っているのか。それはともかく、もしかすると本当にアオザキにつながるヒントを手に入れたのかもしれない。

しかしそれも次の幹也さんの一言であっさりとゴールへと変わってしまおうとは考えもしていなかった。

「士郎くんも知ってるんじゃないかな？ 橙子さん……蒼崎橙子さんって言うんだけど」

「——っえ？ すいません、もう一回言ってもらっていいですか？」

「前にね、蒼崎橙子さんって人のところで働いてたんだよ。今はもうこの街にはいないんだけどね」

返した言葉はあまりに間抜けで、正直これから一体どうなっているのか……今の俺では全く予想することは出来なかった。

対峙

「ここか……うん、ここで合ってるな」

幹也さんと知り合いになってから一ヶ月後、彼からに送られてきた地図を頼りに俺は自分の住む街を離れ、見知らぬ街にやって来ていた。そこは冬木からだと観布子ほど離れているわけではないが、新都などと比べるとこれから発展していくであろう可能性を感じさせるような街。

それにしても幹也さんの搜索能力には脱帽である。

幹也さん曰く、アオザキが会社をたたんでしまってから全く連絡も取り合っていないなかったにも関わらず、ものの一ヶ月ほどで現在の居場所と連絡先までも仕入れてくれた。感謝してもし足りないくらいだ。

しかし遠く見ていた街にこうやって立つと、なぜか不思議な感覚になる。観布子の時にも感じていたが、知らない土地に『戦う』という目的以外で来ると何故か少しだけ嬉しい気持ちになるのだ。

俺は今まで色んな風景を見てきた。

荒廃した地平、鉛色に重い空、血に塗れた大地、そして多くを助けるために犠牲にしてしまった人たちの亡骸。

でも違っていた、ありふれた景色がこんなに綺麗だったことを俺は改めて感じていた。

「……にしても、ここに本当に人が住んでるのか？」

指定された場所はもう何年も人の手が入っていないような廃れたビル。人もあまり寄り付かない、街の中心から外れた場所にそれは

あった。

『アオザキトウコ』……式さんと幹也さんの話だと、掴み所のない人らしい。それに加えて二人はちゃんと意味を理解していなかったが、アオザキトウコは魔術協会から封印指定を受けた魔術師なのだという。しかしこれだけでは情報が不足すぎていて一体どんな人物なのか、全く予想が出来ない。

「とにかく入ってみるしかないか」

ビルの入り口であれこれと悩んでいる場合ではない。俺は決心をかため、恐る恐るビル内に足を踏み入れようとした時だった。

「——ッッ！な、何だっ!？」

身を突き刺すような明らかな感情。これは最近にも感じたもの……それは殺気。かつて戦場に身を投じていた頃、日常茶飯事に受けていたモノ。

——これは……上から？

「意外に若い魔術師だな。この場所が分かるなんて意外だったよ。で、人の工房に勝手に入ったんだ。覚悟は出来ているんだろうな？」

階上から聞こえるのはあまりに綺麗な声。それは殺気と非常さを内包した響き。

見上げた先には、声に違わぬ美しい女性が立っていた。

「あ、あなたが……アオザキ？」

「そんなこと、どうだっていいだろうに。まあ『シキ』の真似をするわけじゃないんだがね、殺しあおうか？ 若い魔術師くん」

ドンと重い響きをたて、目の前の魔術師が手にしていたアタッシユケースを床に置く。

その音に続くように奏でられる甲高い靴音。

「さあ、餌の時間だ。存分に楽しめ」

現れたのは嵐、そして黒い猫。それは爪をたて、牙を向いて俺へと突進してくる。

この俺の幼い身体では避ける事の出来ないスピード。

ダメだ。こんなところで戦っては！？

——そんなこと、無駄だ

でも、俺にはあの人に対する敵意なんて……

——見せ付けるのだ

一体何を？

——覚悟、そして自らの力を

そう……自らの力を見せ付ける

——英霊であつた私の

今の俺の力を！！

迫る、それはさながら身を切り裂く風。ならばと俺は息を吞んで、駆ける。

分かること、それは“今の俺”には離れた敵への攻撃する術を持たないこと。

ならば近付け！唯一の攻撃手段を生かすことの出来る場所まで！

一から、何のアドバンテージもないこの身体に魔術回路を打ち立て魔力を通す。それは焼けていくような鉄を焼き入れる様な感覚。気持ち悪い……痛くて、辛くて、膝を突いてしまいたくなる。

その痛みに耐え敵を見据え立ち続けた。

俺には、その痛みに耐えるだけの覚悟があるはずだ！

「同調・開始！！！」
トレス・オン

お決まりの言葉。だからこそ、俺にとっては必要不可欠な言葉。目の前に迫る猫。普通に当たれば骨は砕け散る。

当たりに行っても同じなら、向かい討つての一撃で勝機を見つける。

ズタボロな身体に鞭を打ち、俺は一気に階上に向け駆ける。

身体に『強化』の魔術。成功とも言えない、穴を見つければあり過ぎる成功のない魔術。

「……ッシー！！」

ゴキリと音をたて、猫が俺の足元に沈む。

突き出した拳に残る鈍い痛み。そんなことは今は考えない。痛みを思考の外に逃がし、次の一手を打つために顔を上げ、階上にいるはずの魔術師へとまた疾走を試みる。

「なかなかの瞬発力だ。それなりに鍛えてはいるようだな」

そう、その響きを耳にし、俺は自分の間違いを痛感させられた。こんな安直な行動、簡単に見破られる。これは子どもの喧嘩ではない、相手は……相手は、生粋の魔術師なんだ。

「だがな、これは『魔術師の殺し合い』なんだぞ?」

「————ハッツツ……」

落下する。俺の身体が、俺の意思とは無関係に……ただ落ちていく。

そう。俺は昇っていたはずの階段から落ち、出口まで落ちていた。身体にははつきりと衝撃を受けたが残る。魔術師は俺の見えないところから、第二手を用意していたんだ。

「身体は頑丈なんだな……なかなか楽しめたよ、魔術師くん」

冷たい言葉が頭上から降ってくる。霞みゆく意識の中で最後に目にしたのは、あまりにも美しすぎる、そして冷酷すぎる魔術師の表情。

「お、俺は……まだ……」

総てが甘かった。いや、もしかすると己を過信しすぎていたのかもしれない。俺は最後の強がりも口に出来ず、闇の中へと意識を落としていった。

魔術師の夜

— i n t e r l u d e —

それは人外が、互いの血を求め狂う狂乱の夜。

魔術師が根源の渦への到達を悲願とし、その業を昇華させる時。

廃ビルの一室。机とソファ、そしてはたから見ればガラクタばかりが散在している、おおよそ何かのオフィスとは誰一人として思わないであろう部屋である。

ここに、二人の魔術師がいる。

一人は衛宮士郎、かつての英霊の魂を宿したこの世界のイレギュラー。彼は今、ソファで寝息をたてている。身に受けたダメージを少しでも回復させようとしているかのように。

「……ああ、来たよ。確かにお前の言う通りだった」

淡々とした女性の美しい声が部屋に響く。その瞳は鋭く、自らが打倒した若い魔術師を捉えている。

その声の主こそ、衛宮士郎が面会を求めている人物。

名を蒼崎橙子。このオフィスの主であり、魔術協会より封印指定を受けた魔術師の一人である。

彼女は『エミヤシロウ』という名の少年が自分のところに来ることを、今電話で話している元部下・黒桐幹也から事前の連絡で聞いていた。

そう。わざわざ黒桐幹也が連絡までして、自分に会わせようとする

のだ。それ自体がおかしさを物語っている。

「しかしね、下手すると殺してしまうところだったぞ。半人前の魔術師ならば先にそう言っておけばよかったろうに」

呆れたと言わんばかりの声で橙子は幹也に対して悪態を吐く。しかし受話器の向こうからは帰ってきたのは意外だと言わんばかりの驚き慄いた響きだった。

あの子どもには特筆すべきものはない。

ただ一つ、自分と相對した時に感じさせた殺氣。それは幾度となく修羅場を乗り越えてきた者が発するモノのそれに等しい……いやそれ以上のモノだった。

その点だけを見るならば、確かにあの年齢の子どもにしては筋が良いのかもしれない。

それこそ彼女がエミヤシロウに下した評価だった。

きつと式も同じことを思ったに違いない。だから何も言わずにあの少年を此方に寄越したのだろう。

しかし受話器の向こうから聞えてきた返答は、自身が予想したものとはあまりにかけ離れていた。

「――何、だと？ 本当に式がそう言ったのか!？」

それは式が言ったとは思えないような言葉だった。しかし彼女の夫、黒桐幹也がこの手の冗談を言うわけもない。それは紛れもない事実なのだ。

「なるほどな……全く、お前たちと関わっていると退屈をしないよ」
幹也の返答に、橙子は面白そうに口元を歪めた。

「まあ、後は私に任せるといい。式がそう言ったんなら、お前たち

でこの子をどうこう出来るわけではないだろうからな」

彼女のあまりに素直な反応に、幹也は溜息混じりに問いかけてくる。だがもはや橙子には彼の問いかけなどより、今日の前にいる少年への評価を改めなければということに興味の大半をもっていっていた。

「――大丈夫だ、悪い様にはしないさ」

最後に一言告げ、あっさりと電話を切る橙子。おそらく受話器の向こうでは幹也が慌てふためいているのだろうと想像しながら笑みをこぼす。

そうして自らの工房に足を踏み入れた少年へと視線を移し、先ほど幹也の口から出た『式が言った』という言葉を反芻する。

「『普通じゃなさすぎる』か……」

それは魔術師からすれば当たり前のこと。世界の神秘に触れている、非日常に身を置いているのだからそれは当然だろう。

しかし式が言った言葉が、他の魔術師や人外のモノと比べての事ならばかなり意味合いが変わってくる。無論式ならばこれまでの経験で、エミヤシロウが魔術に関わりをもっているであろうということは一目瞭然だろう。それを踏まえてあえてその言葉を選んだとするならば、それはあまりに興味をそそられることなのではないか。

そしてもう一つ、『エミヤ』という名。

かつて多くの魔術師を震え上がらせた『魔術師殺し』と同じ名を目の前の少年は持っている。もし本当にあの男の関係者ならばこんなおかしな巡り合わせはない。

想像通りならばこんなに面白いことはない、嬉しそうな顔を見せ橙子は胸ポケットに入れてあったシガレットケースを取り出し、煙草を一本取り出した。

「――ああ、本当にそうならば……」

火を燈した煙草から立ち上る煙が徐々に室内を覆っていく。
まるで彼女の心を表す様に、靄がかったその向こうに、かつて対峙した憎むべき者を思い描くかのように。

これから起こりうるであろうことを考えるだけで、彼女は自身の興奮を隠せなかった。それは魔術師としての性か、それとも人としての興味から来るものか。

どちらにせよ蒼崎橙子にとって、退屈しのぎになることには変わらないのだ。

「確かに、どう転んでも面白いことには変わりはないか」

魔術師は呟く、その瞳に嬉々とした色を漲らせながら。それはまるで子どものように、そして異常者のように。

それが一体どちらなのか、その答えを知るのは彼女だけであった。

— i n t e r l u d e o u t —

朝、見知らぬ部屋

ひんやりとしたタオルの感触。

冷たくて、気持ちが良いくて、心地よくて。

それに引かれるように、俺の意識は覚醒へと向かう。大事なものを思い出すように。

「——んっっ」

視界に蛍光灯の光が痛い。慣れない視界をじんわりと正常に戻しつつ、俺は起き上がり周囲を眺める。

「ここ、は……」

「——あ、起きたのね。大丈夫？」

ギィと音をたてて開けられたドアから眼鏡をかけた赤毛の女性が一人、にこりとした笑顔を見せながら入ってきた。大量の書類と、救急箱を手にして。

「え？あ、貴方は？」

俺は部屋に入ってきた女性の方を見ようと身体を起こそうとするが、あまりの激痛にうまく身体は動いてくれない。

「うん、目はしっかり見えてるわね。熱は……大丈夫。怪我はまあ、ちょっと酷いかもしれないけど」

女性は荷物を置き、俺の前に座りながら俺の様子を見てくれる。そうして彼女は救急箱から包帯を取り出し、俺の腕に巻かれた包帯を取り替え始めた。

「今回はサービスよ。普段は絶対にこんなことはしないの」

部屋に入ってきた時と違わぬ笑顔を見せ、彼女は手際良く作業を進めた。しかし女性が俺の包帯を取り替えてくれている間、俺には何が起こったのか理解できないほどに困惑していた。

そう。目の前の女性こそ、俺を打倒した魔術師……アオザキその人だったからだ。

「どうしたの？少し強く巻き過ぎたかしら？」

アオザキは不思議そうな顔をして俺に尋ねる。

あなたがあまりにあの時と雰囲気の違いすぎるから困惑したと言えない俺は平静を繕うように深呼吸をして、噛みしめるように返答する。

「いえ、別に……ただ少し身体が痛くて。あ、俺は士郎。衛宮士郎です」

「ええ、知ってるわ。私は橙子、蒼崎橙子よ」

はつきりとそしてあまりに簡潔に言葉を返すアオザキ。

何か色々俺と戦った時とはあまりに食い違っているが、この人が俺の探していたアオザキトウコその人であるということは間違いないらしい。

「やっぱり、あなたがアオザキ……」

俺の緊張と困惑を感じ取ったのだろうか、アオザキは無言で俺から離れて自分のデスクに腰を下ろした。そして、ゆっくりとした動作で耳にかけていた眼鏡を外しながら呟く。

「さて、自己紹介もすんだんだ。本題に移ろうか？エミヤシロウくん？」

鳴り響くような、綺麗な声が部屋に響いた。刹那、思い出すあの屈辱。倒れた俺を見下す表情。目の前の女性の瞳は瞬時に別のものへと変貌を遂げた。

それは魔術師。自らの願望のために、手段を選ばず何でも犠牲にしてしまう者の瞳だ。

「あ、お……俺は！」

その目から感じたのは殺気だけではない。蔑むように、嘲笑うようにすら見えた。

「——全く！お前は一体なんなんだろうな？なぜ式があんなことを言ったのか……今のお前からでは想像できないよ」

視線と同様に、嘲りを孕んだ響きが再び投げかけられる。それは完全にあの時相対した魔術師のモノに相違なかった。

『試されている』。素直にそう思った。あの時の戦闘も、そして今も……俺はこの人物に品定めをされているのだ。

「——式さんが言ったことってなんですか？」

呼吸を整え、しっかりとした視線を俺はアオザキに向ける。怯える身体を制し、ゆっくりと言葉にしていく。魔術師との対話がこんなに神経を使うモノだったのかと、改めて思い知らされる。

「橙子でいい。……まあ式はね、お前のことをこう言ったんだ。『普通じゃなさすぎる』と。」

一言、俺に向けて放たれた言葉は、正直俺の予想しなかったものだった。

あの一目で特異であるを見て取れる人間が俺を『普通じゃなさすぎる』と言った？何か悪い冗談なのだろうか。

しかし俺が頭を悩ませている最中にも、橙子さんは矢継ぎ早に言葉を投げかけてきた。

「まあ黒桐が連絡してこなければ、その場で殺していた……。ただ式の言葉もあって、お前に少しだけ興味が湧いたんだよ」

橙子さんは俺を正面から見据える。それは俺の意思の確認。

“今のお前なら、いつでも殺すことが出来る” 暗にそう言われておると、その言葉から理解することは容易だった。

「さて、まず三つ質問ばかり質問だ。お前は衛宮切嗣という男を知っているか？」

ズバリと、橙子さんは俺の想像していなかったことを俺に問いかけてくる。無論、目の前の女性は俺の黙秘権を完全に否定している。隠すことなどではない。これは寧ろ今の俺が魔術師に存在を認めてもらうための名刺代わりなのだから。

「はい、衛宮切嗣は俺の育ての親です」

「む？つまりお前は切嗣の実の子どもではないと？」

怪訝な表情で俺を睨みつける橙子さん。俺は構わずに自分の素性をドンドン明かしていく。

「俺は冬木で起こった災害の孤児でした。切嗣はその災害の後、すぐに俺を引き取って育ててくれたんです」

彼女は俺の言葉に耳を傾けながら、何か考え事をしている様子だった。そして考えがまとまったのか、もう一度俺を見据えて問いかけた。

「では二つ目。お前は衛宮切嗣に魔術の手ほどきを受けたのか？」
「ええ、ただ切嗣が教えてくれたのは魔術の大まかな知識と主に『強化』です。常々才能がないと言われてましたから」

「待て！じゃあお前は『強化』くらいしか使えないのに、単身で魔術師の工房に侵入したというのか？呆れたやつだな……」

橙子さんは俺の蛮勇とも言える行動を苦笑する。笑われても仕方がない。だが今の俺の身体では『強化』しか……いやそれすらまともに使えない。それを打開するためにここに来た、これは間違いではないはずだ。

それから切嗣絡みの質問は続いた。

俺はぐっと握り拳を作って、この嘲りともとれる橙子さんの言葉を受け続ける。いや、寧ろ今の傷付いた状況では俺には何も出来ないという方が正しいのかもしれない。

「――なるほどな、大体は分かった。あの『魔術師殺し』が死ぬ前に残した忘れ形見がお前ということか……つまりお前は私を『魔術師殺し』同様に師事したいとでも？」

来た、この言葉を待っていた。別に俺は蒼崎橙子を師事したいわけではない。ただ魔術の世界の入り口としてしているだけに過ぎない。

だからあえて俺は嘘を言わない。ハッキリと俺の目的を口にする。

「……あくまで強くなるきっかけが欲しいだけです。師事して後ろ盾を得ようとか、そんなことは思っていないせん。」

これだけの言葉では説明には不十分かもしれない。しかし橙子さんは大体のことをくみ取ったのか声をあげて笑った。考えてもみれば、こんな子どもが何を生意気なことを言っているのだろう。だが、俺にはこれ以上に説明できる言葉を持ち合わせているわけではなかった。

一しきり笑い終えた後、呼吸を整えながら橙子さんは“いいだろう”と呟いた。目尻に溜まった涙を拭きとりながら、もう一度俺を見据える。それはおそらく最後の確認のためだろう。

「まあ気に入らなければすぐにどうとでも出来るということ覚えておけよ。今後お前がどれだけ出来る奴か調べるとして…もし修行が必要ならば手を貸さないでもない……さて、最後の質問だ。お前は一体“何”だ？」

「……え？」

予想出来ない一言。式さんに初めて会った時にも言われたその言葉に俺は思考を乱されて……自分でも何が何だか全く理解できない。

「誰って……俺は衛宮士郎です」

間拔けな顔をしているっていうのは十分に分かっていた。

ただ、俺にはこう答えるしか術が見付からなかったのだ。

橙子さんの眼は、俺を瞳を見つめ、嘘を言えば呪い殺さんとかばかりだった。

その手は俺の首筋を握りつぶそうとしている。

「お、俺は……！」

「そうだ、『今』の君は衛宮士郎だ。しかし……」

“私と戦っていたときのお前は『今』の衛宮士郎ではないだろ？”

完全な停止。

思考が完全に止まる。

何も出来ずに、顔を伏せる。

分からない、わからない……ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ
！！

嘘ダ、分カラナイハズガ無い

ソウダ、俺ハ英霊ダッタ。世界ト契約シテ、多クノ戦場ト、数多ノ
血ヲ見テ来タ。

「確かに、あの時の衛宮士郎は少し違っていた。でも……」

ソウダ、俺ハアノ頃トハ違ウンダ。答エヲ見付ケタ。ソシテ……

「俺は、衛宮士郎です！」

そう、俺はそんな疑問を打破してきた。
だから、今ハッキリ言えるんだ。

「だから強くなりたいんです。強くなって……」

守りたい。大事な人を。俺を救ってくれた、俺の道を示してくれたあの子を。

何時になく心は澄んでいた。目の前にいる橙子さんも殺気を消して、苦笑しながら煙草の火をつけようとしていた。大丈夫だ、きっと……これからもやっていける。

あの冬に向けて、俺は再び進みだした。
俺の総てを変えるための戦いの日々が。

荒廃の大地

広がるのは見慣れた光景。

鉛を垂らし込んだように重く落ちる空。

荒れ果て、目も当てることが出来ない大地。

そして数多の剣、墓標のようにただ冷たい剣の葬列。

「ああ、俺は……まだ此処にいる」

そう、俺は此処にいる。この世界から逃れることは出来ない。

どれだけ違う風景を見ようと、感じたことのないことを感じようと。

俺はこの世界から、この呪縛から逃れることは出来ないのだ。これは……いやこれこそ俺がエミヤシロウたる由縁の風景なのだから。

「——でも、ここで立ち止まればかりはいられない」

ジッと、剣の葬列の終点に目をやる。彼方、砂埃をあげてこちらに歩いてくる。

赤い外套に身を包み、焦げた肌をした一人の男が。

「なんだ、そんな顔するなよ。久しぶりの再会だろ？」

男は何も答えない。ただこちらを睨み付けるだけ。感じられるモノは明確な一つの感情。

俺には分かっていた。そいつが言いたいことも、したいことも。

「いいぜ、俺だって試してみたいんだ」

手のひらに現れる二対の夫婦剣。ゆっくりと掲げられるそれを目

にし、俺は思い出していた。自分の信念を疑わず、走り続けていたあの頃を。俺の歩んだ道が間違いではないと気付かせてくれたあの人たちを。

そしてそれは、俺が行おうとしている矛盾を肯定させるための言い訳に過ぎないことを理解していたのだ。

「さあ来いよ！英霊エミヤ！！」

俺の敵意を理解したように、赤い外套の男は俺に向け疾走する。同時に、後ろ手に構えていた剣を、風をも突き破るような速度をもって突き出す。

「――ッつ！！投影・開始」
トレース・オン

甲高い音をたて、剣の侵攻が止まる。俺は瞬時に目の前の敵が持つものと同じ夫婦剣を投影し、敵に対する。

容赦のない力、鏑迫り合い。力を抜いてしまえば、そのままに斬りかかれてもおかしくはない状況。

「はああああ！！」

その定石を覆すように俺は剣をくるりと返し、もう一方の剣を横に滑らせる。

狙うはがら空きの胴。しかし、赤い外套の男はそれも先読みしていたように、剣を外された途端、俺の剣が当たる寸でのところで後方へと飛び退いた。

「ああ、そうするよな。俺もそうだった……」

語りかけ、相手の表情を見据える。

憎しみの籠った、今にも爆発してしまいそうな爆弾を抱え、男は再

び疾走を開始する。

これで最後だと、お前は死ぬべき人間なのだと諭すように。

「お前の気持ちは良く分かる。でもな……俺は自分には負けられないんだよ」

その言葉の裏に、もう引き返すこと、逃げる事が出来ない自分への戒めを籠め、俺も男と同様に自らの速度を上げていく。

互いの距離が縮まる。そう、これが夢だと分かっている、俺の心は躍っていたのだ。

さあ、俺はどれだけ近付いた？

お前に、かつてのエミヤシロウに！！

矛盾を抱えて

「——ちよっと！いつまで寝ているつもりなの？」

鈴が鳴るような響きが耳に響いてくる。

朝の目覚ましのように無機質ではなく、どこか落ち着くような温かみのある響き。

「あゝ……もう少し」

開きかけた瞳を再びぎゅっと瞑り、俺は夢の世界へトリップを試みた。

「ゴツッ!!」

しかしそれもつかの間、ゴツリといたい衝撃が俺の顔面を強打したのだ。

「いつてえええ！何するんですか！？って、あ……鮮花さん」

目の前の女性は、艶のある黒髪をなびかせ俺に鋭い眼光を向ける。

「確かに貴方が疲れているっていうのは分かるし、橙子さんからの課題を持って来てくれていているんだから感謝はしてるわよ。でもね……仮眠を取るっていつでも一時間以上も女性のことを待たせるっていうのは、男性としてどうかと思うのだけど？」

容赦ない言葉攻めが俺を襲う。

目の前の女性、黒桐鮮花さんはあからさまに不機嫌になってしまっている。

ああ、こうなるとこの人には歯止めが効かないのだから性質が悪いのだ。

「あ、えっと、すみません！」

「まったく……まあ私の方も少し大人気なかったわ。ごめんね、士郎くん」

小言を言われるのかと思いきや、あっさりとした鮮花さんの物言いに少しばかり困惑してしまう。

そう考えながら壁にかかった時計に目をやると、確かに約束の時間から一時間以上も経っていた。何と言うか……思った以上に自分自身が疲れているのだと実感してしまう半面、素直に鮮花さんへの謝罪の気持ちにかられてしまう。

「本当にすいませんでした。なんだか寝入ってしまったて」

「ああ、本当に良いのよ」

鮮花さんは気にしないでねと微笑みながら、俺を紅茶の用意したテーブルへと手招きする。それに誘われるままに俺は席に着くことにした。

ここは観布子にある、幹也さんの仕事場である。まあ一人で調べ物をするために用意した部屋ということで目につくものは書類であったり、何かの資料をまとめたファイルであったりで、橙子さんの仕事場に比べれば幾分かそれに近い感じではあった。

俺は観布子に滞在する際は決まってこの仕事場でお世話になっている。正直知り合いがあまりにも少ない土地だけに、幹也さんたちの存在は本当にありがたいものがあった。

気が付けば幹也さんたちと出会って五年の歳月が経とうとしていた。

この五年間、いろんな経験をした。この年齢では使えるはずもなか

った技術すら今の俺には身に付いている。

ただ、その代償に俺が大事にしていた者たちとは疎遠になっている
ということと言うまでもない。

そして目線がどんどん高くなるにつれ、それがかつてのオレのモ
ノに近付いていく。それが余計に『もう時間がない』ということを
俺に訴えかけていた。

「――で、これが今回の橙子さんからの課題になります」

「……はい、確かに受け取りました。本当に、毎回悪いわね」

そして俺は蒼崎橙子さんと関わりを持つ対価として、彼女の……
まあ小間使いをさせられていた。こんな風に運び屋だったり、橙子
さんの弟子へのメッセンジャーだったり、自分の負担にならない
程度であるが仕事をさせられていた。

「何かありましたか？前に会った時も調子悪そうでしたが」

「んーどうだろうね」

言葉を濁しながら、鮮花さんは紅茶に口を付けた。

そう。この鮮花さんも橙子さんの弟子の一人であり、一応の世間の
立场上俺も同門になるわけだ。

「……まあ、理由があるとすれば、あの二人の事なんだけどね」

「ああ、あの二人ですか」

自嘲気味に呟く鮮花さん。言わずもがな『あの二人』というのは、
幹也さんと式さんのことだ。以前鮮花さん本人の口から聞いたこと
がある。『魔術を習っているのは、式さんに対抗するため』だと。

「――もうね……あの二人があんな感じだから、私個人としても

魔術を習う理由って無くなってきたよ。だからなんだか君のこと見てみると、悪いことしてるかなって気持ちになるの」

あまりに弱気な発言に、何を言っているのかは分からない。

でも、これだけははっきりと言うことが出来るというモノは一つだけある。手にしていたカップを置き、俺は鮮花さんを見据えて呟く。

「それも良いかもしれない、何もなかったように日常を生きていくのも。……それで今まで積み上げてきたものが無くなってしまうわけがない、嘘になるわけがないんです」

俺の言葉に納得したような表情を見せる鮮花さん。少し微笑みながらカップに残っていた紅茶を飲み干すと、一言そうだねと呟いた。

正直、俺がそんな言葉を口にしていいのか……それが正しいのか分からなかった。

俺は自分の言葉に見合うような生き方をしているのか。あの時、あの魔術使いが言ってくれた『間違いではない』ということを実践できているのか。そして、自分がかつてあの騎士と肩を並べて戦っていた時に言ったはずの『やりなおしなんか、できない』という言葉、簡単に反故にしているのではないのか。

矛盾している、今この時でさえ自分はそれを繰り返している。

そんな人間が、分かったようなことを言っているわけがない……そうでなくてはならないはずなのに。

「士郎くん、どうしたの？」

「……あ……すいません。少し疲れているみたいです」

少し考え込んでいたせいだろうか、鮮花さんは心配そうな顔を俺に向けていた。

心配をかけまいと誤魔化すように俺は笑みを見せたが、腑に落ちないという表情を彼女は見せるのだった。

「鮮花ゝみんなでお昼でも食べに行こうか？」

不意に聞き慣れた落ち着いた声が階下から響いてくる。

俺にとってそれは救いの音にも似た響きだった。正直、これ以上鮮花さんと二人きりで話すのは限界だった。別に嫌というわけではない……ただそのあまりに真っ直ぐな眼差しもはつきりとした物言いも、かつて主と呼び共に戦った『あの少女』と重ね合わせてしまう。

それが堪らなく辛かったのだ。

「あ、お疲れ様、二人とも」

階下に降りるとそこには、いつもと変わらず俺たちを向かえる幹也さんの優しい笑顔。そんな幹也さんの隣には式さんが早くしろよと言いながら不貞腐れている。

相変わらずの二人に、俺はどこか安心感を覚えた。

結婚して五年目になろうというのに、二人は付き合いだしたばかりの恋人のようにういういしい雰囲気である。

俺にとっては二人とも恩人であることに変わりはないのだから、そこところは嬉しい限りである。

俺がそんな幸せなことを考えて呆けてしまったのだろうか。三人は既に俺より少し前を歩いていた。少し進んだところから幹也さんが俺に向かって声をかけてくれる。

「さあ、色々話したいこともあるから早く行こうか？」

俺は言葉に導かれるまま、前を歩き始めていた三人に並ぼうと少し小走り進んでいく。

今はこの時間を楽しもう。焦りを覚えながらも俺はそう思い込むこ

とにした。

越えるべき壁

集中しろ。俺は“それ”を為すための一つの回路。魔力の流れを変える変速機。

集中しろ。俺の心に宿す風景を此処に具現化する。果て無きあの大地を。

“体は剣で出来ている”

ギシリ、ギシリと俺の身体が悲鳴をあげる。

“血潮は鉄で、心は硝子”

魔力の奔流。うねりを増し、俺の身体を食い破らんと暴走している。中止を訴える身体を必死に止めつつ、俺は詞を口にする。

“幾度の戦場を越えて不敗”

そう、これは儀式だ。自身の全てを世界に浸す。犯されていく、手の先から足の先まで。

だから、痛いのは当たり前なんだ。

“ただ一度も敗走もなく”

“ただ一度の勝利もない”

世界を開く。これは証明の為の儀式。

俺が、アイツに迫ったことを証明する儀式。

“担い手は此処に独り”

——未練を残すな

“剣の丘で鉄を鍛つ”

——後悔を残すな

“ならば、我が生涯に意味は要らず”

そう、何故ならばこの身体は……

“この体は……剣で出来ていた”

詞を紡ぐ。語りなれた、俺のための詞を。

焼け付くような風に誘われ目を開く。そこに広がったのは、見慣れた……果て無き剣の大地。

吸い上げられていく身に宿した魔力。この感覚はどこまでいっても慣れるものではない。ただ強引に、容赦なく、根こそぎ持っていられる。そんな感覚だ。

「——っはあ、はあ!!」

掲げた腕がガタガタと震え始める。

しかしそれをそれすら凌駕しこの風景を自由に使えるようになった時、俺はオレとの戦いのステージにようやく昇ることが出来る。

だからこそ俺は止めることは出来ない。この行為を。自らの心象風景を形にし、世界を変容させていく行為を。

しかし既に限界を通り越していた。

自身の思いとは裏腹に徐々に世界は歪みを見せ始め、そして幕を降ろしたように、剣の大地は消え失せ普段から使用している修行部屋へと、その姿を戻していた。

「確かな幻想、確固たる己を持たない者が、固有結界なんかを使い

こなせるわけがないと教えたはずだぞ？ 士郎、ホントにお前は進歩のない奴だよ」

息を切らしへたり込んでいた俺に、冷酷な言葉が投げかけられる。一体いつから見ていたんだろうか、蒼崎橙子は呆れ顔を見せながら部屋の隅に立っていた。

「――何が言いたいんですか？」

「まあお前に何を言っても変わらんだろうがね。まあ今は自分の身体を思う存分痛み付ければいいさ」

これは彼女なりの優しさなのだろう。決して励ますことはせず、自らの足で立ってみろと言われているような気がした。しかし俺はそれを素直に受け取ることが出来ず、苦悶の表情を浮かべているという自分を自分でも容易に感じることが出来た。その表情に呆れ顔を見せながら、橙子さんはタバコに火を灯し、足早に部屋から立ち去っていく。

紫煙の香りが残る中、一人部屋に取り残され何も出来ないまま上を見上げた。

何も出来ない、超えることの出来ない自分に苛立ちを覚えながら。

「どうしたら、どうしたら強くなれる？」

ただその言葉だけが虚空に消え去り、俺の不甲斐なさだけが今ここに残った。

ただ、強くなる術を得たくて橙子さんの下にやってきた。

確かに体験するはずもなかった経験のおかげで、この年齢では身につけることの出来なかった力を宿すことは出来た。それは間違いない、もちろん感謝もしている。

あと一歩、何かが足りない。

それが何なのかは既に理解しているはずなのに……それを明確にすることを自分自身が恐れている。

いや、むしろ意識しないことが幸せであるとも思っているのだろうか。

もはや俺は取り返しのつかないほどの罪を抱えているというのに。

“体は剣で出来ている”

そして俺はもう一度立ち上がり、自らを表す詞をカタチにしている。

今は闇雲に、橙子さんに言われたように自分自身を痛め付けんがために。

魔術師の夜？

— i n t e r l u d e —

「あれがここに来て……もう五年になるか」

夜も更け月が真頂に昇る頃、一人の魔術師が独り言を呟く。

彼女は自らのイスに腰掛け、あるのが当たり前になったあの不味い煙草を口にくわえていた。

そして思い返すのは、自分を利用してやると大口をたたいた少年のこと。

「確かに、アイツは強くなった」

そう一言、まるで皮肉のように橙子は語り始める。

最初はただの興味だった。昔馴染みが連絡を寄越したというの也要因の一つではあるが、しかしあの少年、衛宮士郎の事を知れば知るほどその興味はどんどん膨れ上がっていったのだ。

特筆して言うべきは、その『魔術』の在り方。

どれだけ優秀な魔術師が士郎を見たところで、捺される烙印は『出来そこない』や『半人前』というところだろう。事実、橙子も彼と最初相対した際にはそう結論付けていた。

「しかしどうだ。確かに私の見る目もまだまだだったということではないか！」

嬉しそうに笑みをこぼしながら橙子は呟く。

そう。彼の少年はそんなものではない。使うことのできる魔術総て

が、大禁忌から零れ落ちたものだとは誰も想像しえまい。彼女自身もそれに気付いたのは、彼の固有結界を初めて目の当たりにした時だったのだから。

だからこそ彼女は考えていた。

何故年端もいかない少年がそんな大禁忌を身に宿していたのか。

何故あれほどの素養を持った魔術の担い手が、わざわざ封印指定を受けた自分のような魔術師の下に来る必要があったのか。

それら全てを鑑みて、当初彼女は彼の少年を解剖してやろうとすら考えていた。

しかし橙子は未だにそれを実行に移してはいない。実際彼の成長を目の当たりにして、その気持ちも無くなっているが、それにも増して彼の行く先を見てみたいという気持ちにかられていた。

「――強くなることを、まるで義務付けられたように自らの身体を痛め付けて……ただのバカなのか、それとも本当に英雄でもなろうとしているのか」

橙子が口にした一言が、まさか衛宮士郎の真実を物語っているとは、この時の彼女には知る由もないことであった。

そうして彼女は思い出す。数年前に関わっていたあの二人の事を。今は自らの手の届かないところにはいるが、今でも身内であることには変わらないあの二人を。

「最後の仕事、やってもらうことにするかな」

くわえた煙草に火をつけ、橙子が呟く。かつて彼女は一人の少女と取引をした。

それは少女に宿った力の使い方を自分が教えること。その代価は自分の仕事を手伝わせること。

「まあ嫌がるだろうな。……いや案外喜ぶかもしれないか」

自身でも容易に解答を見付けることの出来ない疑問に、楽しくて仕方がないと言わんばかりの表情を見せる橙子。

これが子どもの喧嘩ならば気にすることでもないが、この件については全く話が違う。

何故なら一つの家系が作り上げた『根源』に繋がりしモノと、大禁忌を身に宿す少年の戦いなのだから。

「ああ、本当に楽しみで仕方がない」

橙子の頭には確かな確信があった。

そう。それなくして士郎はこれ以上、これ以上強くはなれないのだと。あれが求める本当の強さを身につけることは出来ないのだと。

「――士郎が、アイツがどこまで行こうというのか……それが楽しみでならないよ。全く」

その響きはあまりに冷酷に、しかしどこか優しさを帯びていた。

気が付けばくわえていた煙草はフィルター部分に火が届くかというところまで達していた。それを目の当たりにし苦笑いを浮かべながら橙子はそっと二本目の煙草に火を灯し、ぐるりと部屋を見渡す。

「確かに、私は少し夢中になりすぎているのかもな」

紫煙を吐き出しながら、橙子はあるソファに目をやる。

それはかつて、士郎が怪我を癒すために眠っていたソファ。

あの時彼に興味を持たなければ、こんなに楽しいことには出会えなかった。こんなに最高の暇つぶしはきつとこれから先、そう簡単に

出会えるものではない。

「——まあお節介になっただけかもしれないな」

一言呟き、彼女はまた紫煙を燻らせる。

それは素直ではない、彼女なりのやさしさのカタチだったのだろう。

— i n t e r l u d e o u t —

模索

夜も更けた頃、ようやく俺は、自分の街に帰ってきていた。

一ヶ月に何回か学校終わりに、橙子さんのところに行き仕事をこなす毎日。これでクタクタにならない訳がない。

「ふう、こき使われるのは……さすがに堪えるよ」

疲労のために重く感じる身体に鞭打ち、どうにか居間まで歩いてくると、テーブルに置かれたメモ書きが目に入ってきた。

「今日は帰っちゃったのか。そっか……毎日迷惑かけてるんだよな、俺」

綺麗な字・几帳面さのうかがえる文章、俺はそれに軽く目を通しゆっくりとお膳の前に腰を下ろし、ぼおっと何かを考えるように目を閉じた。

俺は問題を抱えていた。実生活にではない。恵まれた環境、最高の魔術師を師事し、様々な経験を俺は積んだ。そのことについては充実していた。

しかし一步、確実に明確な一步が足りない。

あいつに、英霊であった頃の俺に追いつくための最後の一步が。

「まあ、大体は分かってんだけど」

手を天井に掲げ眺める。薄っぺらで弱々しい手だ。

それがあまりに憎くて、俺は畳に拳を打ちつけた。

じわりと感じる鈍い痛み。そう、これだ。俺に足りないもの。俺が
あいつより劣っているもの。

決定的な違い、それは『覚悟』。

かつて俺は持っていたはずだった。幾多の戦場を戦い抜いてきた、
夢を夢で終わらせなかった強い覚悟。揺らぐことなく、疑うことな
く持ち続けた理想を。

しかし今はどうだ。肉体の面では強くなりはした。だが決定的に俺
は揺らぎやすくなっている。周りの影響を受けやすくなっている。

こんな俺が、今あいつと相対して勝てるのか？

「こんなことを考えている場合じゃない！弱音を吐いてなんになるっ
てんだよ」

心に過ぎる不安をかき消すように俺はブンブンと頭を振り、道場
を目指し立ち上がった。

弱いと思うなら、かつての俺がしなかった下積みをするれば良い。

道場でかつての俺と戦うイメージで身体を動かす。

気休めでも良い。気持ちの面で追いつけないならば、戦闘技術であ
いつとの差を縮めれば良い。同じ知識を持っているならそれは容易
なはずだ。

しかしこの後、俺は一番見られたくなかった少女にその現場を目
撃されることになる。

— i n t e r l u d e —

それは……本当に力強く、繊細で、まるで可憐な舞のようだとわたしには感じられたのです。

流れるような動き、でもしつかりとした剣捌き。

まるで一つの完成された絵を見ているような、未完成のものを見ているような感覚。

彼の動き一つ一つを目にする度、わたしは心を奪われ、彼に対する『好き』の感情を、更に強く確かなものにしていく。

それが堪らなく嬉しくもあり、悲しくもありました。

最初は、おじい様に命令されたからだだった。

『何をするか分からない、危険な男』。おじい様はそう言っていたが、わたしにはそうは見えませんでした。

どうしようもなく優しく、どうしようもなくお人よしな人。

悲しそうな瞳が映すのはいつもそんな色だった。

だからわたし好きになった。

ただ真っ直ぐに強くなろうとするその男の子に。

でも彼が魔術師として力を付けていく度、男の人として強くなる度に彼はわたしではなく、もっと遠くの『何か』を見つめているんだって感じる事が出来た。

それ以上無理しないで！わたしだけを見てください！
そんなこと、言えるわけがありません。

ただ側にいたいんです。それだけで、今のわたしには十分だから。
この好きを、大事にしていきたいから。

ねえ、側にいていいですよ？あなたの近くに、いてもいいですよ？

「衛宮……先輩」

不意に、彼の名前を口にする。
するととても驚いた表情を見せ、彼が振り返り呆然と佇んでしまいました。

こんな表情もするんだ……なんだか可愛い。
ほら、また見つけられた。わたしの知らない彼の表情。

こうやって、わたしはもっと知っていききたい。

彼のことを……もっと、沢山。

— i n t e r l u d e o u t —

「えっっ……？」

呆然と、声の方に顔を向ける。
向けなくても分かっていた。その声の優しい響きに、俺は聞き覚えがあったのだから。

「さく……ら？」

見られた？俺の姿を。魔術師としての俺の姿を。

この子だけには、この子だけには見られまいと思っていたのに。

否定が頭を過ぎっていく。ダメになってしまいうくらいの、破綻してしまいそうなくらいの否定が。

「桜……見ちまったんだな」

自分でもびっくりするほどに冷ややかに俺はその言葉を口にしていた。

その場を照らすのは月明りだけ。彼女の表情を読み取ることは容易ではない。しかし俺は構わずに言葉を続ける。

「なあ、桜」

「———はい、衛宮先輩」

ようやく彼女の声を聞くことが出来た。その響きは俺の放つ冷やかさを感じ取ったのか、怯えたものになっている。

「———つつつ!!」

手にした夫婦剣を破棄し、俺は一步一步桜に近付く。

自分がどんどん冷酷な考えに染まっていく中、俺はそれでも足を止めない。

分からなかった。俺はこの数年間、かつてのように冬木に住む人と関わりを持っていくわけではなかったのだ。だというのに桜は……間桐の名を持つこの少女は俺の下にやってきた。“慎二”という接点すらも俺たちにはないのに。

だからこそ疑わなくてはならない、桜が俺の敵となる可能性を。

あと数歩で触れられる距離。

その数歩が途方もなく遠く感じられる。

「さ、くら……ごめんな」

口から零れたのはその一言。自分でも分からないうちに俺は桜に謝罪の言葉を呟いていた。

その言葉が出た時、俺は理解した。この子を、桜を切り捨ててしまうことを無意識の内に容認しているということ。

そしていつもの言葉を、スイッチ代わりのあの言葉を呟こうとした時、先に響いたのは綺麗な少女の声だった。

「――なんで……なんでごめんなんです？」

それはあまりに寂しい響きで、そして彼女の表情は今にも泣き出しそうなものになっていた。

そんな顔を見たくは……させたくはなかったんだ。俺をずっと支えていてくれたこの子には笑っていてもらいたかったのに。

そう。これが初めて間桐桜がどれだけ自分に大切な人間だったかということを感じさせられた瞬間だったんだ。

揺れ動く思い

「――なんで……なんでごめんなんです？」

絞り出すかのような弱々しい声で、桜は俺に言葉を投げかける。目が次第に周囲の暗さに慣れていく。俺はようやく目の前の少女、間桐桜の表情を目の当たりにすることが出来た。その瞳はまるで捨てないでくれと懇願する子犬のように、深い悲しみで染め上げられている。

桜のそんな姿を目にして、俺は口を開くことが出来なかった。

いや、今さら彼女の言ったところで、先ほど俺の言葉を撤回できるわけがない。

「先、輩……わたし何か悪いことしちゃいました？ 気に障ることしちゃいました？」

「違う！ そうじゃないんだ……違うんだよ」

桜の取り乱したような言葉に、俺はこんなことしか言えない。

ただ『魔術使い』としての姿を彼女に見られなくなかったのだと、出来れば桜とは魔術を介して関わりにはなりたくないのだということとは、はっきりとしていた。

それだけに自分がどれだけ無責任に言葉を投げたかということ俺は身にしみて理解したのだ。

沈黙が流れる。夜の穏やかな静けさではなく、重苦しい沈黙が。

全く望みもしなかったそれを、どうにもすることが出来ずにただ茫然と立ち尽くす。

それがどうしようもなく自分をイラつかせ、そして自分の弱い部分を露呈させる。

少女一人の言葉に、態度にこんなにも気持ちをつろわせて……ただ拳を強く握って、不甲斐なさに耐えるしかなかった。

しかしその沈黙を破ったのも、俺の気持ちをグラつかせた桜だった。

「わたし、先輩の傍に居たいだけなんです……」

その言葉はきつと、この子にとっての真実なんだろう。その彼女の表情以前怯えたままだが、瞳は真摯にそれを訴えていた。知らなかった、桜がこんな瞳も出来ただなんて。

おそらく以前の俺ならばこれに気付けなかった。それだけ俺は桜の外見しか見ていなかった。

だが……そうだからこそ、彼女を近くに置いていいのだろうか。彼女が享受すべき幸せを奪うことになるのではないのか？ そう考えただけで、このままでいいとは俺には思えなかった。

「分かってるだろ？俺が何をしようとしてたか」

もう一度、突き放すように俺は桜にそう告げる。

「——それでも！」

「それでもじゃない！俺は……俺には」

その後の言葉が続かなかった。つい先ほどまで抱いていた感情を、口に出ることが出来ない。

“守ることは、出来ない”

その一言が恐ろしく重い。簡単に言えるはずなのに、それを言葉には出来ない。きっとそれは俺がまだ決意を固め切れていない証拠なのだろう。

何故なら、目の前にいる今にも泣き出しそうな女の子はかつて俺が救おうと、守ろうとしていた『多くの人』中の一人だったから。そう。俺は未だにかつてのオレの夢の残滓に囚われ続けている。いや、それを言い訳にしようと結論を先延ばしにしているに過ぎない。

「わたしを迷惑だと言わない限り、先輩の傍に居続けたいんです」
桜はそう言葉にしてから、俯いたまま顔を上げようとはしなかった。

それはおそらく俺のためだ。泣き顔を見せまいと気丈にふるまおうとしているだけなのだ。

俺は再び桜に歩み寄り、その肩にそっと触れる。ビクツと身体を震わせるが彼女は顔を伏せたまま、俺の方を見ることはしない。しかし俺は構わずに言葉を紡ぐ。

「桜……俺、きつとお前のこと」

「分かってます。だから……」

桜は俺の言葉を最後まで聞くことなく、肩に置かれていた俺の手をその掌で優しく包み込み、笑顔を見せた。でもその笑顔は今にも崩れ落ちそうで、今にも泣き顔に変わってしまうかのように儚いものであった。

「今は、このままでもいいさせてください」

俺はそのまま桜の言葉に従うことになった。

この時はそれでいいと思った。桜が敵になったとしても、それを脅威と感じないほどに力を付ければいい。そんなことを思っていた。

しかしこの時桜を突き放していれば……いや、突き放さなかったとしても結果は変わらなかっただろう。

俺はこの時の選択を後悔することになる。それはきつと、俺が何をしようとも回避することの出来なかったモノだったのだ。

— i n t e r l u d e —

わたしは怖い。この世のすべてはきつと、わたしの事を嫌いなのだ
と思っていたから。

だから人の顔色を窺って、問題など起こさないようにしていた。

ただ人に何かを言われれば、素直に従えばいい。

どんなに嫌なことだって、我慢していればいつか終わってくれるもの。
の。

でも何故なんだろう。今回は違った。

先輩が、彼が言おうとしている一言が何か分かってしまったから…

：いつも通り自分が我慢すればという感情よりも、全く違う考えがわたしの頭をグルグルと駆け巡っていた。

“わたしは、彼の一番ではない。でもきっと彼はわたしを見捨てるなんて出来ない”

それが分かっているから、だからわたしは傍に居続ける。一番じゃないでもいい。少しでもわたしの事を考えてくれるなら、きっと今はそれで満足だから。

一人帰りたくない家への道を歩きながら、自然と口元がつり上がっているのに気が付く。普段よりも帰りを急ぐ足が軽く思えた。

いつものわたしはこんな風ではないのに……。

何か心の奥に押し込めていたはずの、仄暗い何かがわたしを覆わんとしている。

そんな感覚が、わたしを支配しようとしていたのです。

— i n t e r l u d e o u t —

最後の要因

“ ああ、なんでこんなにも頭だけは冷静でいられるのか？ ”

目の前の敵と対峙しながら、俺はそんなことを考えていた。

その人間離れした動きも、非情なまでの攻撃も、それら全てを俺を倒すために駆使しながら、その死に神は俺の目の前で酷く嬉しそうに笑っていた。

「おい、そんなもんじゃないだろ？ 少しは本気を出せよ、衛宮？」

死に神は告げる。それは最初の出会いの時に聴かされたあの冷ややかな響き。

死に神は見据える。それはずっと感じていた、あまりに大きな殺気を孕んだ視線。

奴の総てが語りかけてくる。それは明らかな俺への嫌悪だ。

そう。初めて出会った時、こうなることは予想していた。それが時間を経て、今ここに再現されている。

ただそれだけのことなのだ。

「——さあ、殺し合おうぜ」

「そっちがその気なら、俺だって!!」

言葉を交わした刹那、甲高い音をたて互いの得物がぶつかり合う。

互いに容赦なく、己の力を籠めて結び交わされる。それはさながらただの殺し合いではなく、卓越した舞のようで。

俺は自分自身が命の危険にさらされているはずなのに、あまりの楽しさに身ぶるいすらしていたのだ。

きっかけは些細なことだった。

橙子さんからの依頼で観布子の鮮花さんのところを訪れた時、不思議な違和感があったのだ。

鮮花さん自身はその違和感には気付いていなかったようであったが、確かに何かに『視られている』感覚が俺を支配していた。

「――あ、そう言えば式が久しぶりに会いたって言っていたわよ」

報告が終わった後、世間話ついでに鮮花さんがそんなことを話してくれた。珍しいこともあるんだねと彼女は笑いながら話していたが、それを聞いたときに俺は違和感の正体に気が付いた。

「そうですか……式さんが」

それ以上は言葉にせず、俺は鮮花さんに別れを告げてその場を離れ、違和感の正体に確証を持ったため俺は足早に式さんのところへ急いだ。

“ 式さんが、俺に会いたがっている ”

きっぱりと確信を持って言える。そんなことは絶対にあるわけがない。

例外があるとすれば、俺にとっては良くない意図を持っているということに他ならないはず。だからこんな場合は色々考えてしまうよりも、シンプルに式さんと幹也さんのところに赴くのが一番なのだ。しかし俺にはその『自分にとって良くない意図』というものが推理出来なかった。それだけがどうしても気がかりで、自然と歩を進める足もその速度を上げていったのだった。

少し街はずれにある竹林を抜けていった先に両儀の屋敷はある。数回しか来たことはなかったが、どうにかここまで迷わずにくることが出来て少しホッとする。

おそらくホッとしたそれだけではなく、両儀の屋敷の門前で見覚えのある顔を見付けたからだろう。

「やあ士郎くん、久しぶりだね」

「お元気そうでなによりです、幹也さん」

幹也さんは相変わらずの笑顔で俺を迎えてくれた。俺は軽く会釈しながら彼と合流し、式さんの待つ道場へと歩を進めた。その間、俺は鮮花さんから聞いたことが本当なのかを尋ねることにした。

「―――幹也さん、式さんが俺を呼んでいるって本当ですか？」

それは少し怯えを孕んだ響きだった。しかしそれに笑顔で幹也さんはその言葉に返してくれる。

「そうなんだよ。久しぶりに橙子さんから連絡が来たんだけどね……それからなんだよ」

不思議そうに小首を傾げる幹也さん。俺は彼のその後この言葉がどうしても気になってしかたがなかった。

「それからってどうしたんです？」

「ソワソワしながらよく言ってたんだよ。早く士郎くんに会いたいってね」

自分の中でそんなことがあり得るわけがないと思っていた答えがあっさりと口にする幹也さん。それは道場まであと僅かという距離まで来た時のことだった。

もうここからは引き返すことは出来ない。大変なことが起こらないことを祈りながら佇まいを正し、ゆっくりと道場の中へと足を踏み入れた。

「―――よお、来たか。衛宮」

響く。それはいつか聴かされたあまりに美しい響き。冷ややかで、俺の存在を否定していることをハッキリと分らせているようだ。

一歩、そしてまた一歩と近付く彼女に少なからず畏怖を感じていた。いや、そんなことはどうでもいい。俺は確かめるためだけにここに居る。橙子さんから連絡を受けてからの式さんの変わりよう……俺にとっての最悪の状況が本当に起こっているのか。

「式さん、一体どんな要件で……」

「そんなことはどうでもいい」

彼女の言葉が届いた刹那であった。視界の隅の方から自身に迫る鋭い光。

式さんは俺に肉薄し、隠していたナイフを振り下ろさんとしていた。

「――っつ！！」

その動きがあまりに自然で、俺は身を翻しながらも彼女から目を離すことが出来なかった。故に何が起こったか、目の前の死に神：両儀式という女性が何をせんがために俺に刃を振るったかは容易に理解出来た。

しかし、その動機は一体何だ。互いに害を及ぼさなければぶつかり合うはずもないのに。

「ふうん、やっぱり……アイツの言った通りだ。楽しくなりそうじゃないか」

居住まいを正し、死に神は呟く。その言葉には嘘偽りは感じられず、その瞳から感じる剥き出しの感情は恐ろしいものだった。

だが、それも以前までの話。俺はこの死に神と出会った時のような臆病さを今も持ち合わせているわけではない。たとえ式さんの行動が理解しがたいものであったとしても、俺は目の前の障害を排除する。ただそれだけなのだ。

「――こんなところで、躓いてられない」

カチリと自分の中の機能が変質させる。

次の瞬間、衛宮士郎の……俺の身体は目の前の死に神に向けて疾走を始めていた。

最後の要因、覚悟の差

気が付けば窓からは赤々とした陽の光が差し込み、闇が近付いていることを告げている。

しかし俺の頭を占めていたのは鳴りやむことのない、甲高い鉄の衝突音。

自分自身が直面している状況であるはずなのに、どこか画面の向こう側から観ているような錯覚に襲われる。そして徐々に思考がおぼつかなくなる。

一体どれくらいの間、俺は目の前の殺意と相対していただろう？
一体どれだけ、この美しい姿をした死に神に命を奪われかけただろう？

そして、一体この戦いの意味はどこにあるんだろう。

「——ッ！——ハア、ハア」

胸が大きく上下する。それほどまでに緊迫した、油断の出来ない戦いに俺は身を投じている。相対した敵、両儀式さんの前で一瞬でも油断を見せてしまえば、その時点で勝敗は決まってしまう。

対照的に式さんは、余裕すら感じられる表情で冷やかに俺に言い放つ。

「——なんだよ、もうお終いなのか。そんなもんじゃないだろ！？」

手にしたナイフの切っ先を今一度俺に向けながら、流れるような動きで再び俺の懷に飛び込む。

その切っ先の進撃を防ぐように、手にしていた馴染みの夫婦剣を構え迎え撃つ。

再び甲高い音と共に打ち付け合われる互いの得物。

しかしその次の光景を誰が予想できるだろう。

俺が手にしていた二対の剣は、重低音をたててその場に碎け散った。あまりに作りの違う刃物ごときに、自身が投影した剣が破れてしまふなど……啞然として声も出ない。

「こんなもんじゃないだろ?!」

式さんは再びナイフの切っ先を向ける。直線だけでなく、式さんの軽やかなフェイントから繰り出される幾多の攻撃。

俺たちを取り囲む重々しい空気を引き裂きながらナイフを振るい続ける。

しかしその度、彼女がナイフを振るう度に俺が創り上げた幻想は簡単に壊される。寸でのところで彼女の繰り出す凶器を避け探し続けた。

“何故こんなにも簡単に、俺の幻想が……俺の総てが壊されるのか?”

いや、もう分かっているはずだ。

俺は知っている……以前、俺は『ソレ』を目にしたことがあるから。その『禍々しく光るその眼』と同質のモノを。

「……ってんだよ……」

不用意に近付き過ぎてしまえば、完全に式さんの間合いに踏み込む。それではこの状況は打開出来ない。

彼女の攻撃の手が休まった瞬間手に再び干将・莫耶を投影し、彼女の間合いから後退する。

「――何てモノと戦ってたんだよ。俺は」

距離をとってようやく理解した。俺が戦っているモノ正体……。あながち俺が式さんを感じていた『死に神』というイメージは全く間違いではなかったのだ。

「ああ、気が付いたか？オレのは特別みたいだね」

さらりと揺れる髪をかき上げながら呟く。

激しい動きによって肌蹴た着物を直しながら、決して瞳だけは俺から逸らさない。

「この眼のおかげで、色んなモノを失くしてきたんだ」

言葉以上にその瞳の輝きが訴えていた。

式さんがこれまで生きてきた人生の痛切さ、厳しさを。

「――オレは、自分のモノは絶対に手放さない。お前はどうか、衛宮？」

「お、俺は……」

何も答えなかった。いや、答えることが出来なかったんだ。

俺は、この人のように自分の気持ちに真っ直ぐにはいられていない。覚悟が揺らぎ、まだフラフラと考えている。結局タイムオーバーになるまで答えを先送りにしているのも、桜のことも……俺は覚悟を固められていない。

気が付くと日の光はなく、幕を下ろしたような真っ黒な闇が辺りを染めていた。

そして再び死に神が、両儀式が呟く。

「——ああ、じゃあもういいよ」

それはこれまでにないほどの冷ややかな響きで。

「今のお前は、オレの敵にはなれない」

その言葉が耳に届いた瞬間俺の、エミヤシロウの身体は宙に浮いていた。

「————あぐ……」

声にならない呻き声が、静かだった道場に響く。

間合いを一気に詰められたところからの鳩尾への前蹴り。俺の身体は問答無用に後方へと押し流され、狙いすましたように二撃目の回し蹴りが頭部へと見舞われた。

ここまでハッキリと式さんの動きを見れていたはずなのに、この戦いの中で疲弊しきった俺の身体は動こうとはしなかった。

「——そんなじゃダメだ。お前はそんなじゃなかっただろう」
薄れゆく意識の中、再び言葉を投げかけられる。今度は本当に答えられない、頭が働かない。

「最初に会った時のお前は、もっと鋭利な刃物みたいだった……そんなじゃただのガキだぞ、衛宮？」

そして、俺の意識は途絶えた。

最後の言葉の意味するところも聞けず、ただ俺に残ったのは悔しさだけだった。

— i n t e r l u d e —

少し昔の話をしよう。

これはそうだな、オレがアイツに出会った時の話だ。

ハッキリ言おう。初めて、初めてアイツを見た時“化け物”だと思った。

これまで沢山のおかしな奴らを見てきた。
それにオレだって……おおよそ『普通』とは程遠い人種なのかもしれない。

でも、それ以上だった。アイツから感じたモノ総てが、オレに見せつけているみたいだった。

『自分はこれまでお前が相對してきた者たちとは比べ物にならない、どうしようもない化け物』だって。

眼は口ほどにモノを語るなんていうが、まさにその通りなんだろうな。

アイツの眼は、どんな修羅場を乗り越えてきた人間でも簡単には真似できない。そんな眼をしていたんだ。

だから期待してたんだけどな……日を経るごとにアイツの眼はあの時持っていた鋭さを失っていった。いや、何かに迷ってるって言う方が正しいのかもな。

「——本当お前は、一体何がしたいんだよ？」

オレの目の前に横たわる男、衛宮士郎を見ながら思う。

氣にくわないのに。

幹也の近くに来てほしくはないのに。

オレの日常を壊すかもしれない男なのに。

一体何を選ぶのか、そしてそれを決めるための踏ん切りを付ける手伝いくらいならしてやってもいい。

何故だろう、オレはそう思ってしまったんだ。

「派手にやったね」

「……まあすぐ目も覚めるだろ」

声をかけてくれたのは幹也だった。

黙ってオレと衛宮の戦いをずっと見ててくれた。それがあったからこそ、オレは気兼ねせずに戦えたんだろうと思う。

「でも……」

「なんだよ？」

幹也らしくない不安そうな声、オレは思わず聞き返してしまう。返ってきたのはもちろん、幹也らしい言葉だったが。

「——式、君は大丈夫なのかい？」

「ああ、オレは問題ないよ」

嬉しかった、彼の言葉が。

思えばこの言葉が聞きたくて、この優しい笑顔が見たくて、オレは幹也の傍に居る。

だからさ、オレはオレでいられるんだ。幹也がずっと、幹也らしくいてくれるから。

なあ、衛宮。お前はどうかんだ……一体、何を迷ってんだよ？

— i n t e r l u d e o u t —

夢

吹き抜けていったのは風。

あまりに重々しく、焼けつくように熱いそれを目で追いながら、ただ茫然と立ち尽くす影が一つ。

“ ああ、一体こんなところで何をしているのか ”

彼はそう考えながら、砂埃の舞う何もないこの場所でただ佇むだけ。

これが、この人物の生きてきた総てを象徴する風景なのだとしたら、こんなにも悲しいことはないだろう。なんてどうしようもなく、報われない人生だったのだろう。

しかし、彼はまたゆつくりと歩き始めていた。

一歩ずつだが確実に、その足はシッカリとした歩みを見せていたのだ。

それは間違いでないと教えてくれた人たちがいたから。

それまでの生き方に、何も間違いはないと教えてくれた人たちがいたから、また進み始めることが出来たのだ。

ただ、正義の味方でありたかった。

ただ、歩いてきた道に間違いでないと思いたかった。

その思いを胸に歩み続ければよかったのに……。

しかし、望んでしまったのだ。

あの少女と、自身が愛してやまないあの少女を自分の手で守りたいと。

もう一度、彼女と……彼女と共に戦いたいと。

だがこの望みはおかしなものと、矛盾しているものだと、とっくの昔に気が付いていた。

“やりなおしなんか、できない。死者は蘇らない。起きた事は戻せない。そんなおかしな望みなんて、持てない”

かつて、自分で口にした言葉。

おそらくここに居る彼よりも、強い信念を持って口にされたモノ。

それが分かっているのに、それを見て見ぬ振りをしてただ歩いている。

最早それは理想への歩みではなく、『逃げ』に他ならないのかもしれない。

“きっとみんなを救うより、大事な人をずっと守り続けていくことの方が辛いかもしれない”

かつて彼に理想を与えた人が、そして今ここに居る彼の願いを肯定してくれた人が言ってくれた言葉。

それは重圧となって心を大きく揺さぶる。

“確かな幻想を持たないものが、自身の力を使いこなすことなど……出来るはずがないだろう？”

彼が、かつてよりも力を付けるきっかけをくれた人物の言葉。それは的確に彼の矛盾を指摘する。

“——オレは、自分のモノは絶対に手放さない。お前はどうか？”
彼の前に現れた、今の彼に最も影響を及ぼしたであろう死に神の言葉。

それは彼の決心が鈍っていることを露呈させ、弱さを見透かす。

これまで彼をこんなにも苦悩させたものがあっただろうか。
これまで盲目的に、一つの目的のために様々なものを犠牲にしてきた。

そして今、心にあるのは、無謀なまでの一つの理想と誰もが思い描く一つの願い。

大衆の正義の味方であろうとする理想。
大事な一人を守っていききたいという願い。

そう、彼の影響を与えた者たちは理解していたのだ。
この二つの想いの狭間で迷い戸惑うことを。

その迷いが徐々にそれまでの彼を、少しずつではあるが変質させていく要因になった。
それが正解なのか、間違っているのか、決めることが出来るのは彼のみ。

この地平を歩いている彼にしか出来ないこと。

彼は歩き続ける。

終わりも見えないであろうこの地平を。

剣戟の衝突音が木霊するその先へ。

せめて、動き始めたこの足だけは力強くあろう。
そう胸に秘めながら。

強さの意味

腹部に感じる鈍痛で俺は目を覚ました。

どうにも今日は痛みのせいで深く眠りにつかなかったようだった。寝かされていた部屋の障子を開け、縁側に出て空を眺めてみる。そこにはまだ月があり、今晚もその光を惜しげもなく夜の世界に降り注いでいた。

「――そうか俺は……」

それ以上に言葉は出なかった。

いや。それ以上に言葉にしてしまえば、あまりの悔しさばかりが後を絶たないと理解していたから。

あの式さんとの戦い……正直に言うならば、俺は楽しんでいたのかもしれない。自分がこれだけ戦えるようになったということに酔っていたのかもしれない。

しかしそんな考えを文字通り一蹴されてしまい、俺は改めて自分自身の甘さに打ちひしがれていた。

縁側に出てゆっくりと腰を下ろす。

もう一度あの戦いを、そして『エミヤシロウ』を繰り返すことになってからの今までを思い出すと、何故か笑みがこぼれた。

手元をみる。昔の自分にはなかった傷が多くあることに気が付いた。

ああ、思えばなんて贅沢な男なんだろう。

多くの人に関わってもらって、沢山の経験をさせてもらった。今の『エミヤシロウ』があるのはそれのおかげだ。

「やあ、大丈夫だった？」

「すみません、今日は迷惑をかけてしまって」

自分の背後からかけられた声に俺は会釈しながら振り返った。

そこに居たのは左目を前髪で隠した青年、幹也さんだった。彼は“よかった”と微笑みながら、俺のすぐ左隣に腰かける。

それから少しの間、どちらも口を開こうとはしなかった。ただ星を見つめ月を見つめ、少しずつではあるが景色を変えていく空の変化を眺め続ける。特に何かをするわけでもなく、ゆっくりと時間が流れるのを楽しんでいるかのように。

「――士郎くんはさ」

先に沈黙を破ったのは幹也さんだった。

「『強さ』って、どういうことだと思う？」

ゆっくりと語りかけるように言葉が響く。

俺は幹也さんに視線を向け一度瞳を閉じた後、思いを吐き出すように言葉にした。

「譲らないこと……ですか？」

それは全く嘘のない、心からの本音だった。

今までも俺はそうして“強さ”を手に入れてきたように思う。

“親父のようなヒーローになる”

“みんなを守ることでできる人になりたい”

かつての俺が目指した揺るぎない決意。

この願いがあったから俺は走り続けてこられた。

守れるならば総てを守りたい。親父が為し得なかったことをやり遂げたい。

どれだけ傷付こうが裏切られようが、その思いだけは失くさずにきた。

その結果俺は……オレは英霊となり、ある意味その信念に報いることが出来たのだ。

だから俺の中でそれは自信をもっていうことが出来る。

「そうだね。うん、それも正解だね」

幹也さんは変わらない笑顔で俺に答えてくれた。スツと立ち上がり伸びをしながら彼は空を見上げながらも一言呟く。

「強さってさ、『自分らしくあること』だと思うんだよ」

彼は俺だけにではなく、自分にも語りかけるように大事に言葉を紡いだ。その言葉にはなぜかすごく説得力がある。

それは最初の出会いからずっと、幹也さんがずっと俺と本音で付き合ってくれていたからだろう。だからこそ幹也さんの言葉は信じるに値する、俺には素直にそう思えた。

「幸いなことにさ、僕の傍にはそういう人が沢山いたんだ。そうい

う意味での『強い』人たちがさ」

幹也さんは言う、自分自身がした選択を大事にしたほうが良いと。そうでないと後悔ばかりしか残らないからと。

「ゆっくり落ち着いて、焦ってばかりじゃ何も見えてこないからさ」
そう一言呟き、幹也さんはまた笑って見せた。その言葉がそれだけ重い言葉だったかということ俺はこれからいやというほど思い知ることとなる。

ただこの時の俺には、その言葉はただの励ましの一言にしか思えなかった。

「——まったく……何————ってるんだよ」

廊下の暗がりの方から声が聞こえてくる。

その声は聞き取りづらかったが一定のリズムで近づいてくる足音を聞けば、それが誰かは容易に分かることが出来た。

「やあ、式。起しちゃったかな？」

「起きたら幹也がいなかったからな。多分衛宮のところに居るんだろう
うと思っただけだ」

式さんは幹也さんのすぐ隣に立ちながら俺を見下ろしていた。

その瞳は先刻戦っていた時のような冷えたものではなく、どこか温かみのある様な色をしていた。

そして幹也さんの方を窺ってから一言、俺に呟いた。

「衛宮、オレは幹也みたいに回りくどいことは言えない。だからハッキリ聞くぞ？」

式さんの真剣な声に、俺は一言“はい”と答えた。ただ言葉が浮かばなかったからではなく、素直にこの人の言葉に耳を傾けようと思ったからだ。

「お前、あるだろう？」

「何をですか？」

「——お前、人を殺したこと……あるだろう？」

それはあまりに予想もしない問いかけだった。言わずもがな、隣に立っていた幹也さんも驚いた表情で式さんを見つめている。

彼女の問いかけに、本当になんと返せば良いかも分からないままに、ただ首を縦に振るしか出来なかった。

ただ月の明かりだけが冴えわたり、地を照らしている。

そして俺の目の前に居る死に神の瞳がその色を変えていく。それは戦いのときにも見せたことのない、形容しがたい色をしていた。

貫き通す思い、犠牲になるモノ

この眼は一体何を俺に語りかけようとしているのだろうか。

先の言葉に素直に答えることが正解ならば、これからどんな展開が訪れるのか……予想することさえ出来ない。

ただ一つ分かること、それは『人を殺す』というキーワードが、それが両儀式という人物にとっては何よりも大事なことだということだった。

だからきつと、その回答にそれは慎重にならざるを得なかったのだ。

しかし俺が考えを巡らしていた最中、式さんはため息を吐きながら呟く。

「……まあいいや。とりあえず、オレが勝手に話したいことから話すか」

式さんの言葉に、俺は何が起こっているのか全く理解できなかった。ただ彼女は総てを確信したような表情を見せながら、言葉が続けた。

「——きつとお前は、シンプルに考えた方が良いんだよ」

「な、何のことですか？」

きつと俺は呆氣にとられた顔をしている。しかし彼女は話すのをやめようとはしない。それは最初に言った通り、ただ『勝手に』話しているからだろう。

「何がしたいのか、そのためにどうするのか、それだけを考えろっ

てことだ」

それは俺自身に気付かせようとしていたのだろうか。式さんは具体的なことを言うことは避けながらも、俺の弱い部分を的確に指摘していた。

そう、今の俺は目的の実行するための行為がチグハグになっている。自分でも分かっているはずなのに軸がぶれている……今まではそんなことはなかったはずなのに。

「いいか？ ニンゲンなんてモノは器用じゃない。自分の領分でしか生きていけないんだよ」

そう呟きながら、月の光の降り注ぐ庭に足を踏み出す。

俺はそれを目で追いながら、式さんの言葉の意味を考えていた。むしろ彼女がわざわざ俺にこんな風に話してくれている意味を見出さなければならなかったのだ。

「……オレはね衛宮」

これまでにない重たい響き。

きつとここからが核心部分なのだろう。それを示すように式さんの表情は普段の気だるそうなモノから、真剣なモノに変わっていた。チラリと横目で幹也さんを見る。彼の表情は言わずもがな、少し緊張したモノになっている。

俺も幹也さんと変わらず、そういった表情になっているのだろう。掌にジワリと汗の感触が広がっていくのを感じた。

「自分のこの日常が大事なんだよ。それこそ壊れるのを見たくないから、自分で壊してしまおうと思ったくらいに」

それはどこか、必死に訴えかける少女の叫びのようで。

きっとこれは俺だけに言い聞かせているモノではない……もしかすると式さん自身の『大切なモノ』に対する贖罪だったのかもしれない。

「――失くしそうになって、失くしちまって初めてそれが大事だ
って思えるんだ。お前はどうか？」

「俺、には……」

そう。それはきっと誰もが持っているモノだ。

かつての俺にとって、それは『正義の味方になる』という思いだった。

そして今は……。

「オレはこの日常を守りたいんだ。お前にだってあるんだろ？」

ああ、あるさ。俺がどうしても守りたいモノ、どうしても手に入
りたいモノ。

でも恐れもある、迷いもある。それを成し遂げるということは、こ
れまでの総てを裏切るということだから。選ぶはずだった総てのモ
ノを切り捨てることだから。

「何を迷ってんだ？」

一歩近付きながら、式さんは真っ直ぐに俺を見据えて呟く。

きっと俺の態度に嫌気がさしたのだろう。その表情にははっきりと
した苛立ちがにじみ出て、ハッキリと答えることを強要されている
ようだった。

「どうしたいかは……分かってるんです」

でもその返答はやはり煮え切らないもので、俺は式さんの視線に耐えきれずに顔を背けてしまった。ただ拳に力を強く握りこんで自身の不甲斐なさに耐えるだけ。こんな態度が、こんな行動が一番嫌いだったのは、俺自身だったはずなのに。

しかし俺のそんな態度に耐えきれなかったのは、式さんも同じだった。

「――甘えるなよ」

静かな、しかし大きな怒りを孕んだ声。間違いなくその矛先は俺に向いている。

「お前はただ、傷付きたくないだけだ」

最早その言葉は先程までの遠回しな言い方などではなく、俺の恐れていたモノの確信を突いてくる。

これ以上は、もう言っただけはなかった。自分でも目を背けてしまっている『甘え』を露見されてしまう。そう思ったから。

「お前の選択のために苦しむ人たちを、その光景を見たくないだけだ！」

「――そんなことは！」

ないとは、そうは言えなかった。

桜の事がそうではないか。彼女を遠ざけてしまえば、悲しむことが分かっていくから……。それを出来ない時点で俺は、式さんの言葉に何かを言う資格はない。

思わず立ち上がって反論しようとした自分があまりに情けない。ただ立ち尽くすしか出来ない、そう決めつけてしまっている自分があまりに情けなかった。

「……そんなんじゃ何に守れないぞ？ それこそ、お前が大事に思うモノすらな」

追い打ちをかけるように、再び言葉をかけられる。それに思わず子どものように躍起になって顔を上げる。

しかしそこにあったのは嘲りでもなく悔蔑でもなく、優しさをにじませた色。式さんの瞳はそんな色を湛えながら、俺を見つめていた。

「俺、は……出来るなら全部守りたい」

先程まで弱音しか出なかった口から出たのはその言葉。

何を犠牲にしても守るべきと思ったモノのために、俺は今まで鍛え上げてきた。

一体どうしていたんだろう。なまじ力を付け過ぎたからこそ、色々な事を決めかねて、後回しにしてしまっ

こんなことでは、本当に式さんの言葉通りになってしまおう。だからこそ……

「ケジメをつけなくちゃ……」

握った拳をほどこしながら、俺は努めて冷静に式さんに向き直る。この機会を作ってくれたこの人に報いなければ、俺は前には進めない。それにまだこの人には聞いていないことが沢山ある。

イメージする。

それは俺が、エミヤシロウたる由縁を示すモノ。俺と共にずっと戦ってくれた得物をこの手に現す。

そう、昔から分かっていたではないか。

俺に出来ること、それは考えること。そしてそれをカタチにすることだと。

思考をシンプルに。

どれだけ色々考えようとも、その瞬間は一度きりしか訪れない。ならば出来る限り自分が最大限の力を奮えるようにするまで。

両の手に感じる、馴染みの感触。

そしてその切っ先を俺は自身の恩師に向ける。そこに以前戦った時のような感情はない。

そう。今から起こるこの戦いにおいて、迷いなどありはしない。

俺はこの人に、両儀式という人物に自分の在り方を認めてもらいたい。

ただ、それだけなのだ。

貫き通す思い、犠牲になるモノ

「―――ようやくマシな目に戻ったな。……それだよ、オレがお前に求めていたモノはさ」

その表情は語る。『この時を待っていた』と。

言うまでもなく、式さんの瞳は俺の得物の『死』を既に捉えている。この人の中で戦いはもう始まっているのだ。

「じゃあ、式さんも本気を見せてください」

「何生意気なこと言ってるんだよ、やっぱりお前はまだまだ子どもだよ」

皮肉を口にしながらも、式さんのその表情は変わらない。

いつこの身に彼女の刃が訪れようとも、不思議ではないのだ。

「ああ、オレの得物が無いや……すまない幹也、アレを取ってきてくれ」

不意に式さんとはばけたような一言を幹也さんに投げかけた。

そう。幹也さんは俺と式さんが話している間、言葉を口にはせず、ただずっと俺たちの傍に居てくれたのだ。

おそらくそこには式さんに対する憂慮の念があったのだろう。

「―――うん、でも式……僕は、許してないんだぞ？」

「ああ、分かってるよ。オレはお前がいるから大丈夫だ」

きつと戦わせたくないはずだ。これ以上式さんを非日常には置いては置きたくないんだろう。

だが次の瞬間、幹也さんの見せたは変わらない笑顔だった。一言“うん”と口にして自身の部屋に引き返していく。それは幹也さんが式さんを心の底から信用している証明なのだろう。

「……衛宮、最初に聞いたよな？」

“幹也が得物を取ってくる暇つぶしだ”と言いながら式さんは話し始める。

「ハッキリとは言えません。ただ……それに似た経験をした記憶はあります」

この身でなくとも覚えているあの感覚を、好きになれないあの感覚を忘れることは出来ない。自らの手で、人の命を刈り取っていく。犯していく。亡き者にしていく。

より大勢を救うためという理由があろうとも、それが『人を殺す』という行為を俺は行ってきた。それは何が変わっても揺るがないだろう。

だからこそ、俺はこの人の問いに素直に答えよう。この人の想いを、しっかりと受け止めるために。

「——でも俺は自分を全うするために、もう決して自分の大事なものは落とさない」

「ああ、本当にお前らしいよ」

式さんは笑う。

俺という人間を本当に理解することが出来たと。その上で、やはり自分たちは相容れない者同士なのだと。

「昔教えてもらったんだよ。『人は、一生のうちに一度しか人を殺せない』ってさ」

そう、きっとこれが式さんの語りたかった一番の言葉。スラスラと淀みなく話す姿から、いつもそのことを心に留めているんだろうということとは、想像に容易い。

しかし、正直彼女からこんな言葉が出るとは、俺は考えもしていなかったということも事実だ。

「笑っちゃうだろ？ オレがこんなこと言うなんてさ。でもね、それって本当に事なんだよ」

「――ホントの、こと？」

「オレは自分が不確かでしょうがなかったんだよ。だから生きている確証が欲しかった……」

だから大事なモノを殺そうとした。

大事なモノを奪ったモノを殺すしかなかった。

でもそれはあまりに悲しすぎる決意と諦め。

しかし、それを言葉にしながらもその表情に後悔は見えない。どこか健やかで、大きな支えを持っているようだった。

彼女は身を翻し、庭の中心に歩き始る。

流れるような歩みはどこか虚ろで、しかし彼女の纏う空気はそこに確かに在ることを印象付ける。

「オレはきつともう、誰も殺せない」

言葉から感じる強い意志。最早それ以上何を言わなくても分かる。もうすぐこの時間が終わってしまうのだと。

それを指し示すように、彼女が一番大事にしている人物が朱塗りの鞘に収められた刀を

手に再び俺たちの前に姿を現す。

それを笑顔で受け取りながら、何度か言葉を交わすと幹也さんが式さんから離れていった。それと同時に式さんは次第に纏った空気をより、『ヒトからかけ離れたモノ』へ変質させていく。

「……衛宮、お前は不確かでも何でもない。ただ、前だけを見て歩いていくだけのヤツなんだろう」

それはきつと、俺たちの『人を殺すこと、生かすこと』への考え方の相違を指し示していた。

お互いを理解することは出来る。しかし、その生き方を自身の中で許容することは絶対に不可能なのだ。

「——なんだかさ、酷くお前が憎らしくて羨ましい」

「俺だって、式さんみたいな生き方……羨ましいけど、しようとは思わない」

手にした自らの得物の切っ先を、俺は再び目の前に立つ者に向ける。立ち居姿ですぐに分かる。きつと式さんは刀を持った状態の時、一番の力を出すことが出来るのだと。

正眼に構えられた刀からは何も感じられない。ただあるのは『斬る』という明確な意思のみ。

「さあ、やろうぜ。見せてみるよ」

「ああ、そっちこそ……もう後には引けない！」

刹那、風が流れた。

ただ音もなく、頬を撫でる優しい風が。

そんな優しい光景があっさりと違うものへと変わっていく。

その合図は言わずもがな、あまりに甲高い剣と刀の鳴り響く音。

「――ハアアア!!」

「――っ！」

それは互いの存在意義を証明するための戦い。

決して触れあえぬ二人が、唯一共有できたたった一瞬の出来事であった。

— i n t e r l u d e —

ぶつかり合う。それは火花をあげながら踊る、まるで演武のように軽やかに、そして豪快に。

一方は一刀を駆使する使い手、両儀式。もはやそこには姿から感じられる女性的な雰囲気は皆無。

そこに在るのは、目の前の敵をその刃にて斬り捨てんとする、それ以外のモノを総て排除してしまった者。

片や二対の夫婦剣を操る者、衛宮士郎。知識に裏付けされた鍛練のもと、繰り出されるは変幻自在の動き。それを駆使しこの戦いに臨む。

歩数にしておよそ、十余の距離。

その距離を瞬きの間に詰め寄られる。これまで士郎が戦ってきた者たちとも段違いの、稲光を思い起こさせる速度。

しかし、真に特筆すべきはそこではない。その速度より恐怖せねばならないモノ、それは『刀』。やや中段に構えられたそれは、士郎の想像などよりより早く横薙ぎに振るわれる。

ぶつかり合う刃と刃。

しかし式の刃はあっさりと、士郎の手に使っていた夫婦剣を粉碎し、より一步を詰めていく。

「――トレース、オン（投影・開始）――！！」

士郎の、一人の魔術使いから発せられる言葉。

それは自らの手に再び、壊されたはずの夫婦剣を現し、その一步の侵入を拒む。

「——っ！」

そう。常に攻めを繰り返しているはずの両儀式の、詰めの手がどうしても繰り出すことが出来ずにいる。

確かに彼女は彼の持つ得物を『殺している』はずだった。

しかし先の戦いと同様に、幾ら殺してもまた新たなモノが現れる。

死を視る者と、

造り出し続ける者。

まるで背中合わせの性質を持つ者同士の戦い。

故に、決まり手があるとすればそれは一瞬、どちらかの気が緩んだ瞬間。

再度疾走する式の身体、それに応ずるように手にもつ干将を振り下ろす士郎。

しかし、振り下ろすそれは式の速さの前ではまるで無意味。

再び鈍い音をたてて殺された干将。それを目にしてさらに懐へと突入する式。

ついに勝敗を決する一刀が振るわれるかと、その戦いを見守る幹也が想像し、式さえも確信した。

「——本当に、なんてデタラメ！」

しかし次の瞬間、発せられたのは戦いを告げる音ではなく、一步を踏み出そうとした式の皮肉にも似た一言であった。

彼女の突入はそれを行おうとした刹那に、それを阻まんと現れたのは剣の壁。

これまでに経てきた戦いの知識の中で得た魔術の運用方法、それはどの場面にも応用が利くほどに昇華されている。

そう。彼が式の前では『手のひら』にのみ限定して投影を行っていた理由はそこである。

あくまで『造り出す』のだから、その座標を自身が把握していればそれは何処でもいい。

かつての自分自身も、英雄王と対峙した際にそれを実践していた。言うなればこれは、初見の者にとってはまさに“避けることの出来ない”技の一つ。

式は咄嗟の判断で、後方に飛び退く。

しかし、その先には創造主からの射出命令を待つ無数の切っ先。

士郎は今まで無意味に後退していた訳ではない。式が必殺の一撃をもって自分に止めを刺しに来る。この瞬間を待っていたのだ。

「―――停止解凍、全投影連続層写!!!!」

響く宣誓と共に、標的に向け打ちだされる無数の剣戟の群れ。それと同時に攻めに転じようと疾走を始める士郎の姿。

それらを目にしながら、式ははつきりと逃げられないことを悟った。どのように身を翻そうが、おそらく致命傷は避けられない。当然士郎に勝つことも出来ない。

だが式は、それでも目の前の少年に跪くことだけはしたくなかった。

カッと見開かれる式の目。

その目は自身に飛来する無数の凶器を直死する。

この光景はあまりに異様であつた。

既に疾走を開始していたはずの士郎ですら、それを目の当たりにして、両儀式という人物はやはり化け物めいていると感じたほどであつた。

徹底的に退路を絶たれ、手詰まりの状態のはずの、自分より遅く動作を始めたはずの式の刀は既に迫りくる刃を撃ち落としていたのだ。その確信をもって、手にした夫婦剣を振りかざす士郎。

どれだけ相手が神速の域を越えようと、自らの勝利のみを信じ、地を蹴る。

「——これでッッ!!」

「——っ!」

剣戟の残骸たちによって舞い上がる砂埃の中、より一層強く、甲高い音をたてて打ち交

わされる刃と刃。

どちらにとっても必殺の一撃。そしてその音が終わりの合図、この二人の一瞬とも思える攻防の終わりの印であった。

「――ああ……なんて、デタラメな力だ」

砂塵の舞う中、ゆっくりと立ち上がる影が一つ。

それは手にしていた得物を見据えながら、嬉々とした表情をしていた。

「なんで最後の最後で躊躇したんだよ？」

彼女、両儀式が手にしていた刀は半ばから折れてしまい、最早使えない状態。

しかしそれでも彼女は無傷のまま、その場に立ちあがっていた。

そう。傷を負い地に膝をついていたのは、衛宮士郎の方であった。

— i n t e r l u d e o u t —

ジワリと嫌な感触が肩口から広がる。

そこに目をやると、夥しい量の血があふれ痛々しく赤に染め上げていた。

勝敗は決した。

俺の、衛宮士郎の負けだ。

「次の手も用意してたんだろ？でももう……やる気なさそうだな」

式さんは俺を見ずにそう呟く。

確かにその通りだった。もし自分の一太刀が式さんに致命傷を負わせられないならば、式さんの背後に展開していた投影を射出する、そう考えていた。しかしそれは諸刃の剣。自分自身もただでは済まない。

だがそれ以上に、式さんの速度は俺の想像を上回る速さだった。俺が莫耶を振り下ろすより先に、彼女の刀は俺の肩口を捉え、一刀に伏していた。結果俺は次の一手を繰り出すことも出来ず、地に膝をついてしまった。結局のところ式さんのポテンシャルを読み切れなかった、それが一番の敗因だろう。

しかし俺の投影した宝具を撃ち落とすためにボロボロなるまで酷使した刀では俺を両断することは出来ず、ただ軽傷を負わせた程度であった。

つまり式さん自身も得物を失い、俺と同様にこれ以上は戦うことはできない状態だったのだ。

「——はい、俺の負けです」

いかに軽傷とはいえ、これ以上戦うことは出来ない。

俺は流れる血を押さえながら、式さんに目を向けてそう返した。

俺の返答に“つまらない”と皮肉を口にしながら、式さんはゆっくりと縁側の方に歩いて行った。

俺は彼女の後姿を目で追いながら立ち上がる。少しよろける足に不安を覚えながらも、どうにか一人で立つことが出来た。

きつとこの勝負に負けてしまえば、悔しくてやりきれないのだろうと考えていたが、不思議と心を占めていたのは『爽快感』であった。栓をしていた気持ちを一気に吐き出すことが出来たかのような感覚。それだけでこの戦いに臨んだ意味があったと心の底から思うことが出来たのだ。

“これで何かが変わったとは言えない。でも……”

「おい、士郎！」

声の先に視線を向ける。そこには並んで立つ幹也さん、そして式さんの姿があった。

式さんは恥ずかしそうに髪を掻き乱し、そして笑顔を見せながら最後に一言、俺に告げた。

「また今度……気が向いたら手合わせしてやるよ」

「——ええ、色々片付いたら……お願いします」

その一言は、俺の存在を認めるモノ。

これまで冬木における様々な関係性をないものにしてきた俺が、作ることの出来た人との繋がり。何故かそれがひどく嬉しくて、自然と頬を涙が伝っていた。

時は刻一刻と過ぎていく。

間近に迫る季節に焦りを覚えながら、俺は歩みを止めることはしない。

ただ、この笑顔に報いるために。

ただ、己の中に後悔を残さないために。

東の空が白み始め、新しい朝を告げようとしている。

季節は冬、ついに俺の待ち望んだ季節は目の前に迫っていた。

力を得るということ

「――投影・開始」
トレース・オン

俺の中の総てが変わる、魔術を使う、“魔術師”としての自分へ変質していく。

言葉など、切り替えるための言葉など正直どのようなものでも構わない。

ただその言葉が俺にとって“魔術師としてのエミヤシロウ”を容易にイメージすることが出来る一番しっくりくる言葉だったということだけだ。

立ち上がりながら俺は両手に夫婦剣を投影し、誰に向けるでもなく正面を見据えた。

そうして干将を縦一線、躊躇うことなく振り下ろす。

剣術の型だとかそんなことは考えない、ただ身体が赴くままに干将を、莫耶を振るい続ける。ただ足掻くように、ただ贖罪するかのように。

そう、俺は……エミヤシロウは理解して、覚悟しておかないといけないのだ。

自分はまた、間違った道を歩んでいるのかもしれないと。

自分はあの魔術使いに教えられたはずだった。

正義の味方として生きてきた道に間違いはなかったと。胸を張っていいものなのだと。

それなのに、今の自分はどうか？なんのために強くなろうとしている？他にやるべきことがあるのではないのか？オレがあの際にあの少女にいった言葉を偽りのモノにするつもりなのか？オレには、オレにはもっと大事にするべきことがあるはずだろう？もっと多くの命を救うこと、より強固な正義の味方を目指すこと。それがオレのするべきことではなかったのか？

「分かっている！そんなことは分かっている！」
声を荒げ、繰り出す剣撃を止めることなく叫ぶ。

はつきりとしていた。俺は相反する思いを抱えていると。

“成れるなら、再び正義の味方になりたい”

正義の味方になるならば……やるべきことは一つだ。
これから起こりえること、自分が知っている限りの戦いを止めるために奔走し戦いに身を投じればいい。それこそエミヤシロウが貫いてきた生き方、“正義の味方”の生き方だ。

“大事な人を守りたい、その人一人を守れる確かな力を持ちたい”

だが今の自分はどうか？再び士郎になった時、何を思った？いったい何を望んだ？

ただ、再び彼女に会えるであろうことを喜んでしまった。出来るならば自分は彼女を守る存在でありたい。俺はそう考えてしまったのだ。

正義の味方として恥ずべき思いを、自分は持ってしまったのだ。

「——ッ——ハア！ハア、——ッ！」

もう一度力強く、自分の中に在る曇りを断ち切るように横一線、莫耶を振るう。徐々に身体は限界に近付いていく。

それでももう少し、今一度と俺は夫婦剣を、自らが描き続けてきた馴染みの剣を振るい続ける。

断ち切ろうとしたのは自分の甘さ。

俺はこの境遇に立つてもなお、成し得ていないことがあった。

強くなると、覚悟を揺るがさないと決めていたのに、俺は常に揺れている。

桜の、この街で出会うはずだった人たち事、これからの戦いできっと危険に晒されるであろうことを分かっている、俺は考えてしまふのだ。

どうしてもこの人たちを救いたいと、危険な目にはあわせたくない。彼女を選んでしまった俺が、そんなことは出来ないとは一番分かっているはずなのに……。

切嗣が最期に見せた笑顔が、幹也さんと式さんが言った言葉が胸に突き刺さり、俺を苦しめる。それはきつと、俺があまりに無謀で自分勝手な思いを抱え込んでしまっているとハッキリ理解させられてしまうからだろう。

それでも、それでも俺は守り抜きたいんだ。

大事だと思えたモノを、絶対にこの手からは落とさないと誓いたいんだ。

それが、かつての俺に出来る唯一の贖罪だと思うから。

震える手に力が入らず、ついに干将、そして莫耶を床に手放し、膝を付き倒れこんでしまう。

きっと今の俺の姿はあまりに情けないだろう。きっと笑われるかもしれない。

それでも、こんな生き方しか出来ないから……俺は這いずってでも前に進むしかない。

もう引き返すことが出来ない。俺が気付かぬふりをしていた間にも刻一刻と時間は迫る。

俺の：エミヤシロウの矛盾を孕んだまま、物語はその重い幕を開こうとしていた。

それは回避できるはずだった戦争……俺が招いてしまった災厄だった。

— i n t e r l u d e —

「それで結局、橙子さんから何を言われてたの?」

「——ん? そんなに大したことじゃないさ」

「でも、あんなに必死だったじゃないか？」

「……はあ、幹也には隠し事って出来ないな」

「まあ、君の事ずっと見ているかな……分かつちゃうんだよ」

「——言われたんだよ、『お前に足りない最後の部分』を埋めてくれるってさ」

「足りない部分？」

「ああ、何ていうのかな……説明しづらいんだけど、結局オレは不確かだったんだよ。いくら幹也と一緒に居ても、どれだけ日常の中で生きてても」

「式……」

「アイツは、士郎はそこを埋めてくれるって、トウコは言ってた。……まあ実際、トウコに良いように使われただけなんだろうけどね」

「確かに。橙子さん凄く士郎くんにご執心みたいだからね」

「とりあえず、これからは士郎自身がどうするかってところだろうな。」

「そうだね。士郎くんなら大丈夫だよ……それで、君は大丈夫なのかい？」

「大丈夫に決まってるじゃないか。だって……」

「うん。僕は君を一生、離さないからな」
「——当たり前だろ？ 離れてやらないよ、オレも」

— i n t e r l u d e o u t —

始まりの季節へ

差し込む陽が今日の始まりを告げる。一日は始まり、いつものように様々な人がお互いに自分の役割をこなしていく。

うつすらと目を開け周りを見渡す。見慣れた風景がそこにはある。もう何年も使っている魔術を鍛練する場、俺の秘密基地だった場所だ。

「朝…か…」

一言呟き、俺は少し身ぶるいをしながら身体を起こした。

さすがにここで寝るべきではなかったかもしれない。まだ風を引くほどではないかもしれないが、空気は冷気を帯びてきていた。

「先輩？…またこんなところで寝ていたんですか？」

不意に声が掛けられる。土蔵の入口に目をやるとそこには家族当然に接している少女の姿があった。

「ああごめん。またやつちまったみたいだ」

俺はその少女、間桐桜に謝罪をしながら立ち上がって彼女が待つ入口へと歩を進める。

すると桜はいきなり顔を真っ赤にし、俺が追いつくよりも早くその場から駆け出していた。

手には俺にかけようとしていたのであろう毛布がチラリと見えた。

「ああ、なるほどな…：悪いことしちゃったかな」

桜に好意を向けられていることはだいたい前から気が付いていた。

まあ昔の俺ならば気付かないだろうが、さすがに今の俺はかつてほど鈍感でもない。

素直に彼女の気持ちが俺にとっては嬉しかった。いつの俺の記憶の

中でも、彼女だけは俺の『日常』の中の存在でいてくれたから。

そんなことを考えているから少しゆったりと歩いてしまったんだろう。俺が土蔵を出るころにはすでに桜は家の方から、早く来てくださいねとこちらに声をかけてくれていた。

俺は片手をあげて彼女の声にこたえ、視界を空へと移す。

そうする度に思い出すのは、知らず知らずの内に恩師と呼ぶようになっていたあの三人の事だった。

橙子さんからよく言われていたのは、『確固たる意志』を持つこと。

実際に彼女から何かを学んだというわけではない。ただ色んな場所に行き、様々な経験を積んだ。その中で自分にプラスとなる魔術的な鍛練をしてきたわけなのだが、結局のところ、橙子さんの言葉が『魔術を使う者』として、一番大きなキーワードだったように思う。

そして二人の、幹也さんと式さんから言われた言葉。

強くあるために、『自分らしく在る』こと。

自分らしい選択をするために、『シンプルな思考を持つ』こと。

どれだけ鍛練を積み、技術面・肉体面が向上していこうが、結局のところそれをどのように発揮するのかは自分の心の強さ次第なのだ。

ようやく最低のランクはクリアした。あとは本当に、自分自身の決意の固さにかかっていると書いても過言ではない。

「——あいつが思い描かないようなエミヤシロウになる……それがまず俺がすべき事なんだから!!」

一言呟いて、俺は家に向かって歩き始めた。もうそんなに時間はない。ならば今自分が出来ることをどうにかしてするしかない。本

当に、時は止まってくれないのだから。

制服へと身を包み居間の戸を開ける。暖かな空気と共に香り立つのは、どこかホッとする朝食の香り。

今日は和食なんだと思いながら、俺は静かに戸を閉め自分の席を目指す。

居間に置かれた広めのお膳の上には、もう既に三人分の朝食が用意されていて、後は俺の到着を待つばかりという状態であった。

そしてそこに鎮座するは言わずもがな、姉のような存在であり、虎と呼ばれる女性が一人。彼女はどこか落ち着きのない俺に言葉を投げかけてきた。

「もう、遅いよ士郎く！ごはん冷めちゃうじゃない!？」

全く、この人は相変わらずだなと心の中で苦笑しながら、俺も自分の席へと腰かけながら目の前の虎に一言呟く。

「――ごめん、ちょっと寝坊しちゃったみたいでさ」

「もう。最近本当にお寝坊さんだねえ。士郎が夜更かしして何してるのか、お姉ちゃんすごく心配!」

にやりと嬉しそうな笑顔を浮かべる藤ねえ。きつとなにか俺をからかうネタでも思いついたのだろうなと考えながら、俺はとりあえ

ず無視することにした。

こんな日常を肌で感じながら、今日も平和だなと思う。うん、やっぱりこの空気感が俺は好きなのかもしれない。

「——お待たせしました」

藤ねえの騒いでいる中、台所から桜がようやく出てきて席に座る。にこりと笑いながら、慣れた手つきで藤ねえと俺にお茶碗を渡すと、ようやく藤ねえも静かになって食事のあいさつを待っている。これが衛宮家の朝の何げない風景の完成だ。

「さて、それでは……」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきますっ!!」

食卓に響くそれぞれの声。ニコニコと桜の作った朝食を食べる藤ねえ、それを笑顔で見つめる桜。うん、やはり朝はこうでなくては。この光景を見るのがあまりに嬉しくて、しかしどこか懐かしくて……。

複雑な顔をしているであろう表情を悟られまいと、味噌汁のお椀を手に取りゆっくりと、ただゆっくりとその味を楽しむことにした。きつともうすぐ、こんな日々が遠いものになっていくのだろうと確信しながら。

朝食を終え、会議だと慌てる藤ねえと部活に向かう桜を見届けてから俺は自宅を出た。いつもより少し早目の時間になったせいだろうか、通学路にいる学生の数も疎らだった。

その学生たちの中に友人の姿を見つけ、俺は一声かける。

「よお、一成。今日も生徒会か？」

「ああ、衛宮か。今日も早いのだな」

柳洞一成、彼も桜と同様に俺の『日常』としての存在だった。

冬木の人たちとの関係が幾ら希薄になっていったと言っても、一成とは変わらない関係を築くことが出来た。ただ、常に生徒会の手伝いをするということはもちろんなかった。自分に時間がある時だけ、一成に手を貸す程度である。

そんな風にしてでも俺が一成との関係を築こうとしていたのは、おそらく彼とは友達でいたいという俺の我が儘があったからだろう。

かつて、魔術を使う者として生き始めてから、どの記憶の中にも彼と再会した記憶はない。今の俺になって初めて一成と対面した時の何とも言えない気持ちを俺は忘れることは出来ない。いわゆる郷愁の念というやつだろうか、上手に言葉には出来なかったが、すごく嬉しいと思えた。

「最近忙しそうだな、放課後も遅くまで残ってるみたいだし」

「そうなのだ、少し立て込んでいてな。また手伝いをしてくれると

助かる」

そんな他愛もない話をしながら、俺たちは学校への道を歩いていく。こいつの誠実な性格からして他の人間に頼みにくいのだろうと考えながら、ふとある疑問にぶち当たった。

「そう言えばさ、他の生徒会の役員はどうしたんだよ？」

「そ……それはだなあ」

「最近一成以外の役員の子って数人しか生徒会室で見ないけど……」
うろたえながら返答に困る一成。どうにもはっきりしないと思いつながら、別の話題を振ろうと時、一成がいきなり大声をあげた。

「き、貴様！こんな早くにまた何か悪巧みか！？」

いきなりの大声にもびっくりしたが、普段の言葉遣いと大分違うことを考えると怒らせてしまったかと反省し、俺はごめんと言いながら彼の方に視線を移す。だが一成は俺の方ではなくもっと道の先、校門の方を見て声を荒げていたようだ。

無論俺の声に反応もせず、一成は猛ダッシュで校門に近付き相手と口論を始めた。

「まったく、何やってん……」

俺が一成を落ち着かせようと駆け寄って声をかけようとした時、俺は思わず声を失ってしまった。そう彼女が、あの“黒髪の少女”がいたからだ。

「ん？ああ、すまん衛宮。この女を見た途端に我を失ってしまった。まだまだ修行が足りん」

—— 一成の声が遠くに聞こえるような気がした。

「この女呼ばわりは失礼ね、柳洞くん？」

——この声、はつきりと覚えている。俺がオレであったころのパ
ートナーの声。

「たわけが！生徒会役員への横暴、謝罪もせずによく言ったものだ」
「この間お互いに納得したと思っていたけど、ご希望ならまた後日
にじっくりお話しさせていただくわ」

——このハッキリとした物言いも、その実直な眼差しも、記憶の
ままだ。

「どうしたのだ？衛宮よ」

「ああ、すまない。少し呆けてた」

——あの朝日の輝く中で、忘れることのない笑顔を残してくれた
少女、だから親愛を籠めて俺は言葉にしよう。普段と変わらない、
いつもの言葉で。

「よお、遠坂って朝早いんだな」

変わらない風景、変わっていくモノ

〔interlude〕

「よお、遠坂って朝早いんだな」

にくったらしい生徒会長と口論……とまではいかないが会話している最中、不意に遠くから駆け寄ってきた男子が声をかけてきた。

そう、私はこの男子を知っている。私がこの学校で知るなかで一番危険で……一体何なのか分からない男。

そしてあの子を、桜を眺めていると度々姿を現す、桜が一番良い笑顔を見せる男子だ。

いや、違うか。むしろこの男子の前でしか桜は笑顔を見せることはなのだ。

「貴方は……」

「衛宮！このような女と会話する必要はないぞ！」

私が衛宮くんに戻答しようとする、またまた生徒会長の邪魔が入る。全く、なんでこんなに目の敵にされるのかも正直分からないが、まあここは身を引くのが良策だろう。

「衛宮くん？あまり柳洞くんと仲良くしていると便利にこき使われるだけよ」

とりあえず嫌味を一言呟いて、踵を返して再び私は校舎の方へと歩を進める。

「ありがたいな、遠坂」

不意に予想外の声が返ってきて、思わず私は立ち止まってしまう。何故？嫌味を言っただけなのになんで？訳が分からない。衛宮くん……一体どんな神経しているの？

上手に言葉にすることは出来ない……でも私の勘が、魔術師としての勘がこう告げている

“この男は危険すぎる”と。

そう、彼から発せられるあの独特の雰囲気。それは間違いなく『魔術を使う者』が発するモノのそれ。いや、それだけで言い表すことの出来ないモノをあの衛宮士郎という男は秘めている。私にはそう思えて仕方がなかったのだ。

「——あいつも、関わってくるんだとしたら……」

教室までの階段を足早に歩きながら、私は考えていた。

衛宮士郎という男を野放しにはできない。冬木の管理者として、何をするためにこの地に留まっているのか、何が目的なのかをハッキリさせなくてはならないと。

「もし、聖杯戦争が目的なら……叩くしかない」

そう、もう既に時は満ちている。聖杯戦争に関わる者がこの地に集結し始めている今、決断を急がなければならないのだ。

私は逸る気持ちを抑えながら、階上へと急いだ。まずは落ち着くこと、優雅に振舞わなくてはならない。それが私のポリシーなのだから。

〔interlude out〕

「遠坂か……」

自分で呟いた、あまりに懐かしい響きに、少しだけかつて彼女と共に戦いの夜を駆け抜けていた時のことを思い出し、思わず笑みが出た。

そんな俺を不思議に思ったんだろうか一成は俺の顔を、眼を白黒させながら心配そうに見ていた。

「ああ、すまん一成。早く行こうぜ」

「今日は本当にどうしたのだ衛宮？風邪か？もしや！あの女狐にあてられたか!？」

あまりに突飛のないセリフを吐きだす一成。それもあながち間違ではないが、とりあえず俺は笑って誤魔化すことにした。

一成はどうにも納得のいかない様子だったが、足早に俺たちは校内へと急ぐことにした。

「すまなかったな、衛宮」

「ああ、じゃあ教室に鞆取りに行つて、そのまま帰ることにするよ」

時間は流れ、既に日も暮れ始める時間帯。

俺は一成の手伝いで、壊れかけだというストーブの点検をしていた。数としてはそんなに多くはないものの、やはり一人での作業となると時間はかかる。

おそらく予想より一時間近くは時間をかけてしまったのであろう。他の仕事で外に出ていた一成が帰ってきたところに俺のようやく作業を終えることが出来た。

「最近物騒だからな。気を付けるのだぞ」

「それは一成もだろ？早めに帰れよ」

別れの挨拶も済ませ、俺は一路自分の教室へ急いだ。

こんな時間だ。窓から見える校庭にも部活動している生徒は疎らにしか見られず、廊下には誰一人としていない。

「まあこんな時間だしな……」

独り言を呟きながら、オレンジに染まった廊下を急ぐ。

この景色を見ていると、どこか家路を急ぎたくなるのは何故だろう。きっと誰もがそうだろう。それぞれに持つ、“本当に帰りたい場所”。俺にとってはそれが、あの切嗣と暮らした……そして今、藤ねえや桜と食卓を囲むあの家。彼女と初めて出会ったあの場所なのだ。

ようやく教室の前にたどり着く。

おそらくもう誰も居残ってはいないだろうと思いつつも、ゆっくりと扉を開く。

真っ先に目に入ってきたのは、その美しい横顔だった。

もう誰もいない教室で一人、ただ外の風景を眺めている影が一つ。ああ、いつかこんな光景を見たことがあったような気がする。

その影は俺の存在に気がついたのか、少しだけ微笑みながら俺へと声をかける。

「遅かったのね、衛宮くん」

「遠坂、まだ残ってたんだな」

互いに視線を交わらせながら、それ以上には何も言わない。ただ直感する。彼女が一体何をするために、この教室に一人残っていたのか。

答えは、簡単なことなのだ。

「じゃあな、遠坂も早く帰れよ」

自分の席に掛けておいた鞆を手に取り、踵を返し片手をあげて別れを告げながら廊下へ出るべく歩き始める。

「――ねえ。貴方……いつまで惚けた顔してるつもりなのよ？」

「ん？何言ってるんだ、遠坂？」

背後からかけられた声に、俺は振り向かずに返答する。

綺麗な声から感じられたのは警戒。おそらく既に気が付いていたのだろう、俺が魔術を使う者だということを。

背中に向けられる殺気が重い。しかしどうということとはなかった。これくらいモノなら、逆に心地良いほどのだから。

「それが惚けてるって！……いいわ。聞きたいことは一つよ」

棘のある響きを投げかけられる。その言葉に応じるように、俺は彼女の方へと顔を向ける。

言うまでもなく、遠坂はするどい目つきで俺を睨みつけていた。それは明らかに敵意を持った視線。魔術師に向けられるべきモノ。

「――衛宮くん。貴方、この街で一体何をするつもり？」

「何をする？俺はただここで生きてるだけだ。それ以上に何も無い」俺の言葉に顔をしかめる遠坂。バカにしているように聞こえたかもしれない。しかしそれ以上の目的は俺にはない。

「――ハア」

彼女は呆れたように溜息をついてからブツブツと“嘘ではないみたいね”と呟き、俺に視線を戻した。表情からはようやく彼女らしい、落ち着いた様子が見て取れた。

「聞き方が間違ってたわ。魔術師がこの土地に来て、やることは一つしかないのよ。」

一呼吸、ゆっくりと深呼吸した後で遠坂は呟く。

これは俺が、そして彼女が戦う意味を示すための言葉。確認するための言葉。

俺だけが一方的に考える、彼女との誓いのようなモノだ。

「――貴方、聖杯戦争に参加するつもりなの？」

「――それは言えない。でも、一つ言えることがある」

「俺は、衛宮士郎は聖杯なんかに興味はない」

ただ、聖杯の導きによって現れる……彼女と一目会いたい、ただそれだけ。

そう言った点では、俺は聖杯を欲しているのかもしれない。

しかし叶えたい望みなど、そんなモノ俺にはもうない。

いや。俺はずっとその道の上を歩いているのだから、今さら望みをかなえてもらう必要などないのだ。

「――そう。なら良いわ。でもね、もし貴方が私の邪魔をするようなら……」

「ああ、その時はどうぞご自由に」

俺は手をヒラヒラと振りながら、再び教室の扉を開け、足早にその場から立ち去ることにした。

「ちよつと、まだ話は……！！」

その後、遠坂が何かを言っていたようだが、ちゃんと聞きとることは出来ない。むしろ聞きたくないという方が正しいのかもしれない

い。これ以上の遠坂との接触は、俺にとっては決意を鈍らせるモノ以外の何物でもなかったのだ。

— i n t e r l u d e —

「ちょっと、まだ話は……!!」

その呼びかけに応えようともせず、衛宮くんは教室の外へと去って行ってしまった。

無論止めることも出来た。強引に話を続けることだって。

でも何故なのだろう。言葉は出ても、身体が動こうとはしない。ふと視線を自らの手に移すと、両の手が小刻みに何かに怯えているように震えていた。

「ッ!!……」

恐れてしまったのだ。彼を……衛宮士郎という魔術師を。

彼と話している時には気付いていなかった。それだけ衛宮士郎と対峙している間、気をはっていたということだろう。

しかしそうだったとしても、私がこんなにも誰かに怯えるなんて。これまであの神父にさえ嫌悪はしても、怯えることなんてなかった。それが彼が相手と言うだけでこんなにも違うだなんて……。

「どちらにしても、このままにしておけない」

衛宮士郎……あの男だけは聖杯戦争など関係なく、危険すぎる。

頭に浮かぶマイナスの感情を破棄しながら、ただ私は考える。
彼の思惑とは一体何なのか。彼がこの冬木で本当にしようとしていることは一体何なのか。

しかし答えの出ないままに、周囲は闇に染まっていく。

そして夜が、魔術師たちの駆ける時間が刻一刻と迫りつつあった。

— i n t e r l u d e o u t —

魔術師の夜？

夜、季節も移り変わって陽が落ちるのも早くなっている。いくらあたりが闇に沈んでいるといっても、遅いとは言えない時間帯にも関わらず街路に人の影はない。

ここ最近冬木でおかしな事件が頻発していた。おそらくそのせいだろう。

何の手がかりもない強盗殺人事件、新都で頻発しているガス漏れ事故：それらの原因は大体見当は付いている。

そしてそれを行うであろう、あのサーヴァントたちの顔を思い出しながら、俺は苦笑いを浮かべる。

「――もう召喚されてるんだろう」

一言呟き、俺は急ぎ足で家を目指した。まだ俺が関わってはいけない、勝手にそう思い込むことに。

それが自分の身勝手な考えだと、あの理想をもつ者としては恥ずべき行為であると分かりながら。

「何故見過ごせる：分かってるのに……」

ただ言い訳をしていた。自分が関わっているのはあの夜からだ。何も知らなかった俺が一度、“殺されてしまった”あの夜からだ。

拳に力を込める。それは掌に痛みを生むだけの不毛なこと。自分が変わったことへの後悔なのか報いなのか、ただ自分があまりにも

不安定でどうしようもない奴ということはハッキリしていた。

「――ッ！」

刹那、どこからともなく殺気を孕んだ視線を感じ、俺は思考を魔術師のモノへと切り替える。

間違うはずもない。俺のことを見ている“誰か”がいる。

それとともに響いてくる靴音が一つ。ゆっくりとした歩みでこちらに向かってきていた。

「……なんでだ？なんで何もしてこない？」

相手も魔術師ならば、姿を見せる前に攻撃してくるのが必定。しかし靴音の主は最初に俺に殺気に向けて以降、ただこちらに歩いてくるだけだった。

点在する街灯の下、その少女は姿を見せた。

忘れるはずもない。その容姿、その銀の髪、意地悪に笑う可愛らしい笑顔……小さな少女が俺に笑いかけながらそこにはいた。

その姿に俺は立ち尽くすことしか出来なかった。

俺はこの子を知っている。雪のような真白がよく似合うこの子を。俺が救うことが出来なかったこの子を。

「イ……」

彼女の名前を口にしようとして、すぐに声を押しとどめる。何故かは分からなかった。ただ彼女に視線を送り続けるしか出来ない。そして一歩、もう一歩と少女は歩みを進め、ついに俺の横を通り過ぎていく。そして一言、鈴の鳴る様な響きで俺に呟いた。

「早く呼び出さないと死んじゃうよ、お兄ちゃん」

その言葉をようやく俺は理解した。この少女はこの瞬間、俺を殺すつもりだったのだろう。本当はそうするつもりだったのに、こうして警告だけしかなかった。

これは同じ人を親に持つ俺への憐れみ……いやきつとこれはこの子なりの優しさだったのだろう。

「ああ、でも俺は殺されない」

俺は少女の後ろ姿を見送りながら、そう呟いた。きっと彼女には届いていないだろう。届いていたとしても戯言にしか聞こえない。だから今はこのままでもいい。次に対峙した時、俺はこの子には殺されない。

自分のためにも……彼女のためにも。

（interlude）

「なんで？なんで！？」

足早に駆けていく少女の表情は完全に困惑の色を見せていた。

今すれ違った男。自らの耳に入ってきた情報では、そこまで力も強くない、一般人とほとんど変わらない半人前の魔術師ということだった。

しかし、少女が行使していたはずの魔術は彼には通じず、こんな結果を彼女にもたらしたただけだったのだ。

少女の目的は一つ。ただ男がどんな顔をしているのか、それを確認しただけだった。自分から親を奪った男、自分を見捨てた人間が育てた男の顔を。

だから少女は、自分の従者も連れてこずにやってきた。

仮につまらない人間ならば聖杯戦争を前に殺す。

気に入ればそれが始まってからじつくりと痛め付けてから殺してしまおう。

どちらにしても結果は変わらないが、そうしようと少女は心に決めていた。

しかし実際、今は少女の方が男に困惑させられていた。魔術が効かなかった、それはどうでもいい。

あの言葉だ……あの言葉がいけなかった

『ああ、でも俺は殺されない』

この言葉を聞いた時、脳裏に浮かんだのは自分に優しく語りかける父親の姿。

ただそれだけが彼女を、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンをこんなにも苦しめていた。

「――何なの？　なんでな！？」

言葉の端々、そしてその表情から滲みでる少女の心の揺らぎ。殺すと決めたはずの相手に、どこか懐かしさすら感じられる。そんなおかしい感覚に彼女はどこか嬉しさと悲しみを抑えきれずにいた。イリヤはその小さな手のひらをギュッと握りしめながら、静かに溜息をつく。

「もうダメ……今度会ったら殺しちゃうよ、お兄ちゃん」

もう考え疲れたのか、イリヤは自分が一番はつきりと出せるシンブルな結論を出す。

そうすれば思考がきれいに整う、そうすればおかしくなることはない、そうすれば何にもとらわれずにアインツベルンの悲願を果たせる。

イリヤは自分にそう言い聞かせ、自らに用意された城へと帰っていく。

もう開幕まで残り少ない時間を、彼がどう過ごすのかを楽しみにしながら。

Interlude out

開幕

イリヤとの遭遇から数日、俺は普段通りの生活を送っていた。

相変わらず学生としての生活においては、一成からの頼まれごとも多く、遅くまでかかることも少なくない。

事実、今日も部活動をしているであろう生徒たちと同じくらいの時間まで、校舎に残ることになってしまった。

「さて、さっさと帰るかな……」

俺は鞆を手に、校外に向かって校庭を歩く。

ふと視線の先に、よく知る少女の顔を見付ける。少女は部活動の帰りだというのに一人、足早に学校の外に出ようとしていた。

「おーい、さく……」

「おい！何僕の事無視してるんだよ！？」

前を歩く少女、桜に声をかけようとした時、ほぼ同じタイミングで響く怒鳴り声。

その声の主は桜に走り寄り、彼女の腕を乱暴に掴む。

「――や、やめて下さい、兄さん」

「うるさいんだよ、おまえは僕の言うことを聞いてりゃいいんだ！」

二人のやり取りを見て見ぬ振りをしながら脇をすり抜けていく者や、ヒソヒソと遠巻きにそれを眺めている者たちもいる。そんな中

で、桜の手を掴んだ男子は強引に桜を引っ張りながら、校門の外へと連れて行こうとする。

そう、こいつは昔からそうだった。平気で人を……桜を傷つける。そんな風にしか自分を表現できないやつだと分かりつつも、だが俺はその男子の、間桐慎二の行動を許すことが出来なかったのだ。

「――何してんだよ、間桐!!」

俺は、自分でも驚くほどに大きな怒鳴り声を上げていた。周囲に居た生徒たちも、その声にビクリと身を振るわせる。

俺は二人の間に割って入りながら、鋭い視線を慎二に送った。

「……な、何だよ？また、またお前かよ衛宮!？」

「ああ、だからなんだよ？」

俺の顔を見た途端に先程までの強気の様子が一変、オドオドとしたものになってしまう慎二。

コイツとだけは何故か一成のように仲良くすることは出来なかった。むしろ桜への態度の事もあり、俺はかなり冷たい態度で慎二に接していた。

「――そもそもね!」

勢いよく俺の胸倉をつかみ上げながら詰め寄る慎二。

「僕たちがこんな風になってるのは衛宮、おまえのせいなんだって

前にも言ったよな？」

グツと力を込めながら挑発的な瞳を見せる。

確かに以前にそう言われたことがあった。そもそも桜が俺のところに手伝いに来る必要も正直に言えばない。

しかし俺は桜の好意を無下には出来ず、桜の好きなようにさせてやっているだけだ。何を選ぶのも、それは桜の自由にさせてやりたいと思うから。

「ああ、そうだったな……でもな、それで妹に暴力を振るってもいいのか!？」

「そ、それは……」

俺がここまで怒ると思わなかったんだろう、慎二の手の力が弱々しくなっていく。

それを確認しもう一言、慎二に対して言葉をかけた。

「なあ間桐、俺が悪いのは分かってる。お前の言うことだって理解しているつもりさ。でもさ、頼むから兄が妹に暴力を振るうなんて事だけはしないでくれよ」

俺の言葉に何かを感じたのだろう、慎二は手を退けて桜に向き直って一言呟く。

「分かったよ、とりあえず衛宮との話はまた後でだ。でもね、衛宮の家に行くのも程々にするんだ!」

そう言葉を残し、慎二は足早にその場から去っていった。

何というか、本当に去り際の手際に良さと、捨て台詞には相変わらずビククリさせられる。

「先輩……本当にすいませんでした」

慎二の逃げ様に感心させられていた俺に、桜は謝罪の言葉を述べる。

まあ、元々は俺が桜に甘えているせいなのだから、しょうがないのだが……。

「まあ、自分でちゃんと選んでな。間桐の言うことごとくともだから、気を付けるんだぞ？」

桜にそう笑いかけながら、俺たちは校門の外を目指した。周囲は落ち着き、普段の下校の風景にその姿を戻していた。何事もなかったように、そして今からも何も起こらないことを示すように。

そう。思えば今日こそ、俺が一度死ぬはずだった日。

俺が慎二を『間桐』と呼ぶ関係になったせいで。

俺が今日、学校に残らなかったせいで。

この戦争で起こりえたはずの事象は、その様相を変えていくことになった。

周囲にはそれぞれの営みの光が見え始めて久しい時間帯、俺は桜

を家まで送りに出ていた。夕飯の片づけを終えて、少しばかり休憩をしていた時のことだった。普段ならば藤ねえが桜の事を送ってくれる。しかし今日に限って藤ねえは“お姉ちゃんの色々と忙しいのだ！”などと言い、そそくさと自分の家に帰ってしまった。

確かに俺個人としても普段から桜には世話になっているので、快く送っているわけなのだが、何故だか普段のような会話がない。俯き加減に俺の後ろを歩く桜に俺はどうしたらいいか分からず、黙ったまま歩き続けた。

遠くの車の音が聞こえるほど、あまりに静かな路地。

最近の騒ぎのせいもあるのだろう、俺たちの歩く路地にもう周囲に人の影すらない。

「――先輩、もうこの辺りで結構ですから」

深山町の交差点を少し越えたところで、桜が遠慮がちに声をかけてくる。

「そうか……家の前まで送るぞ？」

「いえ……ここまでで十分です。すいません、ここまで付き合ってもらってしまって」

深々と頭を下げる桜にこれ以上何も言えず、俺は彼女の言葉に従うことにした。

「じゃあ、気を付けて帰れよ」

「はい、先輩もお気を付けて」

二人で笑顔を見せあいながら、その場で別れた。俺は桜の姿が見えなくなるまで彼女を見届ける。明日も元気な姿を見せてくれたらどれだけいいだろう。

そんなことを考えていた時のことだった、その響きが俺に投げかけ

られたのは。

「人の妹を自分のモノみたいに……本当に気に入くわない奴だよ、お前は」

開幕 始まりの音

街灯に照らされ、その影は立つ。

その立ち居姿は堂々とし、自らの威厳をこれでもかと見せびらかすよう。

その表情は自らの苛立ちを隠さず、ハッキリとした嫌悪を俺に向けている。

“ここまで感情をぶつけてくるとは、こいつらしくない。”

それがこの男、間桐慎二の今の姿をみた時の、俺の素直な感想だった。

「――なんだ？俺は桜を送りにここまで来ただけ……」

「うるさいよ！！ああ、本当におまえはうるさい奴だよ！？」

響き渡る大声。おそらくその声に反応する者もいるかもしれない。しかしそんなことすら気付かないほどに、慎二は興奮していた。今すぐにでも、俺をどうにかしてしまいたいと言わんばかりの俺に向けながら。

「衛宮、おまえ魔術師なんだってな。じゃあ聖杯戦争の事も知ってるんだろ？」

ニヤリと嫌な笑顔を見せながら、慎二は言葉を止めようとしない。

「――それがどうした？知ってて、お前に何か関係があるのか？」
努めて冷静に言葉を紡ぐ。

慎二が俺を試しているというのは明白。そしてこの後の展開も予想できる。

おそらくこの場を逃げきることは出来ない。慎二の後ろに居るであ

ろう、“あのサーヴァント”に速度では敵わないということくらい分かってるから。

ガキンと頭の中で、重い鉄が打ち鳴らされる。

目が覚めるような、慣れ親しんだ感覚。

ダラリと投げ出していた腕に力が、目の前の障害を打倒するための力が籠る。

「ああ、関係ないね。だってさ、おまえは今日……僕に殺されちゃうんだし！」

余裕に満ちた表情で慎二は呟く。その響きと共に、迫りくるは風すら切り裂く凶器。

ゾクツと身が震える。それはいいよいよ始まることへの歓喜？それとも別の感情？

その答えを出せないまま、俺の聖杯戦争は再び幕を開ける。そしてその戦いにおいて最初に相対した敵は、かつて友人と呼んでいた男。凶器の迫りくる中、苦笑いを浮かべ一人考えたのだ。

戦いの始まりがこんなに皮肉ったらしいものならば、俺は俺のスタンスを貫き通すと。

いつもの馴染みの言葉から、始めようではないかと。

「――トレース・オン（投影・開始）！」

— i n t e r l u d e —

「ついに始めおったか……」

明かり一つない、仄暗い部屋に響く年齢を感じさせる枯れ果てた声。その響きはどこまでも重い。まるで部屋中をさらに黒に染め上げるように。

声の主は、自分と同じ名を持つ者たとある魔術師の戦いを、自らの一部を介して見守る。

それは肉親を気遣ってでも、興味からの行動でもない。ただ、ついに始まった戦いを見届けんがための、その老人にとっての当たり前前の行動であった。

「——うむ、一体どのようなようにして駒を進めていくか……それにしても不確定な要素が多すぎる」

彼の言う不確定な要素、それは今まさに戦おうとしている魔術師の存在。

それがどのような動きをするのか、それによって自分の今後の選択は変わってくる。

「……しかし、前回以上になんとも面白いことよ!」

誰に語るまでもなく、独り言のように呟く。

その老人を知る者ならば、驚くであろうその所作から、彼が興奮を抑えきれずにいるということは明白であった。

確かにこれまでにないほどに、戦いに臨まんとする者たちは多彩な人材が揃っていた。

一流の血統を持つ、誇り高き魔術師。

その流れを汲みながらも、違う色に染まりし少女。

戦いに巻き込まれてしまった、元暗殺者。

自らの望みを叶えんがために、生に執着する最早人とは呼べないモノ。

聖杯を奪取すべく、そしてその受け皿になるべく造り出された聖女。

監督役という皮を被りこの戦いの中で暗躍する、生まれながらの破綻者。

そして、この戦い最大のイレギュラー。

この老人が今総ての人物の素性を知らなくとも、いずれ総てが露見するだろう。戦局を見極め自らが勝利者となるために、老人はただひたすらに機会を窺い続ける。

カランと玄関の開く音が聞こえる。

自らの最大の駒。老人の現状の最高傑作とも言える少女の帰宅の音。

「アレの仕上がりも上々、あとはどの場面でワシが舞台に立つか……」

開幕戦をその目で見ながら、呟く。自らの出番を待つ子どものような嬉々とした表情を浮かべながら。

そう。これは老人自身も待ち望んだ戦いでもあったのだった。

— i n t e r l u d e o u t —

迫りくるは凶器の突貫。

おそらく普通の人間ならば突き刺されて殺される。
おそらくかつての自分なら、致命傷を負わされる。

そして、今の自分自身ならば……。

「――ッ――」

手に現したのは夫婦剣。馴染みの感触を確かめながら、俺は干将を横に薙ぐ。

刹那響き渡るは互いの凶器の爆ぜた音。それは俺と慎二、二人の戦いの合図を示すようにただ鳴り響く。

そうしてようやく視界には、その凶器を投擲したであろう人物が姿を現す。

そう。記憶のままに残る姿のまま、そのサーヴァント・ライダーは俺を威嚇するように姿を現した。

「何してんだよライダー!! なんで衛宮を殺せないんだよ!？」

まるで子どもの喚き声ように声を荒げる慎二。

おそらく自分のサーヴァントが一撃でもって、俺を殺してしまうと確信していたはずだ。しかし彼の予想に反し俺はサーヴァントの一撃を受け流し、未だに立ち続けている。それが慎二にとっては堪らなく許せないことだったのだろう。

「さあ! 早く衛宮を殺してくれよライダー! 君強いんだろ? なあ、早くしろよ!！」

「……」

慎二の声に耳を傾けようともせず、ただジッと俺を見つめるのはサーヴァント・ライダー。確かにその眼帯の下の瞳は、俺をギロリと睨みつけているであろう。彼女から感じられる殺気は、それを容

易に連想させる。

しかし、俺もライダーに時間をやるほど余裕があるわけではなかった。

この場をどう逃げ切るか。そしてこの二人をどうすれば降すことができるのか……それを必死に考えながら、俺は夫婦剣を再度強く握りしめたのだった。

開幕 無謀な賭け

風の鳴る音、そして響き渡る鉄のぶつかり合う音。

どこか均整のとれた響きに、ひよつとすると、演舞でも踊っているのではないだろうかという錯覚をしてしまうほどに、俺は楽しんでいた。

こんなにも軽やかに、そして力強く短剣を振るい続けるライダーの力量を今だからこそ理解出来る。

かつての俺では彼女の存在に恐怖し、『逃げよう』としか思っていなかった。ライダーの力についても何も見極めることが出来なかった。

「でもな……！」

ライダーの動きに応えるように、俺は手にした夫婦剣で彼女の進攻を遮っていく。

横からの一閃ならばそれを受け流し、突きを返す。

縦からの強襲ならば、受け止めて動きを止める。

ライダーの一挙一動に反応しながら、俺は少しずつ確信していた。

“ どうか、サーヴァントとでも戦える ”

「——愚かな」

ズクリ、何が身を引き裂く感触。先程までとは明らかにスピードを上げて繰り出される短剣。

ライダーはより速度を上げながら迫る。逆に俺は身を傷つけながら、防御に徹するしかない。

「ガッ！！————ッ———ハア！！」

容赦のない身体を裂く痛み。それに気を留めず、掲げた剣を振る続ける。

いや、むしろ俺は振り払おうとしていたのだろう。自分の中に過ってしまった思いを。

“サーヴァントには敵わない”と考えてしまった自分自身を。

「フ…フハハハハハ！！いいよ、良いよライダー！さっさと殺しちゃえ！」

嬉々とした声を上げながら、よりライダーを煽る慎二。

ライダーはその声に応えることもせず、そして手を休めることなく俺への攻撃を続行していく。確かにつけ入れる隙はある。しかしそれをカバーして余りあるほどのスピードを彼女は有している。

「——最期です、魔術師^{メイガス}」

感情のない声が頭上から降りかかる。

脳天に向け振り下ろされる切っ先。おそらく受け止めることが精一杯だろう。彼女自身も、これで詰みと考えたはず。

「ッ！！」

だがそれは、“ライダーに対する攻防において”ということに限定される。

手に持った剣を左右に投げ放つ。

それはライダーからすれば何と愚かな行為と見て取れるかもしれない
無論、ライダーの短剣は迫りくる。だとしても、一番有効であろう
手段は一つ。

「――まさか!？」

その声は短剣の肉を裂く音と共に響いた。肩口に突き刺さったそれを確認しながら、自分の為そうとしていたことが上手くいったことを確認する。

そう。わざわざ俺が得物を捨ててまでライダーの攻撃を受けたのは理由がある。

「ライダー! 何してる? 早く止めをさ…うわぁ!!」

『標的』自身もようやく気が付いたのだろう。弧を描きながらそれは徐々に『標的』へと近付く。

そう。慎二はろくに魔術も使えないはずの一般人と変わらない。もし対処法を持っていたとしても、気が動転しているあいっつには使えないことは出来ないはずだ。

刹那、チィという舌打ちと共に、俺に止めを刺さんとしていた影が疾走を開始する。

「――っ」

「ひい――!!」

短い悲鳴が耳に届く。俺は身体を起こしながら、一気に肩に突き刺さった短剣を抜き去り、次の一手を撃たんと力を込める。

目の前で繰り広げられる光景は一つ。

主を守ろうと疾走する使い魔。あの速度ならば、ライダーが傷を負ったとしても慎二を無傷で救うことは可能だろう。

「――トレース投影・開始!!」オン

ここで勝つ必要はない。むしろ一人で勝つことなど不可能だろう。

思考する。

何が最善なのかを。

造り出す。

この局面を打開する最良のモノを。

俺が勝つべきは、目の前の敵ではない。

俺が勝つべきは一分、いや一秒前の自分自身。

より強い自分になるために、弱い自分を打ち倒すことなのだから！

目に映る総てがスローモーション。

両脇に剣の強襲を受けながらも、主を助け出すライダー。飛び散る赤。それは街灯に照らされながら、まるで宝石のように散りばめられていく。

「――トリガー投影装填」オフ

静かに言葉を紡ぐ。

手に現したのは黒塗の弓。俺はそれに矢を番え、一気に撃ち出すと同時にその場から踵を返し走り出した。

完全に無防備な背中、撃ちとる可能性もあるだろう。だが敵はサーヴァント。簡単に殺すことは出来ない。

「……………」

聞こえてきたのは痛みに耐える声。おそらく思惑通りに行ったのだろう。

しかし俺はそれを目にすることもなく、一心に走り続けた。

きつと……俺が逃げ切れることこそが、慎二に対する皮肉であると分かっていたから。

— i n t e r l u d e —

少年、間桐慎二は興奮していた。

自分の使い魔と、自分に何かと絡んでくる憎たらしい友人との戦いを目にし、何も感じなかったと言えば嘘になる。

あれだけ大嫌いだった男、衛宮士郎が自分の駒に傷つけられる様を見て、震えが止まらないほどに自分は興奮を隠しきれなかったのだ。

しかし徐々に彼の頭に苛立ちが募っていった。

そう。自分が有した力は、士郎のような名の知られていない魔術師などに対抗できるほど弱いものではないはず。むしろ数秒で決着が付くであろうと予想していた慎二にとって、目の前で繰り広げられていた光景は、彼の集中を削ぐのに十分なものであったのだ。

「ライダー！何してる？早く止めをさ……うわぁ！！」

声を荒げた瞬間に自分に飛来してくる白と黒の殺意。

普段の間桐慎二なら避けられただろう、隙を見てライダーを援護できただろう。

しかし彼は戦いに身を投じるには、覚悟が足らなさすぎる。そして戦場に立つということは、自身も傷を負うということを全く理解してはいなかったのだ。

「ひい……！！」

発した声とほぼ同時に移動していく自身の身体。

そして視界に飛び込んできたのは、自らの従者の姿と鮮血の雨。

「……あ」

ドスンと音をたてて背中から倒れこむ。呼吸が止まり、正常な思考は彼の頭から消え去る。ライダーの身体によって視界はおおわれ周囲の事を何も目視することは出来ない。

いや、それ以前にそれすら気にしていられないほどに混乱する慎二。初めて向けられた殺意、そして直面した明確な死のイメージを簡単に払拭できるほど、彼の精神力は強固なものではなかった。むしろあまりに弱々しく幼いものだった。

「……え、そうだ、衛宮は？」

ようやく慎二は我に返り、士郎が先程までいた場所に目を向ける。次の瞬間彼が目にしたのは走り去っていく士郎の後ろ姿。

逃げたのか。勝てないと分かったから逃げることを選んだのかと振るえる中で、口元を歪ませる慎二。しかし次に視線を下に向けた瞬間、彼はそれが間違いであったと気付かされる。

「——何してんだ！早く立てよライダー！！」

そう。目に飛び込んできたのは両の脇腹に深く傷を負い、そして脹脛に矢を受けて倒れ伏す自らの従者の姿。

「おまえ、何してんだよ？早く衛宮を追えよ！？」

「……分かりました」

自らに覆いかぶさる使い魔を強引に退かせながら、声を荒げる慎二に一言だけ返答し、立ち上がるライダー。しかし彼女が士郎を追えないことなど、火を見るより明らか。幾ら彼女はサーヴァントとはいえ、受けた傷が簡単に癒えるなど、そうあることではない。

だがそれでもライダーは踵を返し、士郎の走り去ったあとを追う。

その姿に慎二は満足げな表情を浮かべながら、もう一度念を押すように声をかけた。

「——いいか？絶対に仕留めろ！そうじゃないと、あいつが痛い目みるからね」

その声に、より苦悶の表情を浮かべながら、ライダーは振り返らずに走っていく。それは最早は、その場にいる仮初めの主に対するモノではなく、完全に本当の主を守らんがための懸命の行動であった。

彼女が走る度、赤々とした血がその場に落ちる。

それはまるで、彼女が確かにこの時冬木の地に現界していたことを現すように、くっきりとその跡を残していた。

— i n t e r l u d e o u t —

「——ハア、ハア——ツツ！」

走る、呼吸が乱れる、足が縛れる。

ただ一心に一つの場所を目指して走り続ける。

そう。ライダーとの一戦でこれでもかと言うほどに思い知らされたのだ。俺自身、まだまだサーヴァントと討ち合うには戦力が足りないのだと。

だから走る。彼女を、俺がずっと会いたいと願っていた彼女を呼び出すために。

短剣を受けた腕が、肩が痛む。

血を流し過ぎた。その上にこの全力疾走。正直精も根も尽き果てよ

うという状態にあった。

「それ、でもっ！」

俺は脚を動かし続けるしかなかった。

慎二の性格からして、ライダーに俺の後を追わせると言うことは想像に容易い。だからこそあの時は慎二を狙うのではなく、ライダーの足を狙って矢を射たのだ。出来る限りの時間を稼ぐために。

「……ッ！ハア、ハア、ハア」

どれだけ時間がかかっただろう。普段なら大して時間がかからないはずの慣れた道をようやく走り切り、俺は衛宮邸の門をくぐり抜けて庭に出ることが出来た。

あと十数メートル、そこまでいけばどうにか事態を好転させられる。

しかしそんな希望、簡単に形になるわけがなかった。

刹那、最早聞き慣れてしまった風を切る音が耳に届く。

「ッ……！」

同時に熱くなってく自身の左腕。何かに引っばられていくような、何かに持ちあげられていくような感覚に見舞われる。

いや、腕に伝わる感触で理解出来る。目を凝らすとそこからは先程まで俺を傷つけていた短剣の切っ先。そしてそれを辿った先、俺の目指す庭先の方に肩で息をしながらこちらを見据える一つの影。

「……さすがは、サーヴァントってことか？」

素直に感嘆の言葉を口にする。まさか先回りをされているとは考

えもしなかった。

しかしその影、ライダーは何も応えないままフラフラと近付いてくる。その様子から察するに、確実に俺の攻撃はダメージを与えることが出来たのだろう。彼女の姿は今にも消えてしまいそうなほどに危ういものだった。

突き刺さった短剣と鎖に自由を奪われた俺をジッと睨みつけながら、ライダーはゆっくり俺に歩み寄る。そして冷ややかな響きでこう囁いた。

「さあ……あとは、ありません」

それだけで分かる。どれだけライダーが俺を殺そうとしているかということを。眼帯に隠れる瞳の鋭さが感じられるほどに、彼女は躍起になってそれを為そうとしているということ。

鎖に繋がれた短剣を掲げられる。それは死を宣告するかのよう、鈍い光を放つ。

しかし俺はその短剣を見据えながら、ポツリとライダーに言葉を投げかける。

「そうか、最期か……」

「——ええ、死になさい！」

挑発されるように、勢いを付けた切っ先が脳天目掛けて降り注ぐ。光に照らされ、剣の軌跡はこれでもかと言うほどに綺麗な線を描く。そしてガキンという音と共にそれは突き刺さり、鮮血が周囲に振りまかれる。

剣の軌跡、そして飛び散る鮮血だけを見ればそれは、あまりに美しい光景だっただろう。

「な……に……」

そこに差し込まれる無粋な音。口元は苦痛に耐えるように歪み、
がくがくと膝が震える。

「ま、さか……！」

その言葉は二つの事柄を指し示していた。

一つは俺に突き刺さった短剣について。

確かに振り下ろされたライダーのそれは、咄嗟に前に出した右腕に
突き刺さり、その場に血の池を造っている。通常の人間ならば深々と
突き刺さり、腕の機能総てを破壊していたであろう。しかし短剣
は何かに阻まれたように右腕を突き通すことなく、切っ先が刺さっ
た程度で止まっていた。

そしてもう一つ、流された血は窮地に追いやられていた“俺だけ”
のモノではなかったということ。そう。俺の目の前に立つサーヴァ
ント、ライダーも血を流していた。しかし腕などではなく腹部。彼
女のそこから赤々と血に濡れた切っ先が顔を出していた。

それは式さんとの本気の戦いの時に使ったモノと同じ。ライダーの
後方に一振りの剣を投影し、彼女が俺への止めの一撃を繰り出すと
同時にそれを撃ち出した。

無論彼女がそれに気付くことは出来ても、傷を負った身体では回避
することはほぼ不可能に近いはず。それに賭け、俺はどうにかその
場で得うる一番の結果を手にした。

「……なんて、デタラメな……！」

言葉と同様に苦悶に満ちた表情を浮かべるライダー。その手に持
つ短剣に籠められていた力が弱まったのを確認し、俺は彼女の拘束
から抜け出し、俺は覚束ないながらも走り始めた。

しかし思うように足が前に出ない。急く心とは裏腹に、血を流し過ぎた自身の身体は最早動くことも拒否しているようだった。

「ま、まだっ！」

後方から投げつけられる声。

「ガッッ——！」

その声とほぼ同時に腹部を掠める短剣の投擲。だがそれは俺を射抜くことは出来ず、俺の脇腹を抉るだけ。その場から動けないながらも、ライダーは未だに俺を殺すことを諦めてはいない。

しかし何度投擲しようと、確実に足を止めさせるには至らない。それほどまでに、ライダー自身も満身創痍の状態に陥っているのだろう。

しかし、それは俺の方も同じ事であった。

「——あ——」

ライダーからの執拗な攻撃、それは確実に俺の体力を奪う。数メートルの距離を残し、片膝について俺はその場にへたり込んでしまった。

もう動かない。

前に一步も進まない。

このまま、このまま殺されるしかない。

頭に浮かぶのはそんな弱々しい考え。しかしそれらと共に、全く違う考えも浮かんでいた。

そう。俺は言葉にしたのではないのか？

もう決して自分の大事なものは落とさない。あの人たちに、約束したのではなかったのか。

「――――」

もう声にはならなかった。ただ一步、這いずるように前に進む。それ以外に意識をまわした瞬間、総てが終わってしまう。そう思えて仕方がなかった。

「あ――――」

また俺の脇を掠めていく短剣。その幾度目かの殺意を感じながらも前に進む。

そうだ……この身体の痛みは、俺が俺であろうとする証明なのだ。

そして俺は何をしたいのか、何をするべきなのかを既に理解しているはずだ。

「ああ――――」

力強く決して折れないように、俺は最後の一步を踏み出す。

傷付いても構わない、ただ一つの目的を果たすために。

始まりはすぐそこにある。

ようやく俺は、その門に手をかけたのだ。

開幕 運命の夜

— i n t e r l u d e —

「止まれ……、止まれ！」

目の前の少年は私の言葉を意に介さず、ただ歩を進める。

もう何度、彼に対して殺意を放っただろう。

何度彼に致命傷を負わせようとしただろう。

それすら思い出せないほどに、私は少年に対しての殺意を、自らの得物を放ち続けた。

しかし、彼は止まろうとはしない。ただあと数メートルの距離をまるで這うように進む。はたからから見れば愚かな行為。しかし私にはそれが、決して止まることのない神の行進のように感じられた。

「なにを、バカなことを……！」

あまりの悔しさに血を吐き出しながらも、私は大声をあげてしま
う。

そう。私はサーヴァント、その成り立ちはどうであれ英霊なのだ。
怒り、憎しみ、悲しみ、痛み、怯え……総ての負の感情を飲み込ん
できた。

その私が、たかが一介の魔術師に恐れを抱くなど、そんなことがあ
るわけがない。

しかし、事実目の前を進んでいく男は私を怯えさせる。

そして私の総てが語りかけてくるのだ。きっとこの男は、我が真実の主の害を為す者になると。

だから殺さなくては……恐怖するよりも前に。

目の前から消さなくてはならない……主が傷つくとわかっていても。

「ア——」

ずっと血の気が引いていく。動こうとするたびに、夥しい血が体の外に吐き出される。フラフラと意識を失うかというところをどうにか繋ぎ止めていたもの、それは皮肉なことに先ほど受けた一撃の痛みだった。腹部から生える剣の切っ先を目にし、私はようやく正気を保っていられたのだ。

徐々に痛み慣れていく身体。いや、これはむしろ身体がマヒしと言っているということなのかもしれない。それすら、今の私にはありがたかった。

「なんて、無様な姿なのでしょう」

立ち上がる最中、口にしたのは自分への嘲り。

これでは偽りの主の愚行をバカにすることは出来ない。無様な姿を見せながらも、どうにか目的を果たそうと、足掻いてでも生きようとする気概は、きっと彼も私も同じなのだから。

ようやく立ち上がったのと時を同じくして、魔術師は庭に建てられた蔵の中に足を踏み入れようとしていた。

「——ついに万策尽きたか」
あそこまで傷ついた身体で、まさか籠城を選ぶなど…失策と呼ばず
になんと言うだろう。

「これで終わりだ、早く彼女の……サクラの側に帰ろう」
振るえる手で再び短剣を手繰りよせ、止めを刺さんとゆっくりと
ではあるが、その足を進める。

あと数秒もしないうちに短剣は再び魔術師の血で染まり、魔術師の
叫び声があがるだろう……私はそう信じて疑わなかった。

しかしその余裕と油断が、あの蔵から感じる魔力の奔流に気付く
のを、一瞬だけ遅らせることになった。

「ハアアアアアア！」

聞こえたのはまったく聞き覚えのない、少女の猛々しい怒号。そ
れに気がついた刹那、何もかもが消え去った。

最後に私が目にしたモノ。

それは血飛沫を上げる自分自身の身体、そしてそれとは対照的な、
美しい……あまりに勇敢な色を湛えた少女の瞳の色だった。

— i n t e r l u d e o u t —

「ハ——ハア、ハア」

身体に走る痛みには耐えながら、目の前にそびえる重々しい扉を開け、ようやくその中へと転がり込む。

ひんやりとした蔵の中には月明りが差し込み、その静寂さをたたえていた。そこに俺という異物が混入されたことによって、それは全く違うモノへとその色を変貌していく。

静寂が蒼だとするならば、それは殺戮の色。毒々しすぎるほど赤色に。

そんなことを頭では考えていたが、身体の方は悲鳴を上げる一方であつた。

数多の血を吐き出してきた身体は、もう完全に動くことを拒否している。

視界も混濁し、意識も闇に落ちてしまう寸前まで差し掛かっていった。

「――は――」

右手の甲に疼きを感じた。いつか感じたことのある様な、懐かしい感覚。

「――そう、だ……」

投げ出していた身体を仰向けにし、天井を見据える。いつも見ている、慣れ親しんだ光景がそこにはあった。

そうして思い出す。自分がここに來た理由を、何をすべきかを。

「^{トレース}投影……^{オン}開始」

力なく手の平を掲げ、口にしたのはお決まりの言葉。

多分今の状態では、どんな詠唱も簡単には口に出来ないだろう。だからこれでいい。俺の言葉で……俺にしか出来ないやり方で！

思う。それは彼女と俺を繋ぐ唯一のモノ。

描く。俺の身に宿るモノならば、難しいことではない。

造り出す。それこそが鍵……本当の始まりの扉を開ける鍵。

そして、この手に現す。自らの幻想を結び、形を成す。

「――――投影、装填」
トリガー・オフ

ここに形を為すのは、かつての俺では再現できなかったモノ。

今の俺であるからこそ造り出すことのできる……彼女との、これは彼女との繋がり印なのだ。

かつて、彼女の姿はどんどん自分の中から消え去っていった、もう思い出すことはできなくなってしまった。それはきつと、彼女自身が俺の中にある信念を支えてくれていたからだろう。だから俺の信念が弱くなればなるほどに、彼女の面影は俺の中から消えていった。

しかし今こうして、俺は彼女との繋がりをこの手に現すことが出来る。

それは俺の中に、ちゃんと彼女が残っているという証明。この生涯も、この俺自身ですら、彼女のために在る。そう思ってしまうんだ。そしてこんなに血に濡れた手でも、もう一度彼女と手を取り合うことが出来るのかもしれない。

いや。きつと出来る。これまで強情なまでに信じた理想を求め続けてきた『エミヤシロウ』ならば、出来ないはずがない。決して諦め

ることはしない。

黄金に輝くそれを目にし、彼女を思った。

彼女こそ、ずっと追い求めていたあの『全て遠き理想郷^{アヴァロン}』なのだから。

「――……れ」

小さな、声にならない声で呟く。

「……てくれ――……い、来いよ!」

再び、今度ははっきりと言葉にする。

声同様に、手にした鞘を力強く天にかざす。

「――来いよ、セイバアアアアアア!」

擦れる声で、しかし渾身の力を込め、俺は彼女の名を叫ぶ。

ゴオと音をたてながら、風が吹き抜けていく。

それと同時に大きな影が一つ俺を覆ったと思った刹那、一気にその場から姿を消していた。

「ハアアアアアア！」

聞き覚えのある声が響く。そしてザンと一閃、何かを斬り伏せたような物音。

何が起こったのだろうか。ぼやける目を凝らしながら、影の動いた先を見つめる。

また強い風が吹いた。

目に入ってきたのは風に揺れる金砂の髪。

和風の蔵の中にあって、それはあまりに不釣り合いなモノ……だからだろうか、周囲はぼやけたままなのに、そこに佇む少女の姿だけはハッキリとしていた。

そこには、確かにいた。

消えゆくサーヴァントを目の前に、ただ悠然と構える一人の少女の姿。

勇敢に見えるその騎士姿は、土蔵に差し込む月明りによって、それをさらに際立たせていた。

「———あ」

何を言えがいいのだろう。ぼんやりとする意識の中で、俺はそれだけを考えていた。

いつだったろう……確か以前のこんな光景を目にして、俺は言葉を失ってしまった。

きっと、きっとそれだけ目の前の少女が綺麗過ぎたんだろう。今のように何も口にできないまま、俺はその始まりの言葉を聞くことになる。

「――失礼。緊急事態と判断し、独断で行動してしまいました」

凜とした響きが投げかけられる。

それはきつと、俺がずっと待ち望んでいた響き。俺の一番欲しかったものだ。

そして彼女は呟く。ずっと変わらない、曇りのない瞳を俺に見せながら。

「サーヴァント・セイバー、召喚に従い参上した」

「――問おう、貴方が、私のマスターか」

始まる日常

— i n t e r l u d e —

“ここは一体、何処なのだろうか……”

歩を進めるのは荒野。どこにも拠り所のない、どうしようもなく一人を強いられる場所。熱砂の吹きすさぶこの地を、その終着点を目指し歩き続けている。

しかしどんなに自分の中の記憶を手繰り寄せていっても、その光景は自分のモノではない。

そう。自分は孤独ではあったけれど、常に一人ではなかった。

共に戦う友がいた。

憎み合っても、同じ志を持つ人がいた。

そして、最期まで付き従ってくれた者がいた。

だからこんなどうしようもない一人の世界、私のモノではあるはずがない。

“——あれ、は？”

目を疑った。数多の戦場を駆け抜けてきた自分だからこそ言える、こんな異様な光景を私は目にしたことがない。

“剣の……葬列？”

それは墓標のように、誰かが生き抜いてきた証のようにそこに突き立つ。

しかしそれは墓標と言うには、重要な何かを感じることが出来ない。それを薄らとながらも、私は肌で感じていた。

そう。この手が、この足が、この身体が……それを告げているのだ。

それは、突き立つ剣たちからは全く“熱”が感じられないこと。グルリと周囲を見渡しただけでも、名だたる名剣、彼の英雄が所有していたモノすらそこにはあった。しかしそのどれからも、“熱”つまり所有者の想いを感じ取れなかった。

通常、宝具にまで昇格した武器であれば、それ特有の“熱”を持っていることは想像に容易い。しかし、そこに突き立つ剣戟からはそれが伝わってこなかった。

そうして私は理解したのだ。ここに真実のモノなどない。ここに在るのは総て似せて造られたものなのだと。

それ故にここに本当の想いなどなく、
それ故に本物も思いを抱くことが出来ない。

“そんなこと——悲しすぎるではないですか”

こんなにも一人の世界で、本物には決してなることの出来ないこの世界で、一体何を求めているというのだろうか。私にはそれが分からなかった。

ただ一つ、分かることがあるとするならば……
どうしようもなく、この道を歩く者が不器用なのだということが
けだった。

— i n t e r l u d e o u t —

起きて最初に目にしたモノ。それは最早見慣れてしまった自室の風景。

「……俺、どうしたんだ？」

理解の追いつかないまま、寝ぼけ眼で俺は身体を起こす。身体に感じたのは、先の攻防で受けた切り傷の痛みだった。しかしそれらはきちんと包帯などによって治療を受けている。

「——ああ、そうだ……」

思い出したのは、意識を閉ざす直前に目にした風景。

あまりに懐かしく、そして俺がずっと求め続けたモノだった。

ぼおつと柔らかい光の差し込む襖の方を眺めていると、浮かんできたのは自らの呼び出した剣の英霊の事ではなく、全く別の少女の事だった。

「これから、どうするつもりなんだ……」

そう、それは桜についてだ。心のどこかで、これ以上桜を聖杯戦争に関わらせないですむと安心感を覚える自分と、彼女に付き従っていた使い魔を直接ではないにしてもてにかけてしまったこと。

この二つが俺のなかで頭をもたげていた。否、それは考えなくても良いはずだ。だって俺は彼女に出会うためだけに、この戦いに身を投じた。だからもう桜の事を考える必要なんてないはずなのに、どうしてもそれが心のどこかで引っかかっていた。

「すみません、少しよろしいでしょうか？」

物思いにふけていた中、廊下に面した障子の向こうから遠慮がちに投げかけられる声。

「――ああ、すまない。入ってくれ」

俺は居住まいを正しながら、声の主の姿を視界に入れる。

障子を開けて入ってきたのは、その凜とした声に相応しい凜々しい少女、セイバーの姿だった。

その出で立ちは最初に彼女を召喚した時と変わらず、甲冑に身を包んだモノとなっている。その恰好のまままで窮屈ではないのだろうか。

「マスター、お身体の方は問題ありませんか？」

「ああ、問題ないさ。すまなかったな、君が運んでくれたのか？」

淡々と言葉を投げかけるセイバー。俺の方も心を落ちつけながら、努めて冷静に言葉を返す。

そんな俺の姿に何を思ったのだろう、セイバーは俺のすぐ側に座り、じっと俺の顔を見つめた。

「な、なんだ？……なんかおかしいか？」

「いえ、そうではないのです。少し……いえ、気にしないでください」

問題はないようで安心しましたがと付け足しながら、彼女は俺を正面に見据え、シッカリとした口調で話し始めた。

「――昨夜は緊急事態と判断し迫っていた敵、おそらくですがライダーでしょう。あれを撃退しました」

ハッキリと事実のみを告げるセイバー。

あの何かを斬り捨てる音は、ライダーに止めを刺した音だったのか
と思い返す。あの場面ではセイバーを召喚に踏み切るということは、
一か八かの賭けでしかなかったが、どうにか最良の結果を手繰り寄
せることが出来たことを幸運に感じた。

「……あの後、ライダーのマスターは姿を現さなかったのか？」

「ええ。貴方をこの部屋に運び、周囲を警戒していましたが、それ
らしき人物は姿を現しませんでした」

なるほど。ということは、慎二はライダーの敗退を知りながらも
行動を起こさなかったことになる。それならばきっと慎二がこれ以
上脅威になることは決してないはずだ。

セイバーの回答に俺はそう確信を持って頷く。

その仕草に、彼女は少し感心したと言わんばかりに目を見開いてい
た。

「……よし、ならもうライダーの件についてはこれでいいとして
……」

「はい、これからの戦いについてですね」

待っていましたが言わんばかりに、セイバーは凜々しい表情で呟
く。

うん。まあ確かにその通りではあるのだが、それより先に優先した
いことがあった。

「いや、違うよ。いつまでも“マスター”だなんて呼ばれていても
気味が悪いからさ。まずは自己紹介だ」

努めて笑顔を繕いながら、隣に座すセイバーに声をかける。
その言葉に恥ずかしそうに一度は顔を背けたが、すぐに表情を戻し
彼女は咳払いをしてこう返してきた。

「すいません、少しばかり気が逸っていました」

「いや、いいよ。俺は士郎。衛宮士郎だ。よろしくな、セイバー」

包帯を巻かれた手を差し出す。それに応えるように彼女も手を出し、固く握手を交わした。何事もない、初対面の人物に対するきちんとした挨拶。

しかし実際のところはどうかだったのだろう。

バクバクと音をたてる心音を俺は隠すことは出来ているだろうか？
シッカリと、彼女の顔を見ることが出来ているだろうか？

それだけ、彼女を目の前にして緊張していた。

握られた手の痛みを感じる暇もないほどに、俺はセイバーとの再会が嬉しくて堪らなかったのだ。

「ではマスター、これからについてなのですが」

先程までの少し碎けたものからは一変、セイバーの表情は厳しいものへと戻っていた。

握りこむ拳に自然と力が入っていく。言わずもがな、俺たちを包む空気は張り詰めたモノに変質していく。

「ああ、そうだな。あくでもマスターって呼ぶのはやっぱりやめて

くれないか？ なんだかしっくりこなくてさ」

その空気を払拭するように、苦笑いを浮かべながらセイバーに一つ提案をする。

やはり普通に接している中で“マスター”と呼ばれていては、どうにもおかしい気分になってしまう。

「……ではシロウと呼ばせていただきます。確かにこの響きの方が私にとっては好ましいようだ」

いつか聴いた台詞、それとは少し違う言葉が俺に返ってくる。

それに少し笑みを浮かべてしまう。セイバーはそんな俺の様子に小首を傾げながら、納得のいかなそうな表情をしていた。

しかし待ち望んでいた彼女に名を呼んでもらえるだけで、俺は嬉しさを隠せないほどに舞い上がってしまったのだ。

だからだろうか？

「それで、セイバー。今後の話だけど」

こんな浮ついた気持ちだったからだろう。

「ええ、この序盤に一騎のサーヴァントを撃退できたことは――」

騒がしい声と足音に普段ならばすぐに気が付くはずなのに。

「ヤッホー！ 今日もお姉ちゃんが来ましたよー！！……って、その娘さんはどなた？」

このいつも元気のあり余った、姦しい虎に気が付かなかったのは、きっとそれが原因なんだ。

「――で、どうゆうことか説明してもらいましょうか。士郎？」
「ああ、この人は親父の古い知り合いの娘さんだよ」

突然俺の部屋に押し入ってきた藤ねえを、どうにか居間まで誘導すると彼女はすぐに疑問をぶつけてきた。

確かにごく普通の家に見知らぬ少女、それも甲冑を身に纏った人物がいれば驚くことも無理はないだろう。ただ彼女は俺の腕の裾から見えるはずの包帯には関心がないらしく、全くのノータッチだった。何故だろうか、ホツとするのと同時にどこか悲しいような……。

「切嗣さんの？ いや、でも……あゝあり得るかも」

藤ねえは天井を見上げながら、苦笑いを浮かべる。きっと親父の事を思い出していたのだろう、表情から読み取れたのは悲哀の入り混じったものだった。

「それでだ、しばらくの間日本に滞在することになって、親父を頼ってきてくれたわけなんだ……だからしばらく下宿してもらうよ」

「そっかーじゃあしょうがないよねえ」

藤ねえは、うんうんと納得したように首を縦に振る。

このまま何事もなく、この話が終わってくれることを望んでいた俺であつたのだが……。

「ん？ 居てもらう？」

パタリと動きを止め、先程までとは全く違う表情を見せる。

その表情の変化にヤバいと感じつつも、先日 of 戦闘で怪我を負っていた身体はそう簡単に動いてはくれなかった。

次の瞬間、まるで紙細工のようにフワリと浮き上がる居間のテーブル。

上に何も乗せておかなくて良かったと胸をなで下ろすが、今にも爆発しそうなほどにブルブルと身体を震わせるのは、言わずもがな冬木の虎。

「なあにいったるかぁー！！！！」

ドンとテーブルの足がついたと同時に、甲高い声が部屋中に響き渡る。

「うん、分かるよ？切嗣さんを頼って見知らぬ土地に来たって言うのは理解できた、お姉ちゃんそこまで頭悪くないしー。でもね、若い男女が一つ屋根の下で同棲だなんて……そんなのは大人として、いえお姉ちゃんとして許可することはできませんー！ええ出来ませんとも！！」

「いや、そんなに気にすることでもないだろ？この家には藤ねえや桜だって出入りするし……」

「当然でしょー！私は家族、桜ちゃんは後輩！じゃあその子……えっと、セイバーさんだっけ？この子は一体何のためにここに居るのよー？」

捲し立てるように追求をやめようとしないう藤ねえ。確かにいきなり過ぎたかと反省しながら、俺は頭をかきながら次の言葉を探す。しかし虎はあっさりと標的を俺からセイバーへと切り替え、さらなる追求を開始していた。

まあ俺の記憶が正しければ、この騒動は彼女の一言であっさり終わるはずなのだが。

「あなたは何をしてきたのよ？何で切嗣さんを頼ってきたの？」

「それは、私が切嗣の言葉に従ったに過ぎないからです。そして世話になる間は、シロウを守るようにと言われていきます」

ピタリと追求が止まる。

無理もない。ここまでハッキリとした言葉、そしてそれを裏付けるような真摯な瞳を見せられては、それを嘘と感じる者はいないだろう。

藤ねえはセイバーの態度に少したじろぎながらも表情は強気のまま、目線だけは逸らさなかった。

「……なるほど、そうなのね」

そしてセイバーの言葉に何を感じ取ったのだろうか、藤ねえはスツと立ち上がり正面からセイバーを見据えていた。

どこか苛立ちを滲ませた瞳から分かるのは、まだ納得していないんだぞというそんな負けず嫌いな藤ねえらしい感情。

「いいわ！じゃあ腕ま……」

「あ、ちなみにだけどさ！」

次に藤ねえの考えそうなことは分かる。

俺は二人の間に割って入りながら、努めて笑顔で藤ねえにこう返した。

「ちなみに、セイバーは俺より強いよ？昨日もコテンパンにされたし」

「ふーん、どれだけ強かったって——え？士郎より強いのか」

俺の言葉にまるで固まったように、動きを止めてしまう藤ねえ。

確かに彼女は強い。冬木では敵なしと言われていたほどの使い手だし、俺だってそれは分かっているし、小学生のころは俺も太刀打ち

できなかった。

だがかつてのまだしも、式さんに稽古を付けてもらってシッカリ身体を鍛えている俺が、藤ねえに負ける道理があるはずもない。事実、最近の手合わせでは俺の方が大きく勝ち越している。

その俺自身が、セイバーを強いと自信をもって口にするのだ。その言葉の意味は、もちろん藤ねえにも理解は出来るだろう。

「……ほんとうに？」

藤ねえのその問いにただ首を縦に振る。何を言うよりも沈黙で答えるのが、きっと今の彼女にとっては一番納得できるものだろう。藤ねえは俺の動きを確認すると、深いため息をついてその場に座り込んだ。

そして苦笑いを浮かべてセイバーに向き直り、こう呟いた。

「ん〜……まあ今回は納得しましょう。見知らぬ土地で、ほっぽり出すわけにもいかないし」

教育者として、それはやってはいけないことなのよと付け足しながら、藤ねえはセイバーに手を差し出していた。

セイバー自身も藤ねえは、全くの害のない人物だと理解したのだろう。彼女も手を差し出して、シッカリと握手を交わしていた。

俺はと言えば、これでどうにか穏便に事が進みそうだと胸をなで下ろしていたのだが……まあそんなに上手くいくはずがないというのが道理なんだろう。

「で、それにしてもその恰好はいただけないわね。何？コスプレ？」
ジトツとセイバーの姿を見ながら呟く藤ねえ。確かに、家の中では不釣り合いな恰好をしているのだ。突っ込まれるのも無理はない。

「いえ、この恰好が私の普段着で……」

「いけませーん！女の子なんだから、もっと可愛い服着なきゃ！！
——今から私の家に行きましょう！とりあえず着替えになるもの
出してあげるから」

甲冑姿のセイバーをジッと睨みつけながら虎が吠える。その後は
言わずもがな、セイバーは藤ねえに連行されてしまった。

「まあ……物騒なことになるよりは、随分マシだろ」

そんな独り言を呟きながら、俺は痛む身体に鞭を打ちながら台所へ
と向かう。

きつとこの後セイバーの小言を聞かされる羽目になるのだろうかどと覚
悟しつつ、俺は一人朝食の準備に取り掛かるのだった。

始まる日常（後書き）

すいません、ちょっとページを編集していたら、色々表示がおかし
くなってしまい、更新しなおしました。

読んでくださっている方には本当に申し訳ありません。今後ともよ
ろしく願います。

始まる日常？

結局藤ねえとセイバーが衛宮邸に戻ってきたのは、それから一時間後のことだった。

俺はというとサッサと朝食の支度を終え、今は朝のニュース番組を眺めていた。そこから流れてくるのは、やはり不可解な事故の数々。これら全ての事故の原因が聖杯戦争に在るということを理解しているだけに、正直俺は真っ直ぐにその事件を直視することが出来なかった。

それら全てが、俺がこれまで選択してきたことに起因するということとを、心のどこかで否定したかったからだろう。思わず畳の上に身体を投げ出しながら、何の弁明の余地も持たない自分自身に、俺は不甲斐なさを感じていた。

「うおーい士郎ー！！朝ご飯は出来たかなあ？」

ドタドタと足音をたてながら声の主、藤ねえは声をあげている。その声からは機嫌の良い様子を感じ取ることが出来た。おそらく……いや確実と言ってもいいほどに、セイバーの事を気に入ってくれたのだろうと胸をなでおろしながら、立ち上がり台所に向かいながらこう返した。

「あー、ただ今日は桜が来てないし俺はかなり身体が辛かったから、簡単なものになっちゃったぞー！」

「えーそれはショック！お姉ちゃんショック！！」

戸の開く音と共に居間に入った藤ねえは自らの指定席に腰かけ、

ブーと顔を膨らましながら俺に抗議の視線を投げかけている。その視線に目もくれず、俺は淡々と朝食をテーブルの上に並べていく。

そう。今日、桜は衛宮邸に姿を見せていない。

昨日のことを鑑みるに、確実に間桐の家で何かがあったことは明白だろう。ただそれを俺がどうにか出来るとは思えない。俺は桜の『この聖杯戦争に関わる要因』を断ち切った。だからこそ俺と彼女がこれ以上関わりを持たない。せつかく彼女が手に入れるかもしれない平穏な時間を、俺が壊すことなど出来るはずもないのだ。

「じゃあ、もう朝ご飯食べちゃおうセイバーちゃん、何時までそこにいるのお？おかず冷めちゃうよー」

呑気な声が居間に響く。藤ねえは居間の外に目を向けながら、セイバーを手招きしていた。声を掛けられたセイバーはというと、恥ずかしそうに返事をしながら、躊躇いがちに居間の中に入ってきた。

「えっと、藤ねえ……」

「んー。どしたの、士郎？」

「いくらなんでもお揃いは、嫌じゃない？」

真っ赤な顔をして入ってきたセイバーの姿を見て、ズコツと力が抜けてしまう。今彼女が来ている服は藤ねえの良く着ている虎縞模様の服。何というか……うん、何とも言えない。

「うううう、しょうがないじゃないー！パンツスタイルでコーデしようと思ったのに……」

何故か瞳には涙を浮かべながら、しかし饒舌に話す藤ねえ。

「私の持ってるのじゃ、ウエストあまり過ぎちゃうのよおー！きー何て羨ましい子なのっ！ー」

ガオーとさながら虎のような雄叫びをあげる。

なんとなく予想はしていたのだが、それでもいきなり大声を出されるというのは、慣れたものではない。

ヨヨヨと涙を見せる藤ねえをとりあえず無視しながら、手早く朝食の配膳を終え居間の入り口で立っていたセイバーに目を向ける。

「まあ、可愛いと思うぞ」

「しかし、これは機能性に優れません」

ピシヤリと俺の言葉に返答するセイバー。しかしその表情は言葉とは裏腹に柔らかいものだった。

「確かに……褒められるということは、素直に嬉しいことではありますが」

彼女はそう呟きながら、ほのかに頬を赤く染める。その仕草に少しドキリとさせられたが、今はそんなことを気にとめている場合でもないだろう。

「さて……じゃあ冷めないうちに食べるか」

自分の定位置に腰を降ろし、静かに手を合わせ、いつものようにこう口にする。せめて、この時間だけはいつもどおりに過ごしたいのだと心の中で叫びながら。

「いーただきまーす！」

「いただきます」

「いただきます……」

「じゃあお姉ちゃんはお出かけてくるわけなのだが……今日はどうするのかね？」

ズズッと熱い番茶をすすりながら、藤ねえはどこか神妙な顔つきをしながら呟く。

彼女の言葉に俺は首をかしげると、虎は俺の手首を指さしながら、こう吠えた。

「そーんな怪我してるのに、学校になんて行けると思ってる!？まあお姉ちゃんのよしみで、今日くらいは休ませてやってもいいんだぜ」

フンと得意気に鼻を鳴らす藤ねえ。意外なことに、すっかり俺の様子も見てくれていたんだと少しばかり感心してしまう。

実際のところ、藤ねえの言葉に甘えたい気持ちももちろんあったのだが、そういうわけにもいかない事情がある。

「ああ、問題ない。学校行ってみて、もし無理そうなら早退するよ」俺はそう返しながら制服に着替えるため、一路自室に戻ろうと廊下に出た。

今からは藤ねえの“無理しちゃだめだからね”という声が聞こえてくる。その言葉に相槌をうち、俺は自室に向かって歩を進める。その反応がお気に召さなかったのか、不満の声が居間から聞こえてきたりもしたが、この際気にしないことにしよう。それにそろそろ“彼女”が我慢の限界を超える頃だろう。

「待ってくださいシロウ！お話があります」

案の定予想通りに声をかけてきたのは、我が騎士王様。彼女は不機嫌さを隠そうとせず俺に詰め寄りこう口にした。

「シロウ！貴方は自覚が足りないのではないですか!？」

「ん、何が？」

俺の回答に毒気を抜かれたのか、ポカンとした表情を見せるセイ

バー。

しかし即座に厳しい表情に戻り、彼女らしいまっすぐな言葉で言い放つ。

「何……がではない！ 貴方にはマスターとしての自覚がないのですか？」

その言葉はもつともだった。

聖杯戦争に関わっているマスターが、それと関係ない者を身近に置いている。

それに加えて、今から外出するような口ぶりを見せる俺に、さすがのセイバーも我慢ならなかったのだろう。

「言いたいことは分かるよ……この状態で外に出るのは危険だってことだろう？」

「そうです！ 今は外出を控え、今は療養に努めるべきなのです！」
セイバーは俺の腕を掴みながら、矢継ぎ早に言葉を放ち続けた。その手の力強さから、その鋭い語調から、俺を心配してくれていることに嘘偽りはないだろう。

しかし俺は彼女の方に振り返り、こう呟いた。セイバーがこの言葉に反論出来ないことを知りながら。

「セイバー、お前が霊体化してついてくれば問題ない話だろう」「——そっ、それは……」

想定通り、俺の言葉に反論することの出来ないセイバー。無理もない。これは完全に俺の意地悪なのだから。

自分自身でも、既に聖杯戦争が始まっている現状を考えれば、療養に努めることが一番であることくらいは分かっている。しかしこの“俺たちがライダーを打倒したという事実”を上手く利用することが出来るのは、現状を除いて他にはないだろう。

だからこの先を上手く立ち回るために、俺は会いに行かなければならないのだ。あの魔術師にと、あのサーヴァントに。

「まあ今日目的が果たせれば、明日からの外出は控えるよ」

困惑気味のセイバーの表情を見ながら彼女にそう告げ、掴まれた腕を優しく取り払いながら自室へと戻る。彼女に悪いことをしたと思いつつも、俺は制服に身を包むのだった。

「――シロウ、何かあればすぐ私を呼んでください」

藤ねえが出勤した後、俺はセイバーに玄関先まで見送られていた。やはり俺の選択を快く思っていないのだろう、終始不機嫌な表情を見せる彼女をどうすればいいか分からない。とりあえずこれ以上は遅刻の危険もあるので、俺はもう一度セイバーを見つめ、こう呟いた。

「帰ったらゆっくり話をしよう。君のこと、もっと教えてくれ」

そして俺はすぐさま踵を返し、学校への道を走り始めた。

特に他意はないのに、自分でも分かるほどに頬が熱い。大した一言ではないのに、彼女を目の前にと動悸が止まらない。

本当に俺は、彼女にやられてしまっているんだ。きっと舞い上がっているのは自分だけだと理解しつつも、この気持ちを抑えることが俺には出来ない。

このズキズキと痛む昨晚の傷がなければ、きっと俺は正常な思考を……冷静な気持ちを完全に失っていただろう。腕から覗く真白の包帯を目にしながら足を動かし続けた。

いつもの交差点を越え坂に差し掛かった頃、ちらほらと視界に入ってくる通学途中の生徒たち。その姿にもう遅刻の心配はないだろうと、俺は走るスピードを緩める。さすがにこの時間帯ともなるとよく話す知り合いの姿はない。

「まあ、一成くらいしか居ないんだけどな……」

そんな独り言を呟いたからだろうか。坂の中腹に差し掛かった頃、それは突然俺に襲いかかってきた。

「――ッ――」

それは身を刺すような殺意。

ここまで露骨にそれをぶつけてくる人物など、俺の知る中では一人しかない。

「あら、今日は遅い登校なのね」

その響きはぶつけられる感情とは裏腹に、あまりに温和で心地良い。

「ああ、少し色々あってな」

ゆっくりと振り返りながらその人物の、彼女の表情を見る。そこには殺気などは感じさせない、見惚れる笑顔があった。互いに見つめ合う形で立ち止まる俺たち。生徒たちが登校する中、それはあまりにおかしな光景であった。

彼女、遠坂凜は風に髪をなびかせながら、俺をジッと見つめ、向けてくる殺意を更際に際立出せ、こう俺に告げた。

「そうなの。まあ良いわ。放課後、お時間いただけるかしら？」

「分かったよ、遠坂。俺も丁度話があったんだ」

俺の返答に遠坂は笑顔でよろしくと呟き、羽織った赤いコートを翻しながら俺の脇を抜けて行った。その颯爽とした歩みを見送りなが

ら、俺は緊張に高まっていた胸をなでおろす。

かつての主にこのような、敵意に似た感情を抱くのは、正直なところいいものではない。出来るなら衝突もなく、何とか穏便に事を済ませたいものだ。そう考えながら、俺は再び足を動かし始めた。

そんなこと、出来るはずもないと頭では理解していたのに。

セイギノミカタ

夕暮れが世界を包む。

毎日見ている光景のはずなのに、どこか初めて見るような感覚に襲われるそれを、俺はどう言葉にすればいいのかわからなかった。

オレンジに染まる教室の中、俺と少女は向かい合う形で立つ。ただ目の前に佇む少女はきつと、俺のどんな言葉も受け付けることはないだろう。

「さて、衛宮くん。私が何を言いたいかわかるか理解してる？」

まるで挑発するかのように発せられた声に、正面から受け止めゆつくりとした響きで言葉を返した。

「すまないな。正直遠坂が何を言いたいのか、俺にはわからないよ」

その言葉に気分を害したのか、遠坂の表情は急速に険しいものへと変わる。自分が意図してそうさせただけに、これからどうなるのか慎重にならざるを得ない。

しかしさすがという一言に尽きる。その雰囲気はまさに一流の魔術師と言っても過言ではないほどのものを感じさせる。手のひらに嫌な汗の感触が伝う。

「……令呪も隠さずに外出、しかもサーヴァントも連れていない。ここまで言えば分かるかしら？」

そうだ、普通ならそうに決まっている。これではまるで、殺して下さいと公言しているのと変わらない。しかしかつてのようにただの猪突猛進な自分ではない。

「そう思うのは当然だろうな。ただな……」

「なによ、一体？」

スツと息を吸い込み、同時に自分の中に在る撃鉄を起こす。

昨夜の戦いで負った傷も、もはや関係はない。今はただ、明確な“差”を見せ付けなくてはならない。

「――遠坂、お前に俺が倒せるとは到底思えないがな」

刹那、顔の横を掠めて行く黒の軌跡。

それはさながら弾丸のように、瞬きの間に俺の後方の壁にその後を残していた。

やはりその威力、速度、どの点から見てもやはり遠坂は一流だ。しかし、それでも付け入る隙はある。

「どう！これでもまだそんな口を叩けるのかしら！？」

不敵に笑いながら彼女は声を荒げる。隙があるとすればこれだ。

「それだよ」

「――っ！まだそんなっ！！」

再び手を掲げ、ガンドを放とうとする遠坂。重々しい音をたてながら打ち抜かれたそれは、俺を捉えることなく、再度壁へとめり込む。おそらく撃った本人は想像もしていなかっただろう。自身の二撃目が避けられるなどは。

彼女からの強襲を避け、一気に詰め寄りながらこう呟く。手の平には馴染みの一対、莫耶を手にしながら。

「詰めも認識も甘い。それがお前の欠点だよ、遠坂」

静かに、ハッキリと事実を口にする。遠坂も一般的に魔術師戦うだけならば問題はない。しかしどれだけ魔術の練度が高くとも、どれだけ強大な魔術を行使出来ようとも、そう簡単に埋めることの出

来ないものがある。

それは『実戦経験』。俺と遠坂では、その差があまりに広い。だから相手の力量を読み違え、そして有効的な攻撃をすることもできない。遠坂が少しでも戦い慣れしていれば、こんな状況にはきつとならなかっただろう。

「っ！アンタ、それって!？」

遠坂は無力さに顔を歪ませながらも、その状況を打破するために俺を見据える。そして俺の得物を目にした時、その表情は先程までとは違う、驚き慄いたものになっていた。

「その魔術……」

「とにかく、俺から話したいのは一つだけだ」

彼女の声に耳を傾けず、俺は話し始めた。

「前にも言ったがな、俺には聖杯は必要ない。だから争いに加担するつもりなんてないんだ」

「じゃあ、なんでマスターになんてなったのよ」

「“マスターになる”ことが目的だったただけだ」

「何それ！訳が分からないわ!!」

遠坂はキッと俺を睨みつける。微かに震える彼女の手から、苛立ちを必死に堪えようとしていることは明白。確かにこんな言い回しをすれば、彼女を怒らせることくらい分かっていた。

しかし彼女にしっかりイメージさせなくてはならなかったのだ。

“自分一人では、勝つことはできない”と。

そう思わせればヤツが出てくる。間違いに嘆くあの男が。

「……いいわ、もう容赦はしない」

決意の火を灯し、見開かれる目。そこには先程までの驕りの一片

も存在しない。そして一つの言葉と共に、その男は……いやオレはそこに姿を現した。

「目の前の男を倒しなさい、アーチャー!!」

— i n t e r l u d e —

目の前で繰り広げられる少女と男のやり取りに、私は自分でも把握できるほどに混乱を隠せずにいた。

そう。私は知っていた。

目の前の男が何を優先して考える人間だったかを。理想を完遂させるためには自分の身が傷つく事を厭わない。そして見返りなどを求めることはしない。そんな男だった。

しかしどうだ?“今”の男はどうだ。

その言葉はかつてのそれとは全く違う、何かを意図しているかのように、そしてその態度は明らかに少女を牽制し、事を起こさせようとしている。

出来る事ならば、今すぐにこの男を殺してしまいたい。自身の得物を奴の背に突き立てたい。これは否定出来るはずもない、私の本心だ。しかし私の思考を、私の動きをこの男が鈍らせる。瑣末な存在であったはずのこの男が、私にストップをかけるのだ。こんなことは絶対に起こりえるはずはない。

そう。かつて“この男”を経た私がそれを思うのだ。これが間違いのはずがないのだ。だから見極めなければならない。この男の目的が一体何なのかを。

しかし、私の意図とは別に状況は動いていく。私がいくら慎重になろうとも、少女の一声があれば、私は否応なく戦いに赴かねばならないのだから。

「目の前の男を倒しなさい、アーチャー!!」

棘のある響きで、少女が私の名を呼ぶ。

そして私はその場に姿を現す。エミヤシロウ……だったはずの男の目の前に。

— i n t e r l u d e o u t —

目の前に現れたのは、白髪褐色の男。

男は不敵な笑みを見せながらも、どこかその表情からは俺に対する憎悪の念が伝わってくる。いや。男の表情を見ただけでそれを理解出来るのは、俺がこの男を“経験した”事があるからだ。

「アーチャー、この男を倒しなさい」

遠坂の凜とした声が響く。

その声と共に、鉄と鉄の衝突音が教室中を包み込んだ。

「ツっ!」

手にした剣がガタガタと振るえ始める。

やはり昨夜に負った傷が問題だったのだろう。握りこむ手も、力を籠めているはずの足も、徐々に感覚を失っていく。

「終わりだ、少年」

男が、アーチャーが呟く。俺に聞こえるか聞こえないかというほどの大きさの響きは自分勝手に投げ出され、受け取り手のないままに霧散していく。鏑迫り合いが続く中、やはり男は納得の出来ないという表情を見せていた。

ならばと、俺はアーチャーの剣を払い上げ、一気に間合いを広げよう呟いた

「俺は殺されないぞ……正義の味方さん」

「——っ！貴様！！」

その言葉に苛立ちを覚えたのか、開いた間合いを一気に詰めようとする。俺もそれに反応するように後ずさりながら応戦する。一合、二合、三合。幾度となく斬り結ばれる互いの得物。時に火花を散らしながら、風を巻き起こしながら、その攻防は続いた。

だがこのままの攻防が続けていては俺の負けは明白。昨夜からの傷もそうであるが、絶対的に今の俺とアーチャーでは体力が違い過ぎる。だからこそアーチャーが、かつての俺が想像もしえない行動をとればいい。そのアドバンテージが俺にはある。

「投影・開始！」
トレース・オン

その響きを放った瞬間、アーチャーの顔が困惑の色に染まる。身構えた状態を崩す差ないことは、さすがとしか言い表しようがない。背後には剣の群。この光景を目にすれば、どれだけ否定していても納得するしかないだろう。俺は、かつての衛宮士郎と別のものに成っている。

「―――停止解凍、全投影連続層写！！！」

その言葉をきっかけに打ち出されていく数多の剣。そして俺は一気にその場を離れんと、教室を飛び出した。心配することはない、こんなくらの攻撃でやられるほど、アイツと遠坂は弱くはない。

西日に照らされていたはずの廊下は、既にその影を濃いものにしていた。あまりに時間を掛け過ぎた。そう後悔しながら、目的の場所を目指す。アーチャーならば必ず一人で追いつくであろうと信じていたからこそ、俺は後ろを振り返らずに足を動かし続けた。

セイギノミカタ（後書き）

一区切りということで、更新させてもらいました。

さて、ここから二人のエミヤシロウの立ち回りということで、期待していただけなら嬉しいです。

またご意見、ご感想ありましたらよろしく願います。

それではまた、次の更新で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8836q/>

終わりの続きに

2011年9月23日12時36分発行